

れりたどの言ながら大事の夫を恨ての濟ぬ事と思へども過つる年お別れまうす其時迄の復の逢せを樂しむ腹妊の子を大事よせよとの言葉なれば其御言葉のみを命とたのみて是迄の艱難辛苦も凌ぎおふせて嬉しき仰せも有事かと思ふ違ひし仰よ今妻てなし尼も成れのと御意なるか夫も之も約束事と諦らめて戒を授かり心を堅固よ今の今迄凡惱心の起ざりしが今も目見致おつけて斯く墨染の姿となり髪もあろせし其上お羅喉羅様の御出家姿をふと見よりも頻りお悲しくなりて折角保ちし戒を破らじと思ひ若や御側へ出し其時よ未練の心も起なば是迄守りし行ひも水の沫と成事ぞさのわらせじと勵てもく猶覺束なく思ひ過して今のはや心か心を疑ひて如來のお側へ出るのも中々お空恐し、飯の愛世の疾捨て身の無き者と思へども雪の降日の寒く覺へ山伏の日の暑くおぼゆるなり兎も角心の捨難し若如來のお顔を拜て我夫と覺へなば思はず知らず歎言を云出んも計られず生中なる覺顔よて耻見んよりも翠玉の緒の絶るをましと思ふ死しての愚痴も未練も出す逆も女子も生れ來る其罪業りの知ねども口と心の葛の葉の裏表よと思ひなして妾の是迄の行ひ杯の皆空事と笑ひ笑へ笑ひれても大事おし今誠を打明けぬれば我身が露と消たる跡もて頼む

只是れ羅喉羅様の身の上なり一旦世お立給らばは何よりの歡びぞよ其御恩をばあだし野の草葉の陰ふても忘れの置ぬ何卒ぞ偏お此の事を聞分てよと手を合せ頼む涙を曇り天も哀と汲取しり又も降來る雨の音おまめり勝なる此の場の仕業お優陀夷の女房も理よ詰められて成程細くこの仰せを承まれば御尤もおこそ私夫婦も何卒して貴方を再び如來よ侍けまいらせて又羅喉羅様をも一度の御所よ立んと思ふ心の暫しも携む間無れば先づ御短慮を止め給ひていざ先如來の御前へ羅喉羅様を出し給へ又好き事も有ぬべしと様々又言葉を尽して論しつゝ其坐へ腰元を呼寄て妙惠の尼を守らせ其身の羅喉羅を誘ひて如來の御側へ出んとする折から優陀夷殿の御入なりと外面より告知らするよぞコハよき處なりと夫も逢て妙惠尼の言葉を物語てそれは是の事め合しつゝ即坐よ夫婦の御前へ出まづ女房の言けるやう妙惠様よ早速お目見を致さる可きが聊か痛める事のおれば先羅喉羅様を以て御機嫌を伺いせらるど羅喉羅をお前よ進すれば如來の見つゝ打笑みてテ、羅喉羅なるか日又増りて賢き面ふりなり末頼しきことよこそ母の如何なる痛なりぞやと問せ給へど唯平伏てさめくと打泣つゝ只管母上の身を案じ給へば女房の膝を進ませて妙惠様よ此の程の



行ひ堅固の御身と成り給ひて天晴の聖と成らせ給へば御心安く思召せ御痛のりも些の事  
 と述る言葉の終らぬ中又扱ひ妙恵の世を去りしかアラ勿体なや中々又左程の御痛のりも  
 侍らす何を以て左様なる不吉の事を宣ふぞやされば未だ世は有る者ぞば天晴の聖なり又堅  
 固の身杯と言ふ事なけれ頼み難き人の心こそままして女の若比丘が一端戒を守りて息  
 るとの無きも非ず先必らず娶る者の極めて後の誹わり夫らの例しの有し事を今擧げて  
 物語らん開も我々が前の世の烏龜夫人と云ふ者ありて若き時夫を失なひけるが貞女の再び  
 夫と逢すと愛世を捨て人も通へぬ深山と庵を結びつゝ朝暮亡夫の爲は花を摘み水を汲て昔  
 提の道を堅固お勤め三十年余り行ひ澄せばいつと無く其尊き名をば聞傳へて信仰の者も日  
 り増て群集なし終り其庵の邊お繁りし殺も人の往來お踏み開りれて一ト際立し道の付し  
 り是善根の爲處おして人の音信れ途絶無く法などを受て敬し或日二九の年頃なる美童の  
 來りて法を乞しよかの女の是迄生佛とまでよ言れし身の堅固も忽ちお砕けつゝ美童を庵お  
 どいめて人知れず枕を交して樂み暮せば早其朝より夫の菩提も打忘れ折々の酒など求り市  
 り通へば信仰の者も最之れを怪みて心を付けければ件の譯の顯れて自然お音信者の絶はて

又元の歳とはなり果ぬ然れば二人の早や其日の食物も乏しくなりて終り其庵を立去て  
 近國なる市の末まで豫て貯し布施の物を賣換ひ杯して些かの烟を立て有けるが又もや食  
 物の盡たる期お至て美童の其女を振捨て行方知れずお成しと云ふ是ぞ則ち末世の女の身の  
 誠め又天道の爲給ふ處なるが彼の美童こそ全く以て外道の成る者ならめ然らば愛世も息の有  
 者いつ何時お心變じて如何なる者となりもやせん能く慎むべきとなり附ては鹿野女の  
 如何なしけんさればこそ鹿野女様の御身持の甚だ悪きとのみおて誰人の口の端おも開りず  
 し侍ると最苦々しく聞え上れば扱ひ鹿野女も早既又此世を去りけるもやイエ左も非ず最御  
 無事お坐ませども先耶輸陀羅さまの上を濟せて後又逐一聞え上ると云ふもぞハテ今も言し  
 如く此の世お有中お悪人と定けるこそ不審けれ死お近きも臨て初めて善ども惡ども定むる  
 ものなり尚ほ其例を語り聞さんお是も我前つ世の事おて有しが能く聞かじ難足山の山續も  
 幽影谷といふ谷あり此谷の國々へ通路宜處なれば夜中といへど旅人の往來へ更らお絶間  
 無れども跡先の宿遠して人家は千町お一軒もなき山道おれば此處も嵐士といふ山賊の住て  
 毎々往來の旅人の貯へを奪取て五十年來只惡事のみを世渡りおして暮しゝお或時獨の法師



を捕て路用の金の袋を奪ひ開きて見れば此の如何の中ふの金と思の外たゞ一本の巻物のみ  
 なればあきれ乍も之を開きて見てけれども中々も讀ざる文字のみなれば法師の前へ抛け出  
 して大膽なる法師哉汝今命を助け呉よ其の替りの懐中せし百金を渡さんと云し此が何  
 の百金なる予我が目よの讀されども半銭も足らぬ反古なり此を渡して送んとするも豈放  
 ち遣る可きぞと言つても刃を抜放てバイヤ暫し待れよ其謂を語るべし我幼きよりして溜  
 る金の百金も満るが故も多年の願を達せん爲其金を以て其一卷の妙なる經を手入て今古  
 郷へ歸る途中なり其巻物を奪ども讀ぬ人ふの半銭も足らぬ反古なるが我らが爲よの千金  
 おも増りたる法語なり人よ依て益不益有ぬ我百金も代たればこそ百金といやせしなり聊  
 偽る心有れば百金の金を以かゝる物を求めせず少しも願せず答へければさしも一文不通  
 の山賊なれども其謂れを聞たく思ひてうさらば汝ち年來心を盡せし百金もて求めたる一卷  
 の益といへるの如何んぞやされば此一卷の御經を會得する時の千萬金の寶を得るよりも廣  
 大無量の徳もそれ其徳といふの先人間縁の世も生れて福者の少なくて貧者の多し娑婆  
 の樂の樂も似て此れ誠の樂も非ず先づ樂を求るよの身を苦しめて寶を求め開を以て思々の

樂を求めども此の一卷よの人間界も無き誠の樂を知らざる者も悟らざる結構なる寶なり目  
 前是が金ならバ我も身を放ちのせず其方も取らず置く可か我の身を殺る、金を以て此の一  
 巻も代り則ち身も安全おこそ其方も罪を作せず人の取る寶の之れ誠の寶よの非ずして猶  
 身の敵と言ものなり扱今其仔細を譬て言バ此一卷を金として其方が今日之れを奪ひ取ると  
 も明日の命終りなバ人を惱まして取たる程の益とての有まじきも取たる金の此の世も殘  
 して死出の土産の罪計なり夫れよりも先其前國の檢非違使も捕れて命を金故も取れなバ  
 則ち金が身の敵なり遅うれ早かれ終る身を知て山賊をする事か人の命を取たりとて己が命  
 の足よもならず愚な慾も此れバ我の増たる大慾もて死お行く先の先迄も貯らる、寶を求む  
 るなりア、思へバ其方の却て慾心の淺き人うなど辨舌泥すして建板も水を流が如くお論せ  
 ん嵐士の忽ち刃をからりと抛捨て寶も愚なりし迷たり我今迄其大慾も心附ずして纒か娑婆  
 の慾のみ纏れて五十年來幾人うの金を奪ひ又人の命を害せし事も數知ず名を山賊の嵐士  
 とて遠國も迄知るれば子分子方も亦多し今年に既も六十一の坂も最早下り際なり長生する  
 も八十か但し百の限りもあるお何を目的も寶を集るぞ然り乍ら愚なる身よしあれバ唯山



賊の面白さお無益の寶を奪し今悟りたる上らり我罪障を顯す可し如何お御坊其片邊の  
 岩を掻遣て見給ふべしと教られ彼の法師の力任せお岩を放退て中を斜み伺ひ見の金の袋  
 の若干有之見つゝ驚けお嵐士の完爾として打笑て言やふ其金の是迄又長く人々を害して  
 奪取たる寶なり之れを徒らよ土中埋め置も詮無れば今日見參の布施として残らず御坊お  
 參せん何卒其一卷の覺りの法語を詳やかみ讀み聞てたべいうてくんと手を摩つゝ頷を地よ  
 附て只管又敬ひ頼む有様の如何おも惡念頓悟發起の心顯りければ法師も心よ感じつゝナ  
 善哉善男子望よ任せん好くこそ聞けかしとて彼の一卷を開きて大音よ讀けるやう抑も大  
 石重と雖も乗せて渡せる船有バ水上おも軽く浮ふなり敵城強しと雖も火を以て攻る時ひ忽  
 ちよ灰燼となる夫船と火の法也人間ひ五逆十惡の罪有と雖も法を歸して一念發起するお於  
 ての其罪の即滅して未來善所よ至る事更お疑ふ處お非ず云々と讀む其折柄アツと玉ぎる一  
 と聲よ法師の驚きて嵐士を見つゝ這は如何お已よ刃を腹へ突立て一息ほつとつきつゝも痛手  
 お屈せずして言けるやうイヤ御坊驚き給ふな今我れ自殺せしめ長の年月人を害せし及よて  
 此身を殺す一期の言譯なり之其敵を取るゝ道理ふて斯あり果て此迄の罪を購なふ意るよこ

そ何卒御身の其金を堀出して我爲よ未來を吊ひ給られかしいて手下よも此の形狀を見せて  
 果敢き慾を戒しめんと相圖の笛を吹立れお彼方此方の木陰より數多の手下が走り出て嵐士  
 の形狀を見るよりもコハお頭の如何せしや其生害の何事ぞ是なる法師の業なるかど皆取巻  
 て立騒げお嵐士の臨終の聲を勵まし云々と仔細をつけて今此の法師お我が年來貯へたる金  
 を渡せば汝らも必ず心を改めて法師となりて今より養はれよゆめ我言葉を叛くまじと言を  
 此の世の名残よて果敢く息の絶果ぬ夫よりして法師の件の金を手下ども堀出させて其穴  
 へ嵐士を埋め頼て若干の金を散し其處へ嵐士の爲めよ石塔及び大堂を建立しつゝ數多の盜  
 人を法師として一生涯を養ふ程お彼らも皆能く勵て水を汲薪を伐り又暇有る時大道へ出  
 て行來の者へ肩を貸などして人馬平安の山中と成るお國の守之を聞て法師の徳を深く尊ひ  
 多くの布施を施して今已お山中殊の外人家の繁て禍ひなきとぞ是嵐士の惡心より起る處  
 の善道よて五十年來盡せし惡も一昨日よ善人の名を末世迄又残たり穴置我れとても息の  
 有中いつの魔道よ碍げられて惡名を世お受んも計り難し誰も彼も死ざる中善惡の名を究  
 め難し若し今妙惠こし方の身の上を願て又もや凡心お翻るども我豈よ彼か心お隨はんや散



花有ども誘ぬ水よの愛名を流とひあし急ぎ妙恵を此處へ誘引こよと宣ふを聞より優陀夷夫  
婦のいと細かなる御論又感じ入つゝ女房のやをら立出て納戸へ行き妙恵の比丘尼を誘引て  
御側近へ進すれバ妙恵尼の唯さし俯きてやるせ涙よくるゝのみなり如來の言葉を和らげ給  
ひてアラ久しや妙恵比丘我論を能も受て堅固の身持満足せり其方の心直ほなれば我行ひお  
も妨げ無く已は正覺を得て亡母の吊ひをもいや勤たりさぞや嘸我か論事を恨みかこつ事も  
わらんが开の好らぬ事ぞかし其方の是迄苦患を受て辛しと思し事どもい我れ能く知り侍り  
ぬさのあれ之れを我が難行又比ぶる時の千分の一おこそ其方のそなた一身の苦患なれども  
我の三世又生ある者の苦患を此身一お引受たりしいつぞや檀特山の阿羅々仙が許し有し時  
夢中其方お逢たるが其方の知りしか知ずや其時の難行苦患の中々物の數ならず我が難行の  
形状を寫す鏡も有ならバ其方の恨も晴る可きよア、是非も無き事ぞかしと宣ふ傍お優陀夷  
の差寄さて私事此處へ唯今推察致せし余の儀もても候はずいつぞや帝より詔りも有たる  
如く何卒如來世尊の御世を繼て万民を撫育し給ひ御父上の御安心を以てもや只管願まつる若  
し此儀叶はずバ此羅喉羅様を以て御所を繼しめ給ふやう是群臣らが願ひ侍りと折入て聞へ

上れば世尊のいと、痛心げおハ又思ひも奇ぬ事哉夫らの詮議の過し頃難陀は定て濟たる  
ものを何故又再び夫を言やされバ候其事の詮議の今又兎お角止ざるの難陀太子御所より立給  
ひ下として上を侵す禍いも起る可かと介意む族多ければ又々申上る事よこそイヤ其儀の  
叶ふ可らず我の勿論羅喉羅とて一旦佛門お入たる上の國政を執せん事の思も奇ぬ事ぞかし  
又難陀の悪き身持の我能く教授を加ゆれば安心せよと無情なく事の切たる仰を聞て女房の  
おめる色もなく若志からんよの妙恵様も羅喉羅様も此儘おて世よ出さるゝお心の無や親た  
る者の子を恵み夫の妻を哀む事への勿論鳥獸とて其心の無のわらじ如何足のぬ私らぐサ  
事とて理は當らバ彼是の中一なりども取上させ給ふ等なるよかく醋よく宣ふ事も是迄の何  
卒して皆くの願を叶へ度思へバこそ事お障らて置たるが今日の幸い傍りお人もなければ  
密々よ上しよ最早や頼の綱も切てい此迄夫婦が心尽しも水の泡となり果たり兎も角お  
も此の御二方の行末々の御身の上こそ思ひやられて御情なれど聲を放て打泣バチ、其言の  
尤もなりさの有れ妙恵の猶我妻なり羅喉羅の我子よこそ何を以て二人が爲の悪かる様よ致  
可き謂れなし汝らの唯眼前お絞錦を身よ纏ひ太子御臺と崇めらるゝを好と計し思ひ愚なり



さて今其例を示さんよも譬へ無くバ分るまじき何よぞ好き物や有らんと見回し給ふ軒端  
 お巧を尽たる燈籠の有を指さし給ひアレわれを見よわれこそ好譬なり四季の花を鮮かふ  
 鏤めて女と童子の戯れ居るなり女の妙惠童の羅喉羅と先准へて見らる可し扱あの燈籠の麗  
 しきも火光の消れば色即是空よて一物も無闇となりぬ又火を點すれば空即是色の姿を顯し  
 如何よも興有さまなれ共無常の風の誘ひ來バ目前消もすべしよし左無ども些少の油の保  
 程なる樂みと思へば敢果なき夢の世ぞやと論る、折から颯と吹來る其風又燈籠の火の打消  
 されて傍の闇と成ければされバこそ今も已言し如く斯火の消てハ花も人もいつこあり在  
 るぞ其方等よハ見ゆるや如何お斯るを以て人の命を昔より風前の燈火又譬へ侍るハ爰ぞか  
 しされバ之を示して仮初なるあの燈籠の憂世の樂を振捨て無量劫の限も無き彼の寶燈の光  
 有樂しき國へ導かん开も無量劫と言事ハ計なき事なり一劫の譬も二ツあり先づ磐石劫と云  
 るハ四十里四方の磐石を命の長き天人が三年一度天降て撫摩り其大いなる磐石を撫盡す  
 時を以て一劫といふなり又芥子劫といへるあり此ハ四十里四方の城又芥子を一杯満たしめ  
 て命長き天人が三年一度づ天降て一粒づ拾ひ盡す時を以て一劫の定と爲す一切十を

百劫といひ百劫十を千劫といひ千劫十を万劫といふ一劫てすら其長を思ひ計て見らるべし  
 さりわれ万劫も其限り有ぬ夫おも増たる無量劫の樂ハ欲からずやと言葉を盡して示し給へ  
 ハ皆一同お感服して返す言葉も無き中お優陀夷ハ獨り言葉を改めていつもく有難けれど  
 今日の御論ハ殊更お眞身お答へ侍るなり足ハぬ夫婦がここち言を偏ハ赦させ給ハれりし最  
 早仰を御二方ハ更なり僕れども、決して叛く由ハ之有間敷いと述べ世尊類笑み給ハ扱ハ  
 能く聞分たり此方も安堵の至なりさらバ明日ハ難陀と羅喉羅ハ示す事の有れば二人を我天  
 上寺の法堂又來らしめよ今宵ハ先是までなり妙惠比丘又逢ハん皆々さらバと言つハも其坐  
 を立ち給ひて直様阿難を御供又連られ青龍殿へと歸らせ給ひぬかハりし程ハ其朝又至りて  
 優陀夷ハ何かと計ひて世尊の坐す法堂へ難陀太子と羅喉羅の君を赴かしめたりければ世尊  
 ハ如意以て差招き共ハ獅子の高坐又着しめつ、今汝らハ示す事の有り先目を閉て我唱る秘  
 文の終を待つ可しと教へ給へバ二人共一心ハ其仰を守て待間程と無く世尊ハ御聲高く二人  
 が名を呼せ給へハ難陀太子と羅喉羅ハアツと答てふと眼を開つ、傍を見て打驚き言葉を揃  
 へコハ不思議や何の間よかハる山路お來りしぞ最不審と宣ハハされハ爰ハ婆羅奈國なる高



盧山の麓なり既も日も暮れたればあれなる家も宿る可しとて世尊の二人の手を取給ひ傍の  
 家の一間ふ入て今宵の爰も休らへよと御身も安坐まじくければ二人の太子も傍に在て思  
 はず共々睡みしが暫ありて夢の中も人音聞近く聞えければ二人の怪しみ何事やと次の坐  
 敷を覗見れば此家の主人と覺しき者が痛く惱み悲しむ側ふ仙人と見ゆる者家臣の者も言け  
 るやう君の病の宿業の爲處の難症なれば我も早やと取る可からずたゞ一生お憤り怒らぬ  
 人の生肝を呑しめなば忽ちも平愈疑ひ無と告るを聞て臣下の者ならん詮無事をぞ云ふ人生  
 れて誰れ怒らぬ者の此世ありて有べきや虫蟲てさへ答をかざせり其角及び鬣を動かすの  
 是怒の証なりされば虫蟲の生肝を取も彼れも已に怒れば後立難し世も無き藥を求めんよ  
 り寧ろ不忠の似れども此國の習の如く帝を流沙河へ流して太子を以て世に立んと評  
 議一決志たりしを奥方の之れを聞つけて太子を連出て開は此國の習の如く夫を河へ  
 流を妾の見るも忍びぬば此身も共々流沙なるうき河へ捨られて今より其方と長き別となる  
 と云つゝもさめくと泣給へり太子も暫し嘆りれしが暫有て母と打向ひ其藥の手も入ん  
 事御心安く思召せよ我より問もなく献ずべしと事も無げ承がひて退きしが程も無く侍女

を以て藥を差上れば奥方の歡び大方ならず急はしく病も君も飲せけるも仙人の告も少しも  
 違はずと平癒お及しかば有合ふ者共々歡び勇みて國の榮とさめき渡と太子の未だ出ら  
 れぬに急ぎ呼せ給ふも暫く有て女どもも涙ながら太子をいだき抱て爰へ立出つゝ母御も  
 渡せば奥方の女中共の涙を盈を見て這は不吉なりと言つゝも太子を受取てアラ大優なる太  
 子りな斯る目出度折柄も見ぬを殊なふ案せしと睡眠けるかコヤ太子と呼ければも更お答へ  
 の無ければ奥方の不審お思ひ太子の身中を其處此處と改め見てアツト叫て伏轉び人の事か  
 ど思ひしお状が生肝を取たるよなど聞よりも一座の者ども限りなく泣悲しむ其の諸聲も  
 難陀太子と羅喉羅の共々夢を覺せバコハ如何も元の山路の岩お坐して傍は家杯の無き儘お  
 驚き乍ら世尊を見奉れば草花々ど生い繁し其の中は幾世をか經て苦熱たる一の卒都婆お打  
 向ひて禮拜して坐せしかば二人の太子の近寄て愛の形狀を逐一告げ聞えて不審の由を尋れ  
 ば世尊の之れお答て宣ふやうチ、其不審の實お尤なり爰へ開も我が三世の前お波羅斯那城  
 の有し處おて今夢中も兩人が見たる惱みし主人の時の帝慈明王と云ふ者なり御登の名の好  
 香夫人おて太子の名の金色なり我其方等も子として孝を願へき專要を見せしめんが爲お



顯せり之を手本お孝行の尊き事を辨へよかしそれ其處も今も尚ほ濁たる池の中お開し蓮の華こそアノ如くお金色の光を放ちて太子の其名の末世も清き譽を殘せり是此池の其時よ太子の血汐を洗ひ清し波羅斯那城の庭の池なり扱又爰も有る卒都婆の彼の金色が父の爲お命捨しを哀て一千本の卒都婆を造らしめ其菩提の爲も建れし一基の残りて今尚ほ茲もありぬ又其時の金色太子の三世過るも尚ほ國王お成る可き因われバ今我が父王お生れ給ひて波羅斯那國も百倍する迦毘羅城の主人と成バ慎み敬ひて拜す可しなきだも卒都婆の功德の數ふるも遠き非ずと示し給へバ二人とも打驚きながらもまた大に歡びて孝心の教諭を最と深く信じて禮拜しけれバ先卒此方へとて世尊の其場を立給へバ二人の御跡も引續て歩む事さながら空飛ぶ雲を踏て行くと思ふ計なりしが暫有て森々と繁りたる深山お差かゝれば高木を吹く其風の音の切まお響きて凄然と難陀太子の生存たる心地も無し立止まりし中圖らずも世尊と羅喉羅を見失ひて最心細くも遠近の谷間を尋ね求る其處へ大なる女猿の飛來りて媚容まゐて難陀太子の腰お抱き付て鳴き叫ぶ其様ハ喜ぶ如くも見けるが難陀太子のこれを見て生たる心地も無くして逝んと爲も更も放たて頼りお志なだるゝよぞ此方ハ最と

困じ果て顔を背て唯一心お世尊の御名を唱へつゝ助給へと呼りければ、我れ爰も有ぬ急ぎ來たれと云ふ御聲の聞ければ彼方を見れば紫雲の上よ世尊の羅喉羅諸共も在して此方を見下しつゝ招がせ給ふを見るよりも最嬉しく力を究めて漸くお女猿を振放し息を限り山路を走りつゝ世尊の御側へ近づきてノウ那山の何とぞかやぞ辛き命を助しと溜息つきて言を聞き世尊ハ完爾としてテ、彼なる山こそハ雪山の猿が峯なり汝さまでと驚くまじ那猿ハ之汝と深く契る因の有が故も執ねく慕ものおこそと宣ければコハ心得ぬ仰せ哉我れ豈も人間の身を以て獸と契る因み有んやヤア愚なり斯る事の通れかたき由縁有をこそ因どのやすなれと示し給へハ扱の遁し事の嬉しさよと唾吐して歡びければ世尊ハ阿々と打笑ひせ給ひて時よ汝も問事の有ぬ是迄破利舍那殿の中なる侍女らの貴賤を撰ばず不義淫ら爲し其中お名を何と云たる女が其方の氣も入たるや包まず夫を問うせよかしと宣ひすれば顔あからめて一句も出ず只俯きてありければ、白地おも言れまじ言ずハ夫迄なり然り乍ら心も叶し其女と今の猿とを比る時ハ何れが優り劣るぞや开を聞へしと責め給へバ難陀太子ハ頭を掻ながら面目無げも答るやう开い仰せ迄も無じ破利舍那殿の女共も比れば猿の方が劣り侍るなり最早



其御尋の何分免るさせ給へかし夫よりも爰の又何とす處もや斯く七寶を鑿て造り磨し宮殿の中も如何も妙なる音楽もて歌舞の響の聞る事は是れ人間界とは思れず开も何國ぞや教示給へされば爰ぞ名しあふ天上の都もて常お斯の如く遊び樂しむ天人界なれト示し乍お猶ほ近く進み寄ら高殿より獨りの乙女があどやか階を下りて傍りなる園生の前もイミたる其粧ひの麗しき管ふる物も無れば難陀太子の立處も早や凡惱心の兆つゝ斯る乙女を妻お持たば百年の我が齡も唯一日お縮まるども惜からず杯胸お浮ぶを世尊の見くも悟り給へば如何お難陀彼の乙女と汝が豫て心を懸たりし破利舍那殿の女子を比れば何ぞ優り侍るもや然れば候此乙女お比る時破利舍那殿の侍女共に見劣して最前雪山の猿の如くお思ひる可し开もあの乙女の如何なる者を夫と定めて侍るぞや否我争て开を知る可き強て知らま欲く思ひ自ら乙女お聞ねかしと宣ひするお難陀太子の浮りれ心の願なる折なれば耻る色も無く處女の側も近よりて衣紋杯を掻い繕てノッ夫も坐乙女も物訪さんと云ふ聲お件の乙女の園生の花を摘居たりしが振返りて見交す顔の麗しき身も縮む程なる艶態なれば愈心を空も爲して近頃ろすし悪けれ共其方早定れる夫のお坐り如何ぞやと問ければ乙

女の笑を含みてコハ思ひかけも無き耻かしき事のお尋ね哉爰はよのばや定まりし夫の速よりお坐なりと答れて味き無き面もちせしが猶ほ止み難くしてその無樂しき事ならめ其服子の開も如何なる人ぞ斐りさき者なれば芳しき名を聞かま欲しと言ひ處女の耻かし氣も差俯しガヤ、ありて然ればよや妾が夫とすの今南閩浮洲の中なる迦毘羅城の難陀太子なり此君八十の齡終りて淨世下界の凡夫を轉じ此の天上お生れ來て樂み其が心も任する時妾は妻となり侍る其赤繩を結びたり構て人とな語られなど微と笑たる面さし難陀太子の身も鏢るかと思ふ計お打歡びシテ又其方の其花を何の爲も摘み侍るもやチ、其謂れを語べし此の花の名の萱草といひ又宜男艸とも呼て女子の此の花を懐るも置べ求ずして好き男も目見え好き男子を産が上お愛事忘草とも言ば共戀て侍る身より待身の憂き獨寐の年月長き其の戀意を晴んが爲も年々此花瓣一重づ、摘み貯へて其夫を戀する程も中々天上界の樂も猶此の身も添ずと語る處へ一人の小童出來て今日中の舞樂始る由を告れば處女の驚て今暫し語へんと思しおのや妾が役の舞樂初る由なれば暇すもぞと言つゝも立て行儘も氣を空蟬の脱去たる形も止めず入り行跡を最名残をしげ見送り居りしが不圖心附て身を起し世尊の



如何と見返れば遙かなる彼方又待ち給ふおぞ急ぎ走りて近附つゝ其の傍ら又跪きて唯今彼の處女は向て身の上の事を尋じよ彼れの磨が後の世の妻と定る者杯とせしぐ開の誠まやチ、夫こそ其の偽りならず汝が能く孝道を勤て國家を治なば未來に必ず天上に生れえて彼の天處女を妻と爲事の決して疑ひ無し構て忘る事勿れ開の歡しき事なり後の世迄のもどかしし何共自儘の願なるが世尊の神通不可思議なれば今彼の處女を下界へ下して我が御臺と爲給のれりし然ある時の身を慎み能く孝道を守る可しコハ又由無き事をぞいふ今彼の處女を妻とすれば一心又夫のみ又執着して身を忘れ世を忘るゝ禍ひの本となりぬ故に能く孝道をさへ勤れば究て妻と定るものゆへ後を樂み居るべし夫よりも先此方を見よと北を差して摩迦薩如意をめぐらし給へば奇なる哉山嶽忽ち鳴動してあたり一面は黒雲の覆ひて物の文目も分たずお成の難陀太子も羅喉羅も大に打驚き爰の开も如何なる處と身を震ひして世尊は寄添ひ御衣を取すがればチ、驚くは尤もなり此下界ある地獄とい言なれ抑も地獄の元來八ツあり之お寒熱の二ツあり是を十六の大地獄といふ其一々又十六の地獄あり是等數多の地獄を合すれば凡そ二百七十二の地獄の眼下ありぬアノあれを見よ罪の重き輕きも依て或

紅蓮大紅蓮等活叫喚阿鼻の責苦等最恐しくの思はずやと解論されて二人共身の毛戰慄して居けるが其の時羅喉羅の世尊は打向ひて誠と爰の恐しと言も中々愚なり時は彼なる大熱も取分け苦む二人の餓鬼の如何なる罪の有者よやと問けれは世尊は點頭給ひつゝ、彼れこそ其の昔し我迦毘羅城に生んとして母摩耶夫人の胎内にある時今の輪囷彌が母を嫉みて附人馬將軍を談ひ母の體を調伏させし儀伯仙無間仙といふ行者おて侍るなり今目前の幸ひは輪囷彌の惱の祈禱よ彼の二人を濟し取らせん南無奇妙極罪即滅と宣ひながら御髮の毛一筋を小石お縛て苦む中へ投げ給へばあら不思議や其石の飛去て彼の罪人の頭上お至れば一瓣の蓮華お變して光明赫耀と光を放つと見えしが儀伯仙無間仙の忽ち大苦を免れて世尊を拜して失ふける此時傍の罪人ども、其の光明お照されて數多の苦患を免れしは實に正覺の大功力おて尊さ限り無りける難陀太子の世尊は向ひて彼れなる山の上お赤き鬼と青き鬼とが未だ二葉なる木の苗を植て居り如何なる仔細なれやと尋ねしや眉根を擽めチ、早汝も見留しり我の已は最前よりも之れお心を痛めて居たるなり尋ねる上り其の仔細を語り聞せん能く聞ぬかし彼の鬼共が今二葉の木の苗を植ぬるは汝が來世に尊くも天上お生る徳の



有なりら固より淨世の塵も染まりて更み信心の心なれば唯彼の乙女の麗しきを求めんと爲る慾心のみなれば頼て天上の快樂も失て身も三熱の苦を生じて終る墮落爲るに至なり其時に那二葉の木も苗も既も大木となれば其を伐りて汝か足械手械を造る爲の設けぞりしと告給へり流石の難陀太子も立處も發起してアラ怖しや何と爲てか其禍みを免る可きぞ論給へと打詫れば左社あらめと世尊の見返り給ひて今其の大難を免たくの先淫慾を堅く慎みて誠の信心を起すべし其得心せり此方へ來れ誠も天も百倍する好き後の世の在所を見せんと直西の方へ赴き給ひて又如意を廻し給へり黒雲の俄も晴れ渡りて忽ち七寶の宮殿の華麗かよ建ち並て又其廻り漫々たる池水の淡々として波を立す今を盛の蓮華の咲満て其の景色の天上の美麗も千百倍優て見えければ二人の恍れて开も爰の如何なる尊き處もやといぶかれ世尊の莞爾として然れば爰社善所の源となる謂る西方極樂國なり娑婆もあらゆる貴賤を論せず物を殺さず物を盗まらず慈悲善根の輩の後世の皆な爰も來て無量劫の樂み盡る事なし扱此の國の主人をば則ち無量壽覺とすなり开の測量なき命と訓じて殊も目出度御身なり左右の觀音勢至二菩薩の帝も坐して共衆生を濟せ給ふの恰も帝も左右の大臣立並ひ

て補佐爲て國政を執ぐ如し穴賢しと宣へり難陀太子も羅喉羅も感服しつゝ共此の身くが後の世の住家の爰も限りたり導き給へり願ければ然らば難陀の此れ迄の惡心を斷へり孝道を盡し國民を能く撫育致すべし又羅喉羅の念々俗塵の念を斷て飛行を保つべし先々教示の此迄なりと宣はすればあら不思議や今日淺々の事を見しと夢の如くも覺て猶ほ天上寺の法堂なる獅子の高坐も坐し給ひぬ然れば世尊の神通方便の中々凡夫の智慧以て思ひ圖る可き所も非ずぞりし

釋迦八相倭文庫三十九編終



釋迦八相倭文庫四十編

扱も亦阿闍世太子の様々に工風を廻して彼方此方を語ふ程に一味の者も多く出来ければ何卒提婆に面會してよろづの謀計を示し合せんと思へども國中を出る手筈あければ餘義無く頻婆娑羅王に偽りて此頃聊か痛みも快よく覺え侍れば久敷部屋に籠り居たる其鬱氣を晴しやん爲纒の供にて近國に赴き獸狩なして氣を養ひ度存ずれば何卒暫し身の暇を給ひければ願ふを聞月光大臣深く之を怪しみけれ共何分帝の獨子なる阿闍世太子の事故何にても心任せ爲る可しとの許しわれば月光も流石に之を留め兼獨心を痛るゝ引替て阿闍世太子の限無く歡びて潜に提婆へ使を以て何日我の城中を出て獸狩に事寄て密談仕度由有れば憚かりなから伊奈利國なる香山へ御出向給ひければ其日を定て知せしかば提婆の殊なふ歡びて然らば仰に任す可し其期を違給ふなど返り言してければ阿闍世太子の何異と用意し借て其日となりければ未明より王舍城を立出つゝ伊奈利國の香山に至りて些か獸狩の陣を張り且鬱散の爲に携へし酒肴を取開きて服臣の者と汲交し提婆の來るを待ける内に附隨ふ者の氣儘酒も早酔て最浮れつゝイデ一狩倉仕りて好猪鹿の獲物あらば夫を肴に又一入酒もすゝ

まん如何すと噓き立れば阿闍世太子も亦夫れこそ宜らんと立上り然らば疾く手配りせよと馬に飛乗り強弓に征矢携て乗出し獸の巢窟の此邊をと思ふ繁みの山顔に馬を扣て立ければ勢子の者ども右左より芽萱笹原の中を分つゝ聲諸共に鍾太鼓を響りして追立く右往左往に騒げども所有獸の扱置て虫の影さへ見えざれば有繫は短慮の阿闍世太子の怒りの眉根を逆立てコハ兒戯たる骨折なり然らば是より皆々手を分て思々の處に赴き勝手次第に獲物をせよ我も一騎にて馳廻り好物狩獲て見せんすと其場よりして近習の者及び勢子にも立別て唯一騎鞭を打振鎧を蹴立て獸の道を彼方此方と見回して尋しに一叢繁りし笹原に猪鹿杯の通りし筋かど見ゆる處のありければ扱ころ得たれと小笹を分て尙其奥深くへと馳行て遙の谷底を望見れば谷川の岩根に絶りて大なる獅子の水を呑居る其影を見るよりも得たり賢し我れ一先に此を獲捕て人々の目を驚かせんと強き弓は征矢を蓄へて進まるゝ丈近寄つゝきりく引絞り切て放てり過またず射留たるに氣の勇めども其處よりして彼の岩根まては容易に行こと叶ぬば其處此所と道を尋ね漸くよして谷間へ下りて件の獲物の傍へ近より見れば獅子に似たれど其様の頗ぶる異ありければコハ獅子の却を経たるもの平ア



ラ歡ばしと馬より飛下りて手綱を小木に結びつゝ、太刀の鯉口くつろげて尙ほ近寄れば彼の  
 獸ハ此方を見向て云ひけるやうアラ恨し、开も我を射留し、汝よなど叫ぶよ阿闍世太子  
 ハ打ち驚きて扱ハ獸に非ざるか此にて些か思ひ當りぬ假令念力籠たる矢どの雖も夫獅子ハ  
 百獸の長たるものあるに只一矢を受けて弱る可に非ず殊に我乗たる馬は駿馬なからも豈獅子  
 を見て匆卒に近寄る事なるべきや然ながら汝ハ此獅子の部類を免かれざる事ハ其著たる  
 皮にて知れける斯なる上は仔細其名を語る可と言れて件の者ハ起直りてさればなり問れず  
 ども如何てか言て止む可や开も我ハ此の香山に於て年を経たる事凡そ二千歳なり名を阿私  
 陀仙と呼て常に雲に駕して赴く處我が心に任せぬ方もなし然れば社過し年迦毘羅城へ招か  
 れて摩耶夫人を相せし時九十九人迄は夫人を病と言しに我のみは皇子の臍胎と星を指たる  
 に違ひ無く悉達太子の生れ給ひたり又何日王舍城へ呼て頻婆娑羅王の御臺ある韋提希夫人  
 ハ已に四十及べども未た一子の無き其因縁を尋ねられて其子となるべきものハ靈鷲山に  
 在る正舍利仙といふ者なるが此者未た三年の壽命を保てば今より後三年の月日を過さねば  
 死て王の子といなるまじと論しければ頻婆娑羅王ハ老衰せしかば三年過るを待兼て直様家

臣なる龍角に命じて彼の正舍利を殺せし固より天命の死に在ねば直ちに再生ハ爲たれど  
 も惡心なる子と生れたり今汝の相を見るよ正しく正舍利仙の面さしあり万一王舍城の太子  
 にい非ずや如何と見通しなる言葉を聞て太子は驚きあうらいうも我ハ王舍城の太子にて  
 名を阿闍世といふ者なりと告ければ扱こそ其方の父なる頻婆娑羅王は我が告たりし其の如  
 く天命の盡る期を待たば正舍利何ぞ恨を殘さんやさすれば父母も好き子を侍て國家も長  
 く榮ゆ可き又横死をさせしものなれば汝ち即ち遺恨を以て父に仇し又我を殺す其因縁斯の  
 如し我好につけ惡しきにつけ正舍利仙の事を告ずんば我人共に禍ひの身に及ぼす事ハ非さ  
 るに今已に斯くの如し然れハ口ハ禍ひの門なりと言こそ誠なれ思はず知らず今身に矢を受  
 けし自ら作りし惡報あれば是非も無しと嘆息するを阿闍世太子ハ之を見つゝ、ろハざる事に  
 もあるべきが功德勝れし仙術ありて夫しきの難儀を知らず免かれざるハ如何にやと詰れ  
 ば阿私陀仙は打點頭其疑いは尤もなり通力自在の身にしめれば如何禱斯る災難に遇ふべき  
 謂れある事なし然る處我ハ一命の今終る時や至りけん最前渴は堪兼て此の谷川の水を以て  
 咽喉を濕さんと岩根に寄て水上を望つゝ、最清らかなる水の流を詠めて樂み居たりしに不思



議や水面に麗美ある天女の姿の顯れしに思はず知らず見とれつゝ我を忘れて餘念も無き折  
 柄身の通力を失なふたるとなるべし然らざれば凡夫の矢先の争此の身に立べき今斯なる  
 も亦因縁あり今汝り獅子と見し此皮衣のあれなり扱此獅子の皮衣即ち汝り宮にて頻  
 婆娑羅王に正舍利仙の事を論じたる當坐の褒美の送り物なり我れ是を著ずんば斯果敢なく  
 なるまじき生憎も之を纏ひし故に汝り矢先を身に受けて死するは是れまた天命の遣れぬ  
 報ひずりと恨み人にあるとなし然あがら悉達太子の過去の血縁空しうらて正覺を遂げ給ひ  
 て今専ら法を説せられ人間を化度あらせらるゝに一度も其法坐に逢ぬのみ唯口惜く思  
 へるゝなり开も仙人天人の別ちなく其術の盡る時に終に墮落の身となるものなりア、二  
 千年を夢の世と思ひ廻せばまの程残り多き今目前に坐すところの佛も拜せず果てる  
 と此も我身の業因哉と見張る眼に血を濺悲しむ折うら山上に於て已に引揚の鐘太鼓の響  
 くに予阿闍世太子の打驚いてニハ余事に暇入して提婆のとを忘れたり急ぎ陣所へ赴くべし  
 如何に仙人を我手に掛し獅子と見ての過にて今更悔るも歸らぬ事なり果敢なき最期の  
 免し給へといひつゝ馬に飛乗て山上として予馳行しが路よて勢子の者に出逢提婆さま早御

出なりと聞よりも其場へ馳行馬より下りて提婆に會アラ久しや大恩人約を違へぬ今日の對  
 面歡び之に過可うらず扱過し頃誓約を變せし後悔の旨の天神を以て何ぞや説すせし如くな  
 り扱又今日の此方より予乞て此席に相見らるうらに最早心の變ずまじ斯る上の越方の罪の  
 御免し給へうし今日爰までの御面會の御身の密計を伺ひて事を爲んと思ふてなり今召連し  
 者共の皆我が服臣に侍るが故聊心を置く事なく物語し給へといひければ提婆の眉根を動  
 うして越方のとどもの既に天神より其詭言葉の懇なれば今の少とも遺恨の非ずうし扱て  
 又此度の面會の一人の心入ゆる何ぞや貴方の見えたる天女を只管天帝に予乞て貴殿の妻に  
 娶せん爲態く爰に伴ひ來りたり此ころの今日面會の印の送り物なり異心あくる已に何呉  
 ど用意せしうべ爰に於て夫婦の堅めを致されよと云聞すれば阿闍世太子の驚きて扱の何ぞ  
 や我が閨の枕邊にましくたる天女を以て我妻に成下さるとや开の此上なき歡びに侍れ  
 ども先さし當たる一大事の役目を勤おふせたる上にて兎も角もと言せも果すイヤ其儀の後  
 にて篤と語らんソソく差圖をすれば兼てより手筈を示し置たりけん供人らの皆心得て  
 箱の中より衣服を出して阿闍世太子の前へ押直せば提婆の殊更あうやうに今日しも不意の



事なれば衣服の用意の非じと思し故我方よりして貴方へ引出物とすれバイヤ着替へられよ  
 と言中に供人等の平らなる草原へ敷物の最花やうなるを敷設け且新しき帳幕をとくくしく  
 引廻してイヤ彼方へとすゝむる程に提婆の天女を引連れて件の席へ赴けば阿闍世太子の夢現  
 の心にて只提婆の差圖に任せて坐り着けば獨の小姓が酒酌土器を持出てまづ天女の前へ直  
 せば頓て三杯を傾けて阿闍世太子の前へ進むれば阿闍世太子の又三杯をうたむけて一禮せ  
 しうバ提婆の手づら肴を取て二人に與へていふやう今日の先づ思立日を吉日として假の  
 祝に千代の松風梢に調へ谷の水音を鼓に象どりて千秋万歳いと目出度扱夫婦の固めの濟し  
 上は是よりして密議を談べし開頻婆娑羅王の殊の外悉達の世尊を信する聞えあるが開の誠  
 にて侍るにやと問へばさん候我近來病のりと偽りて一間に籠りて居たる中に我服臣ならぬ  
 男女を厭はず皆殺害して父母の様子を聞たすに仰の如く世尊を殊なふ信する由なりとい  
 へバ提婆は如何さま然有やシテ又先頃國の寶物を五百輛の車に乗せて世尊の元へ送るなど  
 のとは貴方の元より之れを知る處かイヤ其儀の我少も存せず只今承へるが初てなりコハ  
 過外なる油斷至極なり察るに頻婆娑羅王の世尊に賺されて終にの貧き身と成りて國土を捨

るの眼の前なり國の珍寶の何處へ行やも計られず先差當りて之に氣を附て好取締を致れよ  
 夫れ父母とても無情世界の身の出世に替られまじ其方と我どの世の中に爲たる上の甘酒  
 の誠は無上の樂みならずや其計畧の斯々と耳に口寄せさゝやけば阿闍世太子の點頭且歡び  
 て其儀の我好心得たり扱又今日此谷川にて云々なる仙人を獅子と見違て害せしが彼れ末期  
 の際に云けるに今不思議と水面に天女の姿の寫るを見て思はず知らず其通力を失ひしよ  
 り凡夫の矢先射留られしと言たるが我察するに其天女といへるの御身にてありさずやと  
 天女に向ひて尋れば何をか少し口籠りしが物志とやりに此方を見向きてイエ〜妾の露斗  
 りも然るとの知り侍らずといふに阿闍世太子の提婆に打向ひさらば我れ嚮に仙人を射留た  
 る其矢を彼處へ取に赴けの尊公も共に行て其体たらくを一覽あれ前代未聞の珍事なりとす  
 めて共に其場を立出て件の處へ行き見るに不思議にや仙人の姿の無して其邊なる岩窟に  
 大木の枯たる下に大なる靈芝ありて豫て仙人か纏ひたる皮衣を着せし如くに打かゝり又射  
 留たる矢も其胸うどもおぼしき處に篋深にたちて疵口より血汐の流るものから阿闍世の  
 殆ど呆れ果コハ〜如何と溜息つけば提婆も不審の晴ざるゆへ彼の天女に向ひて夫天人と



仙人の其行ふ術も等しうして又樂む處も異ならぬ毎度天人の天降りて仙人も因たる物語をも傳聞ぬ殊に靈芝の天地の精とも聞へ今此の有様を語りて不審をいらさせ給へど又他事も無く尋れば天女の靈芝をつくづくと見て仰に任せて告侍べらん開も靈芝といふものは其色五色に分ても皆之天地陰陽晝夜の其精よりして成るものにて仙術者流の藥なり其中にも此の靈芝の千歳芝と号け侍りて深山の枯木の本に生じて則ち坐せる人の如し之を刻めば血を出すなり其印よりアノ血を見られよ正しく阿私陀仙と云ける者も二千年を経し此の草の變化成らん今其血を取りて足に塗れば水上を歩まるも奇徳ある靈物なり今日の如何なる吉辰やらん嬉しきものを二つ程見てけり疾く人夫に探持せて家苞にせらるべしと事明かに示しければ阿闍世太子の太いに驚き且歡て即坐し夫を取せつ提婆に別れを告る程に提婆の今日遙々と遠路の山會をねぎらひつ切此天女の今日直に御身に隨ひしむる筈なれども貴方の館の今は父子といへど殆ど仇敵の思ある中なれば匆卒に伴ひするも心ならぬ先暫く我方に養ひ給へど何卒事の調ひ次第に此天女を向へ取て紅閨の内の新枕に海山の樂の其時ころ心の儘なるべしと告を阿闍世の不審に思へども聊か未練の事をも

言ずことば涼しく暇をして頼て人数を調へつ我國さして予歸りけり「さても亦先は世尊の難陀太子羅喉羅の君にさまゝの靈場を見せ給ひしも元より是神通方便のとなれば纒かに半日にして事終りぬ夫よりして又獅子の高坐に於て猶深く戒つ頼て暇を給ひしかば二人どもに恐れ慎み頼て御前を退て難陀太子の直に破利舍那殿なる我部屋に戻り給ふや否や好容夫人の殊更に案じ待ひ折柄なれば急ぎ其の仔細を問ひ給へど掛々しき答もなくして只氣拔のせしやうなれば好容夫人の思ふやう扱ひ今日世尊に嚴しく戒られしと見えたり何にも致せ有しとを聞たる上にて我君へ願ふ事も有ぬ可にと頼に仔細を尋ねられ難陀太子の余義もなく云々の處を世尊の見せしめて吾が身の放蕩を戒められぬ尤も世繼のといしも我を以て定らるれども今更心に夫を歡ずと聞へければ開の又如何なる御心ぞや御身の放蕩を戒られしも帝の御世繼に立給ふべき厚御心のあれはころ以後放蕩を慎み給ひて國の世繼に立給へ然なくは是迄に違ひのみに有て種々人の口の葉にかけられて人にも知れし御身なれば面を起さんやうもあらじ自らも何卒して御世に立たく思ふがゆへ朝暮神に誓をうけし甲斐ころわれ今日し好き噂を聞いていど信心彌増たる心を知て其様なる事を宣ふて妾が胸を



痛らるゝの聞へぬぞやと掻口説つゝ、勸むれども猶得心の色も見えずたゞ「ハイ」〜と答るのみにて更らに言がひなけれバ又詮すべもなかりける然るに此頃の取沙汰より難陀太子は愈以て世繼に定るとの聞えあるゆへ之迄度々そのかされし侍女等皆我先に取入て今よりして一國の御臺様どもならバやと顔姿ち身の廻りをこと〜敷粧ひて何うに附て太子の跡を慕ひつ媚つすれども人違へかど疑ふ程又取放たれて皆々口より言ねども只口惜やと胸を燃て止まざる中に優陀夷の女房の差圖とて最と優美なる侍女を破利舍那殿へ參せて何れなりども御召使わせられとて差こせしに皆斷りてさし戻さるれば是れまでの侍女等皆〜我り心の中を押隠して今度來りし女中にかこつけて逢て物語にアノ難陀様の此程世尊に連れられて若や女人國へても入らせられしか今は女に弗々飽たど云やうな面差の惡らしさ何れにも御所に立給へバ獨り御臺様にて其外にも十二人どやらの侍くべきものと聞たる事も侍りしが此頃來たりし女子達の皆みめ好ものなるに獨り止めずしてすげ無くもお返しなされし何と爲るとてあるが但し余所の馳走より内の茶漬を好給ふか夫ならバ夫として此御殿の内の者を早く御見立なされて御極成ればよきものをとさ〜やくも亦最をうしとる程

に又世尊の羅漢達を召連給ひて國々を打廻りて法を説せられんとて此儀を帝へ奏問せしよ淨飯王も今の御老衰に及ばせられて殊の外別を惜み給ふよりして又此の由を輪臺彌の方へ仰進せられけるに此方も同じ事ながら今般難陀太子と羅喉羅を戒の爲に召連て法堂に入り給ひしが不可思議なる神通もて如何なる行ひおしせし其日に至て妾の一眼圖らず開たりこゝを以て世尊の功德を殊の尊ひ侍るものから又國々の惡き者を濟度に及ぶならバ終に妾が兩眼も平愈あらんと存れば妾にめんじて御別れを志し忍ばせ給ふやうにとまた他事もなく願ひれしうバ帝も實に尤なりとて即坐に御免しの出ける故優陀夷の女房の好折からしと思ひて御伽の局たちを初めとして其外の者も豫て御見目を願居けれども是まで夫此れのためひめもあれの皆差扣へしに此度は何事も過し事無事に濟すやうにとの御内意のありしかバ此序でを以て御見目を残らず仰せ附らるゝやうにと輪臺彌の方迄願けるに此義もまたなく御聞濟の有しに依て優陀夷の女房の取敢す先つ好容夫人鹿野女を初め其の外の者へも御目見あるべき旨を通じければ皆々此上なく歡つゝ夫に附て何がな御目見の印の一品を差上度よし申立しに羅漢達は色々評議の上よさらバ法衣を献せられよと其事も既よ



定りしが既にして世尊の御暇乞にとて頓に羅漢を隨へて迦毘羅城へ御入ありければ帝を始  
 め奉り輪曼彌妙惠比丘の更なり好容夫人鹿野女の方其外の女中達迄も或の金襴純子の御袈  
 裟縮緬紋沙のおん衣其外様々の物を奉り羅漢達に至るまで夫々に袈裟衣を布施致されけれ  
 ば舍利弗の進みて其旨を世尊へ披露致すやう抑世尊の綾羅錦繡玉の飾七寶の器財調度及  
 ひ宮殿樓閣の結構は堅く戒しめ禁せられて御衣の只墨染にのみ限り給へど其時の此れ發心  
 御修行の初なれば尤も然なり今はや天上天下の神まで御濟度あるべき御身なりせば三  
 方歸依の布施物の譬へ蜀江の錦といふとも御納受有て然るべしといへば諸くの羅漢も一  
 同に其は尤も然りと一決せしうに帝を始め何よりも法衣其外の佛器まで皆美を盡せしを獻  
 じたてまつりぬ其時舍利弗又云やう世尊へ布施物斯ある上に我々迄へも袈裟衣を給りた  
 れば仔細無く受納おき侍りぬ斯る御身と成せられて人の尊敬こそ肝要なり然れば凡夫の  
 敬ひの目前の美を第一と爲ものなれば何卒夫々法施の品を御受納ありて一應の謝辭を述給  
 へど聞え上れり世尊の微笑し給ひて汝の言葉は然なり〜帝の元より人々の法施をなごう  
 否べき其報に我直々に說法せんと仰ありて帝を始め其外殘る方無く法施の禮謝にいみじ

き法を説給ひ其儀も早終りてければ懇ろに暇乞して羅漢諸共迦毘羅城をす出させられける  
 扱又爰又一條のいと珍らうなる嘶のありける開の甘露飯王の住國なる旃那羅國と摩迦麻那  
 國の界の町に木訥といふ賤しき夫婦のありけり此の之過し年迦毘羅城の奥に於て不義をし  
 つゝ懐妊になりて追拂はれたる瞿陀彌の局今の花子と名を呼れて是子といふ爲業も無て日  
 日辻々に出て往來の人の袖に縋て施物を受又の折々瞿陀彌の方へ赴きて打敷き烟のまろを  
 願望しが瞿陀彌が失てより後の其助けも空しくなり殊に男の年病の上中氣といへる病に  
 悩て起臥も儘ならぬ身となり只獨の男の子あれども兩手のなき片輪なれば女獨にて三人の  
 口を養ふ才覺のつきたればひとり潜に思案をなして斯く淺ましき苦みをせんよりも二人の  
 負い物を見放すにしくいなし假令我れ置去にして出るも追ふこと何所詮叶ふまじ何處の  
 果にも行て洗針してなりとも身一養ふ事の安しと心穢なくも思ひ定て今日や明日と過す  
 中に實に天道の人を殺さずといふ諺の争はれず斯難儀に迫しことを誰云ともなく人皆知  
 りて彼處此處より聞傳て何くれかくれ持來りて施しければ斗らずも俄に食物着類さへも包  
 に餘るやうになりたれば花子も今は逃げ去心も失て落付尻の暖まるにつけ喰ふや喰すの白



粥も咽喉過て暑さを忘れ何しう心に奢の出来て種々の珍味などを外より求めて歸れども病人  
 子供には隠し置て獨樂しむ淺しき何れか報の來らざらん身の行末を思やるべし斯て或日花  
 子の獨維沙那國の端山を差て柴取に行たる道よて獨の童に逢けるが彼いど馴しく此  
 身の世に寄るべなき者なれば何卒養ひ給れかし名善星といふ者なりと頼めり花子の心  
 の中よコハ善者を拾ふたり此を連て立かへらば二人の者の世話を致させ又小間使につか  
 んど流石の此方も腹太く彼が袖乞の仔細も尋ねず其儘どもに連戻りて心快養ひあきぬさて  
 此の花子が隣りと云ひ彼の瞿陀彌が里なりし執杖といふ者の住居にて爰に井戸のあれば此  
 水を貰て朝夕の助とすれば裏口より心安く行りよふを執杖の母なる丹車の豫て隣の夫婦の  
 いふせき暮しを見侮どりてうち今袖乞をする身なり此方の貧しくも家柄すと云ぬ計りに  
 取扱ひいと輕々しく思ふ中俄くに人の音信も殊更に繁くなり若類或の食物までも奢る様子  
 を見出して嫉の浮世の人心にころ執杖の元より好うらぬ者ゆゑ終に一つの謀計を巧みて或  
 日我屋に風呂を洗して花子を招て入浴をせさせしより次第に心安くなる儘又心の内は深く  
 歡びて夫れよりは何か又付て花子を呼けるに花子の何の氣もつうず常に往來して居けるが

或日潜りよ呼留め一間に伴ひて新たに好茶を煎じつゝ菓子杯進めて扱云やう時よ何ぞや  
 目に掛りてお説をせんと存せしが折もなく打過ぬ此頃傳へ承まゐるに其方の元迦毘羅城  
 の奥に勤し御身どう然とも知らず我母の何に附りにつけても疎忽の事のみ多うりしが必ず  
 お氣よかけられ御覽の如き短慮なれば親子の中にも折々の物争ひを出りしてさすお喧し  
 き時もあらん夫に付ても御病人の如何お在や朝夕にお尋致す筈なるを手前にうまけて御近  
 所へも御無沙汰勝なり然れども御病人のことは心に掛ぬていなく陰ながら神に念じてお  
 痛つきの頃に平癒を祈て居ことなりシテ此頃の好子供をお抱なされてお仕合せに存じぬる  
 年に似合ず朝も早くより水などを汲て好く働きます其働くに付て思ひ出たの外てもなし私  
 もまだ妻なき身故に主やら下部やら本の公家の何とやらてお耻うしいが此中へ妻を向へた  
 く存するが心當りの之なきや若其方に妹子のお在さぬら卒爾ながら朝暮うなたの賢きを  
 見る度毎にあの様なる妻持人の何うに附てお羨ましく存ると言葉巧みに云廻せば花子の俄  
 に笑みつゝもコハお耻しき其お言葉哉如何にも以前私しの迦毘羅城の奥向に勤侍りしもの  
 なるが今の早斯の仕合なり疾よりお聞及あらば今隠すも詮なき事故に有様をお咄しすさ



ん只今の夫と云元より色の戀のどて夫婦になりし譯もあらず毎日毎日詰所まで無汰戯口のういませれに不圖をうしなとなりて今の悴を懐妊て御殿を二人下られしが親戚へ便るも本意なく思ひて爰ら邊の詫び住居斯るまがなき暮しを致も捨處なき夫と子供のわれはころ余議なく獨の稼にて養ひの致すもの、今あの如き身となれば夫婦のとなごの更になくて只親と子に使ひるゝ心地する此身と夫の年も三十四五程違ふことなればあすいもじわれ是が本の世話にすす一口物に頬を焼たる若氣の過まりなり悪縁とい之らのを云ふならめ其方のとハ瞿陀彌様よりうねて聞知れども生中に身の上の事杯聞え上るも面ふせなれば知らぬ体にて居たりしが今宵斗らず其方よりの仰に任せてやが初てなり如何又貧しくあくらしあるとも冠りのうふり沓のくつなり妾の如き賤の女がお側に頼んも憚りありいう程も好き奥さまの出来まするを御承知の上で御戯談ばし宣ひすな又こそ参らめおさらばと立を執杖は近寄て確と袖を引留めコハ戯談とい曲がなし男の口より主ある者にされ事いふて濟べきう万一破た其時は固より覺悟の前なれば兎も角も色好き返事を聞らぬ中いつうな爰に放たぬと眞顔で云は花子もまた豫て操なき女なれば早執杖に心を浮されて先お静に

なされませ御戯談にあらざれば私しのやうなる者にて宜く長く御世話になりぬべし今宵の傍りに人目もわれ先何事もなく宿へ歸りて明日の夜の私し方の裏口より御出われ御覽の如く病人の夫は耳が遠く目のかどみて足腰の儘にならねばお物語の自在あり先こゝを放ち給へど手を搔拂ひてそこゝに我家へ戻れば執杖のまたりと心の内に明日の夜の至るを予潜りに待たりける花子も同じく待設けし其夜となれば何處にてう髪おどをつやくと結て貰ひ好にもなき顔をさへ十分に粧ひて好き着物を着重ねつゝ水桶を持って幾度裏口を出入する其中に目顔で知らする心の合圖を執杖の可笑く思へども己れも態と支度を改めて間もなく隣へ行て見れば荒家ながらも此處彼處を取片附て掃除をなし子供らをバ奥へ寐らしめて病ふ夫の枕元をバ破屏風にて圍ひつゝ酒肴など取並べて座に着より酒を勸めてひろくど嘶し爲を夫の竊かに聞つけて屏風に手をうけて遣上りコソかゝどの其方誰と嘶をするぞ何う酒盛てもあるうして肴くさき匂がすると云に花子の笑ひを隠しさればなり此間お出ありてお金や着る物を下された旦那様が入しやつて又もお金を澤山下されしゆへ其お禮にわざと御酒を上げますのじや能お禮を述べんと云つゝ舌を出して見すれどそれとも知らず



手を合て夫のく有難しお蔭を以て三人が快よう暮らす何もお肴のあるまじきなれども何卒ぞ一つ召わがつて下されまじと云ひつゝ其儘夜具をうぶりしがまもなく又這ひ出て枕元なる湯呑を手も持ちながら「かゝ湯を一つ下されぬう咽喉がひりつく様なりと幾度言ども答へいあく留守うと思へば人音あるゆへに「コンかゝどのく湯を一つくれいと云ふに其處に何を爲て居やるやと云ふに花子の聲いからせて「アモア五月蠅き事斗り云はるゝぞ二度の食を食さするの誰がお蔭じやと思ひんす足も腰も立ぬ身の湯などの飲ずに居たがよい何處のいつくに夫たる身が妻に養はるゝ者のあるべきやつさらぬことよりそなたに添ひておたら年をば重しと今更悔しく思ふやかし呑度い夫といふ儘に小茶碗取て圍爐裏に洗つ湯をつきて抛附れば眉問よわたりアツと叫びて其儘に一言も云て伏たりし心の中や如何ならん扱又執杖の思ひの儘に花子を賺し語らひて明日の早く遊山に出んど夜更て宿へ歸りければ花子の其跡を片づけつゝ湯を汲て夫の側へ行サア湯をあぐれ適意好うげんなりとて進むれど答への更になければ差寄て被りし物を掻退れば涙に沈て顔さへ擡ずイヤもう湯も呑たくなし此儘死にたい殺してくれと齒を喰しばるを見るよりも花子の扱の今方せし事を前

腹立給ふのり私も今日の食過てお前の言葉が一寸肝に障りてつさらぬ始末を爲けれど開の腹立切にして濟さんせ夫しきの事を氣に持やうにては夫婦の睦びがなるものぞ其方と私と縁と云の並々の事ていなしサア機嫌直して呑さんせイヤく呑まじそりや皆虚なりナニ虚言云ふべきやイヤ虚言ならぬば云聞さん如何に我れ所勞なればとて狭き一間のさゝめ言を聞て今の愛も盡果たり其方の男を拵へて夫を偽り旦那様なりイヤ禮を述よと我をたらし歡ばせしう思へば我の是明日をも知れぬ身なるがゆへどんな男を拵へても夫の少しも厭ひぬが其様なる其方の心立ならば片輪の那子の行末が思ひやられて痛まじき私にどうても宜れども那子をば養ひくれたる上ならばどのやうなる樂き事でもしたう好い併しながら能思ひ見られよ我年寄て其方に捨らるゝが其方も亦た若き男を以ては又年寄て我如くは捨らるゝの道理なり其邊を能々弁へよと理の當然にこめられて流石の花子も聞に堪うぬ其坐を立て行んとするを悩む手足も踰ぼひ出襦を押して又云やう其方の必ず此の私が嫉心で云とな思ふまじ身の行先を案ずればさうねく猶も異見するなり何卒私息ある中何悪き了簡をだして給ふな明日にも死なばどうなりとも其方の心任せなれば是斗りの臨終の頼みかしの



ふと手を合せて拜みつ脊かを搔撫し其手ざりに着る物のしなやかなるに打驚きテモおぬ  
 しの結構なる衣物を着て居る此身の單衣の厭ねど其方の産し子の可愛くいなきう那子にせ  
 めて肌衣なりとも着せて寐りして遣てたも是れのみを頼ますと涙ととも掻くどけハ花子  
 の之れに答ふるやう其言葉の無理ならねど私ぐむさき形をして人さんぐ穢なぐる故なり  
 有様の事を云ば先きの人も暮しの爲に成る人故御馳走をして戻せしなりそれもお前を樂に  
 してあげたきと思へばこそ夫どの知らずよ浮氣らしく私ぐ好んでする事と疑ひ承てハ口惜  
 しや何て我子が悪くうろ予悪くて今日迄養はるべき愛いさ余りてにくしみを受る私しハ身  
 にもなつて見さんせと泪聲して誠にやりに云を聞ア、誤つたり堪忍せよ愚痴な心に疑ひ  
 病ほうけたる我が迷ひなりサア最う早く休みやれと云つ、伏戸へ這入れハ花子の猶も側へ  
 ゆきて明日ハ好才覺事ハ善星を供に連れて行ハ食物ハ枕元に調へ置けハ喰さんせと告れハ病  
 人の點頭て其夜のとも臥したりける扱其翌朝となりけれハ速起て花子の身仕舞杯しつ、  
 拾ひ子の善星を随へて出て行しハ豫てよりして云合たる色町の亡八にて執杖に出合て其處  
 よりして船に酒肴を入れて乗込てさしつ押へつ互に酔の廻し頃執杖ハ花子に云けるやうさて

今爰でひろりに嘸す事のありぬ外でもなし斯陸じくするくらにハ互ひに何事も包み隠さ  
 うやういなければ遠慮なく云ますが其方の息子の豫て聞に手のなき生よて侍るとや世に珍  
 しき物よして其方の貧苦を天道よりして救ひ給へるものなれどもあの儘家に置時ハ却つて  
 家の損のみなればあの子を賣て金になさハ徳の附事ハ目前なり何と其方が得心して賣てハ  
 如何にと云を聞されハ其事の外よりも夫どなく人を以て言れしともありたれど我子を賣て  
 人の見物にせらるハ如何にしても情けなく思へハ碌々返事もせさりしといふに執杖ハ打  
 笑ひ開ハ馬鹿律儀といふ者なり今あの如く家におけハ親も難儀にて子もなんざならん賣て  
 得難き金に換れハ親も浮び子もううぶなり我心安き方よりして度々之をいひ越せば火急に  
 心を定められよ書付一つよて片輪の那子ハ今日にも變る金の顔こハ天の賜物をとらぬハ  
 却て禍ひありといふことをまだ知らずやといひまのされてさすに花子も之れに迷ハされて  
 然らハ御身に任べし兎も角も宜きに計らひ給へと云を聞はハ懐ろよりして一ハ枚の書付を  
 取出して然らハ此のお主の名前ハ爪印を致されよといとむさうさに事を調へていよハ酒  
 に予浮りれける扱又宿の病人ハ女房の出たる跡を見るにゆうへの言葉に相違して食物など



の其處にもなければ我子に教て探すれど器の皆空物なればさては夕花子めが密うとを異見  
 せしうば五月蠅く思ひて我ら親子を置去にして何處へう逃げ失しに違ひなし然とあらば  
 生じいよ言ざるが増りしに今面的に難儀に及ぶ今日の命を如何にせん最早覺悟の時の至り  
 しう今日の前に此子を殺すの最不愆に思ひるれど固より不具の者なればいつらの思ひに  
 死なすぐまじうと片輪なる子を懐き抱へどツつあいつの思案の處へ錫杖の音の高く聞ゆ  
 れバヤヨ法師に進せまじやう此處へ這入給へと呼びければ沙門の戸を開て腰打掛れば病者  
 の這出て貯への老ろを小袋の儘法施に出して罪業深き身の菩提を懇ろに吊らひ給へといふ  
 顔を沙門の見るよりもア、不愆や其許の最早や死相の顯れたれば法施の功德に依りて助く  
 べしと云へバコハ愚うなる事をぞ聞もの哉此さゝいなる法施をもて何とて命を助うらん只  
 後世をこそ吊ひ給へ開の云迄も非ずうし今に始ぬ事なら凡夫の分別の最淺まし、命を助  
 くるを以てたすくると云の愚うとなり死ての後を助るを誠に助うるといふなり然れば  
 我れ今助ると云し後の世を救とぞうしア、あの聲を聞れば冥途の閻王が獄卒等を差  
 向け今汝を迎んとて鸞類鳥と身を化して鳴渡るあり觀念せよと諭しければ如何にも然あら

ん我命の目の前りに差詰りしに却て嬉しう存ずれど是に獨の子を持ち何卒此子を御坊の御  
 弟子として助とらせてたび給へ殊に五体も不具なれば我事よりも此悴の二世をバ救ひ給へ  
 れうしと額を疊に摺附て涙と、もに頼むを見て法師のいふやう汝が命の救ふに術なしとさる  
 代りに頼に任せ其子の吾れ養ひえさすべしいと爰へと呼びければ元より親子の縁の薄き  
 にや別れも左のみ惜まずして沙門の側へ寄るものから負の中をくつろげて其儘に脊負つ、  
 猶懇ろに臨終を教諭つ、錫杖を突鳴し出て行先への白雲の寄べ定めぬ此僧の此れ如何な  
 る者乎後に知る可し斯どの知らず其日も暮て花子の執杖と肝太くも十二分に語らひて船  
 より揚りて道をうへ獨我家に戻りて見れば闇きに未たありしもあく臥せし夫を伺ひ見るよ  
 只ならぬ様子なれば纏ひし物を掻退けて猶好見れば早玉の尾のこと切れて側に悴も居ら  
 ざる故驚きながら裏口よりして直さま隣へ馳行しに執杖の未だ歸りこずして丹車の出て逢  
 たる故云々と物語りければ共に驚いて其場へ來り傍の様子をつら、見れば盗人杯の業ど  
 も見えず只途方又吳て居る處へ執杖の歸り來て様子を伺ひつゝ、入來れの疾其様を見せしめ  
 しに殊の外打驚き先幼子を尋ねけれども手近よ見見えざれば兎も角も明日の事として丹車



と共に歸るを引留て何卒今宵の通夜してたも女獨りの心細しと頼むを聞て丹車の點頭如何にもさあらん夫ならば善星を一夜貸給へど云つゝも伴なひて後執杖を殘して歸りける扱花子の執杖に向ひ夫の死し二人の幸ひなりともかくも今宵の中に取片附をして仕舞たし今よりの甘酒をいさ諸共に汲交さんあたらずの醒果しとつぶやきながら夫の死骸を菰に包め執杖は是非もなく肩に引掛て何方へ捨又出ける扱其の跡へ亡八の主が闇はしく入來たりて今日執杖さまのお出にて此方のお子を我等が買取りたれば引取に参りたり見れば何うお取込める御様子の中よてもお氣の毒よの存ずれど金子も早お渡して書付も已に頂けりもいや我らが物なる故少しも早く運販りたし願て執杖さまよりして其事もお断あらんぞ云へば花子の胸をつき如何にもお渡しませうなれど御覽の如くの取込故何ぞ明日又來て下さんせと手を摺て只管に頼め詮方なく亡八は頭を掻ながら然らばあした又來る程に間違なくお渡し下されと言葉を呑へて歸りゆく途端執杖の足早に内に入り來りて先野へ送りの濟せしが今外よて立聞せし子の事如何にせん若明日までに見當らず其方姑く影を隠すが何よりの奥の手なりとすれば我れ好く扱ひせんといへば花子の顔色を變て逃

隠れを仕様より請取たる金を返さんせ私しや片時もお前の側を離れる事致しませんと毒蛇の口に見込れし言葉を聞より一驚してイヤ金の未請取らぬぞといふに夫でも亡八が已に百金渡せし故其の書付も受取しと慥に云たり并の以ての外事にこそ尤も書付の仔細ありて渡したれども金はいまだ受取ずハテ間違ふあらねば好ど案ながら開の兎も角も清めの爲に一杯跡拂ひの支度のありやと唆賺うせば夫に扱めがあるものうとて豫て嗜む品々を取出す置並べ酒に目のなき二人の者の斯る大事をことゝもせず飲つのみせつ果しなく打戯れて夜をふらしぬ

釋迦八相倭文庫四十編終



戸に打礫て裏返りて却て己に中るとい實に宜なるたどへ哉扱執杖の彼の夜も更て朴訥の妻なる花子と枕を並べて打伏したりしが其翌朝日の高くなる迄寝忘れけるに誰やらん戸を打敲音に驚きて二人諸共目を覺し起上りつゝ執杖の周章我家に戻らんと門の戸を開けし思ひかけずも彼の亡八の肝煎がすつくりとイみ居てコハ執杖さま好處で圖ずもお目に掛りましたと云ふ此方のト胸を突しか流石の曲者さあらぬ体にて兎も角も何呉かくれ聞事断すことこのわれハ先々我家に來られよと先に立つゝ宿に戻れば跡に續きて肝煎ハ入來りて一と間へ上りて扱昨日朴訥の子なる牛の身の代に渡せし金を以て直さまお馴の摩尼鉢様の身請を致して我宿まで連れ來りし事も先はやく告まふしたく又牛をも連れて往んど昨夜わざと參りし處貴方様にいお目に掛らず彼處の朴訥の家も殊の外取込故も明日來て呉と言れたゆへ今朝はやく牛を連れて來ましたが何ぞ直に渡さるゝやう貴方へお頼みすと云ひれて執杖の頭を掻きされハ其事なり昨日貴様に別れてより夜入り戻り來て見れば隣の朴訥のどうく目出度なりてしまひ跡の片附何かの混雜大方ならず其上牛の往方知れねハ傍り近所を離離

尋ねても今に見當らずコハ察するに女めが隠したに違ひあしと様々たらしつ賺かしつして問へどもいつかな知ぬと惡剛情のみなり何か貴様の口車で嚴しく掛合附て給へ夫知ての中なれ私が口よりして酷くも云れねばと聞より肝煎の口を尖らしイヤ今となりて其やうなる身脱を仰有ての困り升私し何處までも貴方計りを目當にして目論だる事なるに貴方の甘き肴を喰て私にの皿計をさし附やうといお情けなしと云へハ執杖此の泥水渡世をするにも似合ずまじくとしたるとぼけた事を云人かな夫ならばなぜに朴訥の女房の爪印をとりしや私の只口入なり何事も判をしたる其主が此れ常人てのゐるまいか殊に親父の無なりしゆへ唯後家の心一で濟ことなれば氣の毒ながら私を退て掛合の手短かに渡すであらう勿論我らも只管に之を甘く調へんが爲に那やうなる者の家に寐泊りも爲せしとあり事が極れば阿房らしく今の鼻つまみでゐるまいか何か貴様が云くろめて那後家めを何れの里の飯焚なり夜發なりとも口入をしてたもれ今とありての片時も早く爰を追立たし先兎も角も掛合濟だる上の連れ立て摩尼鉢の酌にて一杯やるべしと云脱られて是非もなく後家の家へ起きて段々に掛合詰れどもたい往方の知れずとのみ答て居れば詮方なしさらば金を戻せと責めけれ



花子の忽ち腹立て、いつ金を渡されし最牛が戻れどて賣る事の致すまじサア早く戻  
るべし朝つばらより思ひしきとて箒を取てはき出せば肝煎も堪へかねてコリや何と爲る蘇  
生の亡者如きに扱はれて、此方も朝から縁氣がわるし此腹をせせぬ置ぬと懐ろよりし  
て書付を取出しサア之の誰が爪印をたしかに金子を受取上のいさゝか外より故障のなしと  
書た文句が慥な證據なり金受取す此書付を渡す筈のゐるまじよし口入が譯わりて金を渡  
さうと渡すまいと此書付が言をいふサア埒明けて貰ひたしコレサ後家さま何して呉る予  
金と云もの其日々に幾らといふ子を生物あり夫を何ぞや横取して素知ん面て濟さうと  
て私も泥水の中で實生から育た男にて無限なき身賣の世話又住替貰ひ引墮落人の掛合  
も一度も手を焼たること無き今日今こそ世間に怖しき者のある事を初て知たり此私  
そんな酷い事を言はずに子を早く渡さんせ見た處が連れ合も亡なられた様子なりことに依  
らば好處へ飯焚にても口入せんコレおかみさんイヤ後家さまよ羨も焼ても喰れぬ人哉接  
るよりも得が安いイヤ感じやごんせぬ私も闇がしい体なり疾々渡して埒明さんせと上げた  
り下たり言詰れば後家の愈腹を立て如何も其書付に爪印をせしもの、私の未其金を

見たるとおしもしや執杖どのが受取はせざるや又此私を飯焚杯に世話を誰が頼ました譬へ  
夫が死ぬべとて私しが身に執杖どのが附てゐるいらざる世話をやかすとも早や歸て下  
さんせと言捨て立をむづと押へて此な内又我とても何ぞ居たき事のあるべき予速歸し度  
子を渡せよ子を渡さずば金を返せ知るの知らぬ其方の勝手なり其方が爪印の主で無  
下から言は法度もなく附上るろくてなと云や否や嚇つと急立花子の無体に武者振つきて  
持たる書付を引たぐり喰裂捨るに亡八の腹立紛れに取て抛伏せ二ツ三ツ打擲すれば此方も  
曲者打れながらも手に當る箕盆を取て擲付れば我ど我手に思はずも火入の火にて火傷して  
顔の一面に腫痛むも只口惜き一念ゆるにやいさゝか厭はずして拐めよ盗人よと口から出  
に吐くにぞ肝煎も益々怒て拐子とい己れが事なり未だ何にも知るまじきが執杖どのが近頃  
其方に馴し牛を賣せん爲計りなり左無何て己れがやきふくれ面めに何とて言葉も掛ん  
や其身の程も知くさらいて執杖さまにやしなれると何處口よりほざいたか實の昨日牛  
を賣る金にて遠から馴染の重なりし傾城の摩尼鉢といふを根引なされて己が内へ密々預  
てあるゆへ固より其金の此處へ來よう筈がなし最愛執杖さまの用立べき金の代りに片輪



なる子の愚かき事あり今に己が身をも切り刻まれても惜しき筈の些しもあるまじサア牛の  
 在かを明さぬ上の殺ぞと威しかくれ花子の齒を嚙身を震ひして儲もく口惜や皆馴合  
 て爲とよア、執杖面めの何處に居ぞサア殺さば殺せ此上の死で恨を晴さんとはや狂人の如  
 くにありて逆上あがりし其處へ丹車の獨驅來りて先花子を宥れども中々に聞かずして丹車  
 をさへも打倒すべき勢ひなれば丹車の周章つ、肝煎を連て我家へと馳戻れば花子の續きて  
 追來るゆる木戸口を堅く閉ざせしを碎くる計は打破け丹車の執杖と肝煎を表の方へ出し  
 やれば二人の周章しく肝煎の宿へ立戻て息をつきつ、儲縁氣直しに迎はや酒盛を始め  
 豫て根引せし摩尼鉢を呼出して側へ引附花子の事も何か忘れて執杖は心嬉しく頻りに浮  
 れて飲うち亡八の酌に出し小女に打向ひて先刻内の入口に此巾着の落てありしを拾ひ置  
 たるが主が無れば手前にやると言つ、其處へ抛出すを酌の女の取擧行しが頓て又持來りて  
 之の儘かに最前参りし物貰の落せし物にて最穢なれば拾ませうと云を主の押留イヤく  
 捨るに及ばず若其主が後に心づき尋て來まひものでもなし中への何か入てあると開き  
 て見れば奇應丸及び百日咳の呪ひなど其外何異と入たる中一枚の書付あるを讀みて見れ

バ朴訥の悴牛とありしに打驚きヤ、是の之れ行方知ぬ彼の片輪なる餓子の守は相違ひなし  
 其子を連て何のやふなる物貰が参るや然れば其物貰の法衣を着たる坊さんよて笈の内に  
 幼な子のある容子にて門先に休らひしゆゑ喰餘りの物を呉れしに其笈の内へ入などせしと  
 女の云を聞よりも執杖の手を打て儲こそ夫に違ひなし好手掛りの出來たりしが今の何ちら  
 へ行しう行方の知れぬの残念なりと云へば亡八の立上りて譬へ何處へ行けばとて衣を着た  
 るものなれば必ず世尊の徒弟の中ならん先其處此處を尋て見んと尻ひとつからげて執杖に云  
 やうどうせ今宵のお泊りならん緩と召あがれ見つけ次第に立もどりてお目出度酒を飲ます  
 と云捨て表へ駈出し門口にて己が手の平へ唾をはきかけつ、敲き見て先唾のはねたる左の  
 道へと走り行くこそ其の爲との左り前なる光なりけれ儲執杖の腹一杯に酒飲しめて摩尼鉢  
 の膝を枕に正体もなく一睡りして目を覺し主を問ふに未だかへらずと云に然らば我一先宿  
 へ戻りて何呉れと様子を聞たき事もあり又摩尼鉢を明日にも内へ入たく思ふなれば急ぎ行  
 て又來べし其内への主もかへらん何せ今宵の此屋お泊れば又緩りと物語らんとて居合す者  
 よ云置て我家路を急ぐ程に日も早西に傾くころ怖く我家に遣入て見れば母と諸共に善星



の種々の肴を並べて酒などを飲居たりければ此の何か目出度事のありしと思へど執杖  
 の早くも後家の事聞たければ先づ母を物蔭へ招きて潜かよ尋ねれば然ればなり花子ゆの暫  
 く何か噓き居しが今の何處へか失せたりし何卒かあれきりに影を隠して戻らぬやうに致し  
 たし此様事にもならうかと按せしが汝は何しか風呂の水のとて往來せしゆぞモウく之  
 ん懲りたらば以後の言葉も交さぬやうよしやと云ひ懲られて執杖のイヤモウ言葉處てなし  
 影を見さへ忌のしし夫のろれにて好し今日の何か心祝ひの事でもありて数々の那御馳走の  
 出来ましたか然るの事なり思ひもよらずに福の神が舞込だるゆる肴を張込たり其方の好な  
 物なすも取除て於たる故一飲て飯食ぬか其様にろくくせずとも落つきて彼處へきやと云  
 ば酒聲を潜めてイヤ酒も飯も喰たくい無しうして其福の神の何れにお坐升や私を生れて  
 まだ一度も生てござる福の神と云ものを見たる事なしどうぞ夫を拜まして下されサア夫の  
 外でもなし其處に居る善星事よナニ那瓊果たる丁稱めを福の神どのそりや何ゆゑぞナ、福  
 どもく大福の神さまよ妾が段々どあれが素性を欺し賺て言して聞けば音に聞へたる迦毘  
 羅城の悉達太子が此程の釋迦如來と仰がれ給ふ其御子てありけるが仔細ありて自分より影

を隠して迷ひしをあの後家が連れて來どの事なり今より私が養ひおきて頼て迦毘羅城へ訴へ  
 なば一廉の恩賞の此れ手の中へ握りたるも同前なり福徳の三年目歡の沙先が向て來てのあ  
 るまいかと頭を振つゝ物語れば夫の誠か信實か人の見掛よ寄らぬものなり何にしても好き  
 物が舞込て來ましたやチ、其沙先にて氣が附たコレお母聞れよ私よよき女房を世話して呉  
 れる者が有るなれど私の固より欲くもあきか母さまが朝くの水業を見るに忍びず依りて  
 其世話を頼置たるが貰ふての何てあるべきやシテ夫の何にもものゝ子にて兄弟の素性の如何  
 なるや然れば身元の正けれども支度の無と聞ゆゑ我支度の望ねど只獨の母親を孝行にして  
 呉るが何よりなりと仲立に云たればイヤ其女の支度の無も孝行なるの石に爪印なり急度請  
 合やといふかお前の何と思はんぞイヤ私が爲よけも先何處てなりとも先の宅を聞合せて  
 見たがよしイヤへくろりや丁簡違ひあり生きた中那處此處を聞正して此處の事を聞糺されて  
 の其事も調のいず此貧しき我が暮しを知りたらば嬪の諸おき猫でも呉のせまじきに善の急  
 の譬もわれは今流行の客分にて引取れば物も入らずして又人にも知れ今より其仲立の方へ行  
 て明日にも先内々に引取つもりに掛合べし今日の幸ひ日も能れ直さま出行さまなれば丹



車もろれも左様かと思ひてければ先お神酒の下りを祝ふて行やと幾つになりても親心三十  
 男の甘口に能くも騙されけるころ世の習ひなり執杖の爲濟したりと打悦こび心の空にて体  
 の宿魂魄の摩尼鉢の側あわれは其挨拶もそこく執杖の家を予出て亡八として行道  
 も田畑の細手路漸く半ばも北風に向ふ淋しき川堤まだ宵暗に携へし小提灯の蠟燭もはや  
 一二寸の乏しきに猶道を急て一ツの橋を越んとするに其傍らよりして這出せし物あれば身  
 を取懐して飛退つゝ提灯翳して透し見れば彼の癪と云病の非人の容ゆる足早に行過んとす  
 る執杖の袖を確と引留めノッ恨しや其方のはや妾をば見忘しかと云れし時の怖しき身を震  
 りして袖を拂コハ何ぬりすぞ思しや其穢物しき非人らに何近附のあるべきや柔順して願  
 ならば一錢二錢の手の中を施すまいものでもなきに無禮のまうたど白眼附れば、此穢  
 物しい乞人に誰が爲たこと予逢度といふ念の屈て爰てあふたる歡はしき何日なモウ放さぬ  
 予其方へく好くも腹一ぱいに此私を慰み者にした上にて色々巧ことして今此体になり  
 たるも皆其方の爲業ぞやと云れて再び打驚き扱ひ其方の牛のうた様なるう開い又どうして  
 其体にエ、置しやんせ今となりて何したもなきものぞ私を欺して子を賣せ其金にて淫街の

姫を能も身受せられしぞ牛が見えぬも其方の仕業なりコレ此如くに足腰まで腫れ爛れて苦  
 しきを凌ぎ爰まで來たりしも昨日酒汲交せし其家に定て姫と枕を並て寐てあるならん其容  
 子の一ト目見たさに齷齪と道を急げと果どらぬに幸ひ此處て其方に逢たるの天の賜もの  
 りいと其處へ連行て其姫に逢てたも私ガ子の身代以て受出したる姫なれば私に即ち命の親  
 も同前ありつゝ一目合して近附にせさせてたもれコレ執杖どの物云んせと強く云込られて  
 執杖のコレ思ひがけなきとある予何して私に其様なる事のあるべきやアソ空々しい其口を  
 喰さきても飽たらぬサア伴なはんサアくと逼立られて執杖の逃るに手なしと思案を定  
 めサア其やうに疑ひ如何にも其屋に連れ行らん先袖を放して呉と云ども中々に少しも緩  
 めずチ、開の嬉しやいと行んと跡に附添歩むにつれ程なく橋の上へ至りたれば爰予と思ふ  
 處より力を究めて突放す途端に早く身を交せば掴みし袖の引切れて花子の無慙や川中へ眞  
 逆さまに落入たり爲濟したりと執杖の溜息つきて差覗ア、因縁の通れぬものなり昨日彼  
 夫の死骸も爰の川へ投込捨たりしが今日思はずも其女房を同じ處へ葬るとい夫婦の縁の深  
 きゆゑなり偕老同穴一蓮託生南無阿彌陀佛と云ふ中に川浪いとい烈くなりて文無き暗に花



子が眼のさも怖しく光りければ又も身の毛の肌粟立に予跡さへ見ずに駈出しつゝ頓て亡八の家に來りて周章く戸を敲けば女ども漸くに聞つけて誰さんじや此の夜更に用ならば明日又來さんせ今夜の旦那も留守なりと聞もまだるく又敲きイヤ己じや執杖なり早く爰開てくれへと云ふに周章て起き出つゝ「ハ此夜更に只獨りモウ今夜のお出もなしとて摩尼鉢さまも待兼て早や二階に寐て御坐予うし貴方も直に二階へ行きてお休みなされと寐ぼれ聲にて欠息しながら云を聞イヤ此儘にて休まれず何ぞ眠くも温酣にて一杯飲せて呉まいう肴の何も無てよし主の又何故に程歸りの遅きやと云聲のわな〜と震ふを見て夫ならお酣を附ませう見ればお顔も只ならず何ぞべし成れましたら然れば道にて今盗人に追うけられしを漸やくと通れしが何となく跡よりして追くるやうと思われしゆゑ周章しくも戸を敲きぬどうぞ早く酒を頼と二階へ上れば摩尼鉢も夫らの聲に目を覺して何くれと物語る其中に女の酒を持來れば執杖の茶碗で呑乾つゝ聊氣を取直して明日の夫婦の堅せん今夜限りの飯枕と打戯れて二人諸共同し臥戸に臥したる處へ又もや門の戸を敲く音に下女の起りへりて旦那さまお歸りと云ふ幽な女の聲にてイヤ執杖どのに用のある者なり早く爰を開て

よと云ふに扱の先の盗人の作り聲して爰へ來たりと怖て答もせざりしに頓て門の戸を引放して遁入者を怖々見るに左も怖しき女の姿にて手當る襖を踏碎きて二階へ上る程もなくアツとたま切聲のすれは摩尼鉢もわつと聲立て階を下るまもわらせず二階より火の燃出ければ下女らも之に驚き摩尼鉢諸共表へはせ出暫しやうすを見てありしに此夜悪風の烈しくして火の勢次第に廣がりつゝ終に淫街の一廓なる亡八の家居の残りなく夜明までに焼失しどい最も不思議の事なりけり「楮又世尊の羅漢達を伴ひつゝ迦毘羅城を立出給ひて先王舍城の招きに應ずべしとて赴き給ふ其折うら有野邊の片邊は金の袋の落ちてあるを一疾く目連の見附て拾へんとするを世尊の押止め開の毒蛇なり拾ふべうらず若手は觸なば毒に中りて其苦患斗るべうらずと示し給へば目連初其外の者の目にも正しく金の袋と見ゆるを毒蛇と仰せらるゝの不審なれども仔細かくての宣ふまじとて願り見もせず其處を行過て王舍城の都に至れば世尊の頓て舍利弗を御使として頻婆娑羅王へ參向の由を告給へば頻婆娑羅王の殊に驚き且歡びて夫々出迎の者を俄に出して彼の此のど云まもなく早世尊の入らせられて大殿へ入給へば韋提希夫人其外も皆々拜謁を遂げれども阿闍世太子の此日頃好らぬ噂の



有ものうら此坐へ出られず備一老臣の月光大臣の舍利弗に向ひて世尊の御入の此方より豫て願し事ながら斯計りに不量となれば御變應も調はず殊に輕卒の御扱ひ何卒宜しく御執成をといと懇なる言葉を聞て舍利弗の打點頭其儀の聊か苦うらず元より世尊の慈悲愛民を守らせらるれば美味珍膳或の工夫を勞せらるゝ其變應を厭ひ給へば態と不意ぞ入らせられたり其邊に掛念することなく只慎みて御說法を聽聞あれどぞ勸めける兎角して程もなく世尊の法座に附給ひて妙なる法を説給へるを頻婆娑羅王韋提希夫人を初めとして其外も皆聽聞して如何にも有難きお示すと尊まざるのなりける中にも頻婆娑羅王の一人歡び給ひて今日の法施の何ありとも御望に任すべし心置なく仰せられよと言れて世尊のほゝ笑給ひ今日の法施を惠まれなば外にのさせる望もなし何卒獄屋に囚め置るゝ罪人の罪を我に施として牢舎を殘らず免るし給ひて吾れ戒を授けて善に歸せしめ再び惡事を致さすまじ之に依て重き國法を曲て我佛法の徳に任うせて大赦あらんとを希ねがふのみと仰せらるれば頻婆娑羅王の心得て頓て月光大臣を召し出して獄屋の事を尋ね給へば月光の慎みて某と身不肖ながらも政事に關りてより獄屋に一人の罪人なれば傍りも荆棘の生繁りて呵責の

道具の朽て出と化しぬ諫鼓音深して鷄の住りとなる太平の世となり侍りしが此度一の訴へありぬ開のいさゝかの事ながら之れを一人忽諸せり万民の手本となるゆへ嚴重に沙汰いたしたり此の余の儀にも候はず國中の長者の中なる如閻達之悴花徳と云もの夕淫街の廓へ通ひつゝ若干の金を費し其上亡八某しに欺うれて遊れ女の摩尼鉢が身の代を奪はれ然のみならず亡八の其遊女を執杖といふ者に與へければ如閻達之を憤はりて其咎を幸ひ淫街の廓を毎く破却せんと訴へ出し夕开を私しの沙汰に及ばし勇々しき大事の出来べきゆゑ急ぎ公に吟味を遂んと先如閻達を家に返して淫街へ捕手を差向侍ると告る處へ組子の者共の亡八の肝煎并に傾城一人と出家一人を召連ていと訴へるを聞て頻婆娑羅王のヤヨ其中に出家のあるよし出家の則ち此れ世尊の親戚ならめ仮初の事ならず最前聽聞せし中にも佛法の國法の源とありたれば何卒此裁判の佛法を以て希ねがはん世尊偏に彼らが因果を詳らうに示し給へど願ひるれば世尊の點頭給ひ然らば我彼等が業報を述て其裁許をいたすべし急其者らを出されよ志うし我法の樹下石上にして説を旨とするなれば則ち我彼處へ赴うんとて自ら庭先へあり立給へば月光の頓て三人を道芝の上へ出せし處先摩尼鉢を見給ふよりア



ラ久しや汝の猫王山にて初て逢ひ我法に歸依せしゆゑ我迦毘羅衛國の女帝に頼て汝が一身を安穩ならしめしに何故遊女となり侍るやと尋ね給へば然ばなり妾の彼の女帝に養はれしが程なく好夫に遇ながら其男の間もなくして死果て身獨り成にしう亡せし夫がたつき  
 の爲に借たる代を償ひの爲に淫街に自うら身を賣侍りぬ然るに此程長者の悴なる花徳といふが妾に深くも馴染て既に身受に定しを又亡八の肝煎が妾を己れの家に伴ひつゝ執杖となんに逢せし處昨夜怪しの鬼女が來りて執杖を喰裂て又妾をも害めんとせし故に周章て南無佛と唱へければ其鬼女が忽ち怖るゝ容にて火焰を吹出せしに其火の此處彼處へ燃移りて終に淫街の残ず焼たれば妾一人の途方に暮れて徘徊ふ處を捕らひれて爰に來り侍りぬと語れば世尊の點頭給ひさればこゝろ其事なれ汝の固より魔屬の女人あれどもはや南無佛を唱しものうら惡鬼と雖も近附得ず之らにても我佛法の灼然あるを察すべし惜又るれなる亡八の肝煎どういふ男よ汝の此れ大慾に眼暗みて長者の悴を欺きたる大膽不敵の曲者うなど叱り給へば件の肝煎恐れながら大膽どの彼處に居る袈裟衣を着たる法師に侍るかし彼の者の我らが代に替たる幼子を盗み去りしがお弟子故に御吟味なき近頃依怙の御沙汰と思ひるゝ

なりさすれば袈裟衣を着れば咎にも成らぬものやと口賢こげに答たるに此時迄も件の法師の默然として居たりしが今の言葉聞くよりも世尊の前へ進み出て愚僧との離婆多に侍るあり何ぞや目蓮御坊を以て御弟子入を願ひし處此身の過去の業縁あるゆる自ら堅固に戒を守て其徳を積み滅罪の後御弟子に爲との仰せなれば其日よりして心を堅固に戒めを守て僧の身となり普く行脚を致せし處或貧家の門に立て托鉢せしに老たる主が臨終の際に望みて片輪なる子を愚僧に與へて其身の菩提を吊ひくれよと真心を見せて頼に予之れを見るも忍びずして懇ろに回向しつゝ其子を伴ひて此身の飯を分ち與へ養ひ育みながら日々托鉢せんと思ひし今日斗する如斯の野に差りゝりて休らう折ら此亡八の肝煎とやらんが追りけ來りて理不盡にも人盗人逃まじと打てかゝるに驚きつゝ其仔細を問ふ問もかく慘苦の手込に遇て斯の如くに某の面体へ疵を受惱む處を組子の衆に捕らひれて是迄参り侍りたり然るを今彼が言葉に袈裟衣を着る者の盗をして濟むのかと難じたるに此事ならん譬此身の如何に成とも苦しうらぬと然とのありて袈裟衣に對し且の又世尊の御名の穢れあれば宜しく裁判なさせ給へ彼子の則ち之にありと云つゝ件の片輪なる悴を笈の内より助け出して



勞りながら御前へとて進まずれば世尊の熟々と御覽じて離婆多らばたが精心しんじんは明りなり先其因縁いん縁を示すべし如何肝煎かんせん之ある出家しゆつけが盜しとの此子このこならん如何にも其子こに侍るうしア、痛ましき凡夫ぼんぷの妄迷まうまい哉汝なんぢの此子このこを誰たれと思ふや然れば其子この手無てなしにて朴訥ぼくたくと云者の悴せかれなり开その現在ざいまのとなり此子の片輪かたわに生れ出し過去の因縁いん縁誰たれと云とを知るまじけれバ我今宿明通われいましゆくめいつうにて論すべし抑も此悴このせかれの此れ前世ぜんせの汝なんぢが父ちちに侍るなり斯かくどの知らて再生さいせいの親おやを諸方しよほうの市いちに晒さらして寶たからを貪らんとする不孝ふかうの限りあり汝なんぢが父ちちの前ぜん世せ又於て淫街いんげの廓くわくの長ちやうなりしが數多あまたの遊女うきめを抱かかへ置おきて夫等それらに酌しやくを取とせて數多あまたの人々ひとびと又無明むめいの醉よめを進すすめし罪つみにて五百世ごひやくせの其間あひだ手なき者と生れ替りて過去の業縁ごうごのくわいを晒さらすなり痛いたまじき淺あまましき汝なんぢも來世らいせの斯かくの如ごとき手のなき者と生なまきて市いちに晒さらさるゝ身みともなりなん我幼われこどもき時とき變頭へんとう覽らんの院いんより忍しのびて淫街いんげに通かよひ本身ほんしん普賢ふけん菩薩ぼさつある遊女うきめに見ま見みし時とき汝なんぢが父ちちの既すでに老おいて腰こしに梓あづさの弓ゆみを張はり矢やの如ごとくなる過陰くわいんを忘わすれ未來みらいの事も白露しらつゆの積つる首くびを振ふ立て眠ねる禿女かむらを驚おどろし飯いひの宿やせりに居ゐる客きやくの多おほければ共に浮うつゝゝあら面白おもしろや花はなの世よと慾よくに目めもなき現在げんざいの其歡よろこび又引ひくへて今いま早はや其世よを隔へて斯かくく片輪かたわなる者と生れ來りし其様そのさまを見て今更いまさら我われも泪なみだの漏こぼるゝなり况まして汝なんぢの親子おやこの中なかをも是迄これまでの知しらざりし

斯かくく論ろんす上うりら疑うたがふ事ことなくして速すみりに心こころを改あらためて善よに歸かへり先父せんふちの菩提ぼだい二につに汝なんぢが未來みらいの身の爲ために我われが法ほふを信しんずべし泥中でいちゆうにも蓮はすの開ひらき月日げつじつの影かげの穢けがれを厭いとず人道じんたう八はつの道みちを失うたれる塵芥ちりくわいの其中そのなかの淫街いんげの廓くわくへ身みを變かへて沈しづませ給たまふ菩薩ぼさつもあれば前世ぜんせの業ごうを滅めつせん爲ために思おもはず苦く界がいへ沈しづまあり然されば罪障ざいじやう深ふかなる者ものも懺悔ざんげに依より罪つみの消きるやよ彼の執杖しやくじやうを喰殺くじころせし鬼おにの花子はなこ一人ひとりならず淫街いんげに恨うらみある者の魂魄こんぱくの移うつりしものなれば彼かれが吐はたる穢けがれの火ひにて廓くわくの残のこらず燒や失うぬ今此時いまこのときを幸さいはひに早はやく心こころを改あらたむべし猶なほ因縁いん縁の深ふかを示しめさん开そも其離婆多そのりばたの前世ぜんせにて亡な八はの下人げにんなりしが則すなはち汝なんぢが父ちちの元もとに使つかわれし折せり又秘藏ひそなる器うつはを碎くだしを顯あらはさずして潜ひそかに捨すてり罪つみによりて今世こんせの人間にんげんと成なり得えたれども亡な八はとなりて正ただしうらぬ渡世とせを爲しぬる其罪つみにて來世らいせの又も世よの罪つみを償あがひぬ偕とも又汝なんぢが前生ぜんしやうといふの驛路えきぢうの小荷こに駄馬だばなりしが一度ひと佛ほとけの臺坐たいざを附つけ其功德そのく徳にて今生こんじやうの人間にんげんと成なり得えたれども亡な八はとなりて正ただしうらぬ渡世とせを爲しぬる其罪つみにて來世らいせの又も手てなき者と生なまるゝと父ちちの如ごとし然されども今日けふ幸さいはひに我われ帝みかに大赦たいしやくを願ねがひたる功力くりきにて夫々それらを救すくひて善よに歸かへしめんヤヨ離婆多らばた其方そのちの早過去はやくわこの罪つみの消きたるゆゑ今いまよりして我われが法弟ほふていを許ゆるすべし又其手そのてなき子こも見るに忍しのびず汝なんぢが猶なほ能よく介抱かいほうして育そだつゝ戒かいを授まげなば五体ごたいも終つひに満足まんぞく



せん又摩尼鉢の花徳が妻よ月光より仰せ給へるべし諸肝煎の速りに渡世を改めて善に歸し  
 後の世の安樂を願て可ならんと示し給へば肝煎の額を汗を拭ひ低頭の面を擡げて誠に僕  
 れと凡夫どのやあがら諸々淺ましき親子の因縁哉、此とても悪心なく何迄も知るまじ  
 きに惡より却て善を得たりとの即ち此身なりき今速りに心を改めて長く報恩を忘れ侍らじ  
 諸又僕聊り貯へたる金のわれバ夫を法施し致すがゆゑ何卒親の再生なる其子を宜しく育給  
 へど云つゝも懷ろに手を差入て金を出さんとてけれど其金を何れも落せしりあることな  
 ければはッど計りに打驚きたる風情にて暫し暇を給われども終らず其座を立周章て走り  
 出たりける諸又月光の如閻達并に悴花徳を召出して世尊の明白なる裁判を詳りに告て云や  
 う傾城摩尼鉢の公けより花徳の妻に給へる上焼失たる淫街の廓の再び建る事を許されぬバ  
 汝も怒りを抑めよと聞よりも如閻達の深く悦び開の忝けなき御裁判哉然る上の以來國中の  
 者も心安し夫も付て世尊へ法施を献すべきなれと宿所へ戻りし上にて送り奉らんと云ひ終  
 りて禮を盡して摩尼鉢を連れ花徳もろとも退く跡へ亡八の肝煎の汗水になり走來て世尊へ  
 向ひてややう僕が懷ろに一包の金われバ牛が爲に彼の御坊へ附屬せんと思ひしに不思議

と何しう失ひ侍りと偽りならず聞えしかば世尊の點頭給ひつゝ其善心こそ感じ入ぬ諸如何  
 に月光どの此金の儀の御邊に任ん宜しく吟味を遂げ給へど心有げに宣へば月光の疾く悟て  
 組子の者に打向ひやア夫なる警固の族よ彼を捕とる其時に金を持しを見知らずや譬へ道よ  
 落たる物なりとも訴へずして拾ひ隠すの國政の瑕瑾なり急ぎ詮議に及ぶべし我深く案ずる  
 處其金を拾ひし者に必ず手の平に黒痣ありぬ夫を印に詮議せよと云つゝ邊に目を配れば  
 獨の組子は我手の平を潜りに見て仰せ畏みゆとて立んとするを月光大臣之れを押しイヤ其  
 拾ひ人のはや知れたり外を尋るに及ぶまじシテ其者の何れに有ぞイテ繩を掛急ぎ吟味を遂  
 ずさん然らば其者の其處にあり諸の何人誰ならん開の則ち汝なり皆々疾繩をかけよと云ふ下  
 知に其組子の吠と計りに仰天して震へ聲を勵しつゝ、ハ仰ども思われず某と夫らの吟味  
 を透る役義を以て左様の事を致すべきぞ致さぬ印よ、是を見給へかし我手の平に黒痣なし  
 其黒痣を以て詮議せよと只今の仰せにていなかかりしうイヤ拾ひたる時には其黒痣のありし  
 が金を懷ろへ入る時其黒痣のみを落したりと今方汝が懷ろよて金が物云しを我能く聞たり  
 先者其奴めが腰の物を奪ひとりて糺明せよとの嚴命に今迄人を責打役も今は是非もなく



其坐にて縛められ嚴敷詮議を堪へ得ず拾ひし由を白狀して件の金を差出せば世尊夫を亡八に受取らせ給へば亡八の直に夫れを目蓮へ法施して頓て身の暇を給ひりける斯て月光の彼の組子を猶有論に思ふものうら又々手痛く責懲させて二を云へば三をせめ四を責つゝ何苦患を免るゝかと余所の見る目も怖し、其時世尊の目蓮を見返りて那れ彼を見よ今方彼が出せし金の袋の落て有しを毒蛇なり拾ふまじと戒めしが何と毒蛇の侍らずや如何にも只今思ひ中りぬ愚僧に代りて拾ひとり毒に中りし彼の組子の一命を助給はずや开の勿論にて我元より彼れを救ひ度と思へどもかれのはや死相の顯れたり今白狀の其中にも阿闍世太子の廻りし者にて帝を害する巧なるよし己が口よりして己れを殺すなり彼を助くるやうわらんやと宣ふ處へ風を切て一筋の征矢吳竹の繁みより飛來るを世尊の如意にて拂ひ給へば又一筋飛來りて縛められし組子の胸板を射貫くよと見えける内に引續て雨霰の降が如くに矢の飛來れば此の何事ぞと其坐の者ども立騒ぎて防がんにも打物無れば詮方無を月光大臣ハ阿闍世太子の謀反と察してければ先世尊を初め羅漢達を一早く奥庭の方へ落しつゝ諸臣に命じて防がしむ斯と聞よりも頻婆娑羅王韋提希夫人の愛子の事ゆゑ且驚き目悲みながら

必ず敵對すべうらず只能く宥諫めよと夫々に沙汰せらるれば皆々打捨て逃入程に早くも事の鎖りけり世尊の舍利弗の謀計を用ひ給ひて其坐よりして潜やかに弟子を連つゝ闇かしく靈鷲山の耆闍崖山へ起き給ふ其後に舍利弗獨残り居て様子を聞に阿闍世太子の叛逆に猶止ざる由なれば月光に暇を告て爰を立去りつゝ世尊の跡を慕ひて行途中にて夜も更ぬれば或木蔭を一夜の宿と立寄て笈の内より敷物并に出除の紙帳を取いだし釣などして其内に休らひけるに何にも心の落つらざる物音の遠く聞ゆるものから起返りて考へ居るうちに追々其の物音のかしままくなりければ正しく狐狸の徘徊にもやあらんずらんと些くなる紙帳の隙より覗き見ればコハ何に思もよらず大勢の武士どもが皆弓矢を携へて前後にイみて我を討取らんとの有様なるに肝を消ども中々に翹無ての遁れ難くはや身の詰りと覺悟を究め命を此場に留るとも後の世までも猶世尊の御内なりと携へ持し經卷を悉く身に纏ひて大音に呼ひるやう三世の教主爰に在り正しく徒黨の惡人輩は阿闍世の臣にして我跡を附規ひ來るならんいざ勝手に討取るべしと云より早くも口々々偕に世尊に紛れなし率矢頃によし通すなど姿の見えねど籠の鳥を覗ふ如なりとて矢を射詰つゝ頓て紙帳を搔ぐり取



れバ其中に一人の沙門が眼を閉て居縮みになりて矢を受しハ恰ら千手觀音の如くなれば皆々等しく勇み立衣類衣を剝取りて首を土産に疾歸らんと眞先の者が刃を振あげてハ切附んとしてける時俄に暴風の吹起りて砂を吹立明松の火ハ一度に殘ず消失て後れの出きし折しも有れ舍利弗が身に纏ひたる經卷ハ風に自吹ほぐれて閃々閃めくよと思ふうちに忽地大蛇の形ちに見ゆれば士卒らハ皆驚き且つ眩暈て逸足出して逃るもあり怖て身みづから倒ぶもありて最騒しかりしも思ひくりに逃失てあたりもみつろりと鎖りつ夜も明方になりしかバ死を觀念せし舍利弗ハふと心付て我姿を見に今正しく身に受たる矢ハ更又なくして夢かど計に打愕き猶好見るに身に纏ひたる經卷ハ夥多く矢の立ながら皆折碎てありしうバ偕も尊き我師の法文哉急ぎ彼處へ赴きて此功德を披露せんと押戴きくかの經卷を取纏めて順て其場を立去ける此趣きの觀音經の中の文に顯れたり讀えて其誠なるを尊ぶべし去る程に舍利弗ハ順て耆闍崛山に赴き世尊に目見てありし事どもを告奉り身の無難を歡びつゝお弟子達にも法文の効顯き功德の現在に顯れたるよしを告ければ皆々も愈々尊びつゝ口を揃て云けるやう世尊は昨夜貴方の命の最も危き事の有とて天神を祈るべしとて今

其許の來るゝまでハ師を初我々も寢食を爲て居たりしなり先無難の趣きを知りえて安心此上奇し率其功德を爰に於て説せられて然るべしと皆々を勸めければ世尊も亦云にや及ぶ可と予急ぎ法坐を開んと其事も既に定る程ハ斯奥深き山中にて誰に告る者も無に追々貴賤群集して總て法坐に連かりしハ物云ねども折々に微吹風が便りして遠近人ハ告しにやあらん又不思議の一つなりけり偕又彼執杖が母なる丹車ハ不豫も執杖が淫街にて横死せし由を傳え聞つゝ打驚き悲みのするものゝ元より其性薄情なればさのみ歎きも沈もやらす彼が死骸ハ燒失たれど骨も尋ねずして打過たりされども慾に賢き身の上なれば只善星を餌にして迦毘羅城より莫大の扶持を受けて世を安樂に暮さばやと巧む心の急れて順て摩迦陀國へ赴きたるに折しも其日の難陀太子の御所に立給ふ御即位の日よて御一門の方々の更なり百官百司ハ裝束にて皆々參内の有様を人々山を爲て予見物す其混雜に往來も儘ならねバ遺かの丹車も殆ど困つゝと有る羨望やに立寄て盡の支度などする處へ參内の供人二人來りて酒肴を誂へければ此ハ好者の來りしと丹車ハ其一人又向て御即位の事を尋しに彼の供人の云けるやう我等ハ迦毘羅城の御親族なる甘露飯王の御内人あるが今日の有様の中々以て言葉にも



及べぬ御祝儀なり此難陀太子と云ハ一体御所を繼給ふ御方にて無りしがは物領の悉達太子の御出家ありて御世を繼られず然れば其御子の羅喉羅様が繼給ふべきを是にも繼がせられねば余儀なく此難陀さまに究りたる由イヤ逆も人と生れるならハ帝様が將軍なり同じく三度の飯を喰處のどうか似やうなれども今日の御儀式の様子などを見てハ一向世界の別なり又此世界にて子を持つならば今云ふたる二つの内ころ願わしけれ我々のやうなる拙らぬ子を持つ運にて又持るゝも不運なりア、酒でも存分に飲て我と我にて天子様の心持みならずとすれども夫程に香代のなし我物とてハ下着計りにて今日が濟ば上着の刺れ寒い體に明日からの酒處か浮かりと飯さへ替てハ喰せませぬ何と奥さん憚りながら一つお合を頼れしど甘き言葉に附込ハ下部の習みて飯初の猪口をさゝれて否とも云れず丹車の余儀もなく更らに酒を調へて彼等に與へどらして又問やう時よお前方にお存て無かハ知ねども悉達太子の御子の羅喉羅様の外にも有やうに聞たるが其御方の又如何成れて御所をば取給ハぬみやされバハ羅喉羅様の外よまだ何と云ふ子か有しが譯ありて開ハ衣立ぬお子ゆハ一旦お寺へ行給ひて其後憐も川へ入てお果て成れしと云噂を何ぞや誰やらより聞たりしが此君

などこそは運の無人と云さん御息災にてだに有からバ今日の舉れハ其方なるを死てハ花實が出来ませぬと云つハ笑ハバ丹車も同くほハ笑ながら開ハ痛しく御不愍なる御子なりかし併ながら若今も猶世にお坐ハ何遊すとてござらうイヤ飯令お達者にて矢張此世に御坐とも今日の事が濟んだる上ハ御所附にてハ立れぬ漸なり然あがら名にをほ大國の若君なれば蔭も日向もあるものやいつ廉の御身の上を取立らるゝハ知たことなり何とろんお目出度子を拾ひ度てハ御坐らぬかと醉が廻りて戯くを聞て連なる獨の下部ハ坐を立ながら開りや拾ふまいものども云れず其様謹言いふて今夜夢にても拾ふたが好モ御退出に間も有まじ御門前へ出て待べしサア來やれと共に打連れ立丹車に禮を述べ、踏跟ながら出て行後に丹車の心配の顔色漸くに取直して帯引つゝろこゝに立出て開ハしく我宿に歸りきて借善星を近く招きよせ此程遙々其方の爲に迦毘羅城へ赴きて彼處の容子を見てけるに難陀太子の御所附にて淨飯王の仙洞に移り給ふとの事なれば最早吾子の萬乗の位には附事は能ハず然ればとて此儘に置んや急ぎ誠の御父なる世尊の許へ連れ申せば我よりも骨折て一廉の御身と成やうに働き給へ元より方に行儀好く物の言さば立振舞何呉かくれ心をつけて何を喰べ



いかを喰ふべいと端たなき言葉を遣はず又の寝るべり立膝などの忘れても仕給ふな然りながら人々にいさも大へいに此仕やれ彼仕やれと重々しくいひ給ひ世尊の外誰にても手を拱て物言ぬがよし借又世尊の酒肴の類ひの一切御禁物にて只香花を好み給ふと豫てより聞たれば幸ひ庭又咲たる花を澤山お苞に拵へて明日早く赴くべし吾子も其心して朝疾より起出給へど教つゝ其身も何かの用意を調へけり

釋迦八相倭文庫四十一編終

釋迦八相倭文庫四十二編

借も丹車の善星を伴ひて我家を出て世尊の許へ心ざし道を急ぎゆきて既に靈鷲山の麓なる驛路迄來ける時俄に勞れを覺しうば有休屋へ立寄て先店前へ腰打掛ヤ善星どの爰までやつとの事にて來りきたれども先足が重くて歩まれず御身の左のなきか然れば社私しも爰迄來ら急に勞れて最う行れぬなり見れば彼の建石に耆闍崛山へ一里と有れば早纒よして二人共又足の痛むの不思議の事にとろされば夫のさうとしてわれ先彼を見られよ彼も山も此頃の市が初りて取分けに人の參詣も夥多と道行人の物語ぬイヤ夫よりも態く携し此花を御覽じませ今迄麗に咲て有しが爰へ來て不思議にも蕾まで萎みましたが如何にも見れば水もわり折角遠き道をうけて其方の父御へ上んどせしに早此様に萎て六日の菫浦十日の菊なり思ふに之の世尊の身に向り圖ずも禍んな事の有兆らせにのわらざらんかイヤ思ひ中りたり究めて此山中にの出湯の有て其暖まりにて斯萎たるものならん好眞水へ浸しなば咲直しすすべきなれど二人が足の斯弱りて如何に爲るともならず好を爰の主を頼て此花を先耆闍崛山なる羅漢の許まで送る可しと頼て主を呼近付て我々二人の此お山の



世尊へ由縁ある者にて参詣に参りしが思はず足の痛むものうら暫く爰も休ふゆへ此花桶を  
 太義ながら羅漢の許まで送り届けて世尊の身内よりの捧げ物有り何れ後より参ると云よし  
 を何卒能く傳へて給よと頼む主の俄に敬ひて委細畏り奉つる世尊のお身内と承まれば等  
 閑に致しませぬ御緩りと御休息遊ばされよ此山の不思議にも足腰の痛む者などが一度  
 其土を踏時の早歸に杖を捨跳も立て戻る程の難地なれば少にてもお快よくのお静に登り  
 給へ先兎も角も此花桶を早く届すべしと花桶携へて出行ければ丹車の歡びて善星に向ひ  
 此程も度々云聞せし如く今にも世尊に遇ひ給へ私しが身を大切に恵み給へと云れよりし  
 若や羅漢の中などにて其方獨を引取れば好きさど云者おらばイヤすりや中々ならぬと予  
 我身を養育せられたる大恩のある丹車あれば粗器にあらぬと云聞されよ忘れても朴訥が  
 家の事などを語ると其方の爲にならぬ予よと操返して云其内にはや日も西へ傾きて横顔ま  
 ばゆく照さるゝころ法坐の下参にて人々がどやゝと押込來りて何なりとも有合の物にて  
 腹滿らしたし早くも飯を爰へ三人彼處へ五人と夫々集りて吐き立れば雜沓前垂襟かけ女  
 どもも葛羹餡掛煎豆腐何れも精進の茹蕪の作肉皿鉢持運ぶ一時の繁昌を漏さじと張店なれ

バ年寄の齒に噛しめる南無陀くの煎ころばし芋の堅煎に堅意地なる祖母様も飯を喰さし  
 てイヤ此方衆や隣の伯母何と有難いてのちまきぬう然々なり又と有まじ今日の御法坐コ  
 見やしやんせ未袖の泪が乾くぬ予や明日も勉て早くより参詣爲てないういの此の有難御  
 法門を慳貪なる私等が嫁にも聞して其角を折せたり又御前の嫁の事を言るゝが先聞や私も  
 嫡男に些と法坐に参れと勸れど其な事を聞度ない夫よりも私ガ信仰なる骨牌参りをせら  
 れよ杯と空とぼけて只私ガ腰の巾着に計りに目を附て居るナ、其悴で思ひ出したり先き世  
 尊の御法談中に我業因の子なる者が今日此の麓まで來りしと仰ありしが世尊のお子の羅喉  
 羅様より外にいなしと今まで思ひしが未外にも在すとの初て聞たり左様どもゝサア支度  
 が好バ出ろくべしとて腰のくの字又伴達て杖つきのゝ字に出て行を丹車の窺かに見送りて  
 はや善星の爰に來たるを知り給ふとの歡べし今にも迎ひの來事りと待間程なく此の家の主  
 じの持行たる花桶を其儘に引提歸りて二人が前へすゝみ出是のゝ待遠様にておわせし  
 ならん諸者閣欄山へ参りて仰の如く羅漢の中の御一老なる舍利弗尊者に傳へし處る最前世  
 尊の説法の中にはや今日此山の麓まで我因位の惡縁なる者來りたるよしを説せらるれば开



の必ず其者ならんが何の兎もわれ御佛へ奉つると云此花の斯く萎し受取ず此の正しく信  
 心なき族らの捧げ物あるべければ速りに戻せりし然しあがら其儘にも聞捨られね評議の  
 上羅漢の中に此方より對面に赴く可しと仰せありしと語る處へ店の小者が只今表へ御山  
 より富世那様と阿那律様の御山なりと告るを聞主の急ぎ身を起しつゝ出迎ひて一間へ案内  
 し頓二人の者共へ其由を斯と云告れば丹車の聊か後れし色ありて善星も亦阿那律富世那と  
 聞よりも吠と顔の色を俄に變て越方の事を悔めども元よりして心猛き生れなれば氣を取直  
 して此上の何とせん兎も角もして二人の者を言包ばせと覺しな丹車の跡へ引續て一間へ  
 入れば先丹車の二人の羅漢に一禮なし諸大様に云けるやう今日しも妾が此子を伴ひて登山致  
 せしの外ならず過し年より圖らずも世尊の御子なる者の痛く難儀に零落給ふを妾が不圖救  
 ひ取りて此程まで育まつれば开を迦毘羅城へ伴ひ参らせんと内々聞合せし處此の御子の表  
 立ぬ身あればとて彼處へ引受なき趣きなり开の有間敷事なれども开を兎や角とやさ  
 んよりも寧ろ今世尊は外に在ませば夫社通れぬ御中ゆゑ今日お渡しすさん爲に遙々爰迄参  
 りし處習ぬ遠路の勞れにや殊のふ足の惱ぐゆへ略義ながらも先の程爰の主を以てす上ぬ情

又承まればはや迦毘羅城の御世繼の難陀太子に定まりて既に御即位のお式も済て淨飯王  
 の仙洞御所へ移らせられしとあるうらゝの殘念ながら此君を後々迄も御世繼に立させ給ふ事  
 にの最早参るまじ又御父の一切衆生濟度の御身と成らせ給ふものうら俗身の子を御養ひ遊  
 ばさるゝ謂れもなし之に依て迦毘羅城へ世尊よりして仰立られ善星様の御所領として海川  
 山の三國を分ち與へ給ふやう成下さらば大切に育し甲斐ある妾が歡びの此上あらじと云を  
 聞き富世那尊者の眉を擡めてコハ不審なる一言哉尤も御子に善星とやせしの有たれども开  
 の故有て表立ぬ御子なれば過し年鬱鬱の院へ送られてより我何うと御世話爲す其御子の今  
 已に世に坐す謂れなきを如何にして御身の伴ひ召しやと云れて丹車の目に角立开の何事  
 ぞや今更世に有もなきも入す則ち之にお坐ころ善星さまよ相違なし其方若しお世話も成  
 れたらば如何よ年月の立たればとて左計に忘し事あらじ能く御顔を見あげ給へと云るゝ  
 程に猶差俯きて一句出ぬ善星が心の中如何ならん其時阿那律の傍より左の人の面さし  
 の能く似者も有習ひなり方が一其善星様が猶も此世に御生存ば勇々しき谷の有ものうら聞  
 捨よの致されず御不憫に存れども世を去給ふの速に御身の幸いなり生て耻を晒さんより



も死て人に惜まるゝころ誠の人の心ダけずとそしらぬ振にて云つゝも見れば紛ハぬ善星童子なりければ疎かにいさされじと思へども伴ふ女の心底の最悪巧みある事の顯るれば二人とも論しつ戀しつして其上にて兎も角も取計のんと豫てより富貴那と阿那律ダ云合たる事ども知らぬ丹車の憤してコハ聞悪き言葉うな勇々救答の有身とありての第一に世尊の御取ならずや何を以てさの宣ふすと詰る言葉を聞あへず富貴那の携へ來りたる二タ品をやをら取出して左れ其証據の此品々なり此の木根に血汐を以て善星此流に身を沈むと書殘し又此の着類を木の枝に掛て正しく死れし善星童子なれば爰に居給ふ謂れ亦し道ならぬ心より世尊を欺く女の巧みなれば誰り誠と思はんや然ればこそ其惡心の印にの身達ハ此の麓迄來り來ども爰よりして御山に登られず其故の忝けなくも凡夫の目に見へぬとも此山の口々をバ諸天神達の手を分て嚴しく警固あるものうら惡心の者の縛繩を以て縛附て登山を免されず左れば最前献じたる花とても其如くなり施主の心誠とならぬバ蓄まても疾恙みぬ若夫只今にも懺悔して心を改めらるゝならバ我々とても好取成して兎も角も致すべしと説諭されて丹車の當惑しつゝ言葉なれば傍らより阿那律ダ又云や御身の素貧しき身お

るガ釋氏の家へ子を連て二度添に入りたる丹車どのどの速知たり其の夫の執杖といふハ迦毘羅城の御親族にて既に摺陀彌女も宮仕せしガ小しく不義の事よりして義絶となりしも皆其方の心惡きガ故なり又二代目の執杖ハ淫慾より事の起て淫街の廓よて横死を爲と聞傳へたり今お二人とも身懺悔して疾世尊に結縁しての如何に予やと示す言葉又己ガ名の顔も丹車の中々に慇懃深き企てなれば懺悔杯する心どての露計りもなきものから氣をいらちつゝ又云ふやうイヤ二人の衆我身の上の事てあし今迄の世尊をバ尊き佛と思ひしに理を非に曲て現在の子を子ども思ハぬ人非人夫ハ附添其方衆なれば最早口數聞ハ空とにころ此子獨り位を養ふて育れぬ身てもなきに難曲附て子を捨るとハ今は聞に及バず然ながら若我らガ爰にて此子を殺すを見るも知らず顔して居らるゝうイヤ中々人ハ勿論虫蟲なりども殺すを見れば之を助るガ我等の身の勤なり左らバ罪の事此子をバ二人の目の前にてと云れて善星ハ驚愕として丹車の顔を差覗けバナニ御前を殺し度ハなけれども余りと云ハバ聞分なき二人の言葉と云ふよりも阿那律ハ顔色正しイヤ聞分なしと云ハ其方の事なりコレ只今其心さへ直るならばと云しを何と聞れたるヲエ、心の直るもなきものず是迄の我ガ丹精を報ひ



て呉れる事のなれば、可惜口に風引せしこそ無役なれど、愚痴ながら傍らなる花桶確と蹴飛しつゝ、善星來たれど荒々しく其坐を出て行けれ、富貴那の阿那律に向て云やう何と互に察せし如くにて大慾無慙の心底に見へたれば、我が得意の辨舌にても縁無者の度し難し又貴僧の宿明通の論しにも及び難き、慾の道なりハテ是非もなき愛世の習ひにこそ左らば此儘罷るべしとて共に此家を立出ける。○丹車の元の一間に戻り來て今夜の爰に宿りつゝ、腹立紛れに酒を購め飽迄過して夜食も仕舞夜具を取寄せ寐臥つゝ、イヤ是善よ腰を敲け其方が事にて足腰を痛め其上開度もなき身の上三味云れも爲たり所詮望の叶ぬ予や佛に善の綱も切たり明日ウらの何なりとも肩に棒當て好く稼ご己を樂に過せうしア、寐て待果報の何來るうと鼻歌謠ふ傍なる隔の襖を押開きて寐て待果報を授けやうと云つゝ、這る一人の男を丹車の驚きながらも熟々見てヤアこそ奇人の今日晝間儘りに表の腰掛にて飯喰ふて居たる商人とのど云れて彼方の襖を建切て近く寄つゝ、聲を潜め斯商人に身を塞ど其方の素性を聞たる上の我が誠の名をも明すべし好聞給へ我が開も阿闍世太子の御内にて軍婆羅と云者なるが此度世尊へ法施として頻婆娑羅王より種々の寶を數多送らるゝ夫を押へる忍の役なり最前よ

りの物語を我れ儘かに聞取たれば阿闍世太子に進め込善星どのを取立させん心安く思われよと寐耳よ水の幸ひに丹車の匆起て言葉を改ため開の忝けなき仰う然なる時の妾が面目なれば一塵のお役にもと云を打消し猶潛きてイヤ差たる役義をするよりも最前羅漢の言葉を聞けば結縁せよと進めらる儀の心に染まじきが何と予髪を落して世尊の許へ近寄つゝ、方の内通を頼みたし今に見られよ世の中の提婆と阿闍世のものあらん其時こそ莫大なる思賞に預るは是れ目前のとなり寐て待果報もなきにわらずと語る處へ軍婆羅の手先が一人様子伺ひ歸り來て次の間より襖を開て手招すれバイヤ爰へ來よ此方の已に味方なれば苦しうらず様子如何よりやと問へばさんい頻婆娑羅王より法施の物の既に爰より三里程の山中まで車に積て來たるを儘かに見届け侍りぬチ、出來たり左らば先今夜の内に奪ひ取らん其方の此女儀を背負て早く我宿へ戻るべし我の此子の髪を缺みて跡より直に行べしとて即坐よ善星の頭髪を缺みて散髪とし斯々せよと教へ進めて山へぞ登らせつゝ、己れの闇しく彼の品を奪ふ仕事に出掛ける偕又阿那律富貴那の二人の耆闍嵐の方丈へ立戻りて舍利弗目連に打向ひ丹車の慾心善星様の体の卑賤なる相の面に顯れて眼尖どに骨太く其惡心の鏡に照



すが如しと云へば羅漢達も歎息して道が世尊の見通したり之まで間を見透を見て此御子の  
 事を言ども彼の我仇なる者と計り宣ひて少も心に掛させられぬとも今日折角籠まで來給ふ  
 者を如何にもして御濟度に預うらせ未來も助け參らせ度と皆々云ける开が中に獨り目蓮の  
 進み出て我念晴しに今一度行て能く論し見んとて夜とも云ず其坐より直に籠へ下り行其  
 の道すがら月澄渡りて遠に聞ゆる瀧の音夜の深々と更ゆくにつれ木魂に響て凄然く梢に宿  
 る鳥の聲も佛法僧と聞ゆるのいと尊き山路の岩根を枕に寐たる者ありぬ此の今日の參詣  
 人の道に後れし者なるういざ伴ひて籠まで送りて遣んとて近より見れば竹の先に何やら  
 ん挟みて側に立たれぬやをら取て月に翳して開き見れば髻なりぬ此の殊勝にも今日新た  
 我佛門に入たる者う兎も角も先尋て見んと呼起して情見るに最年若なる生法師なれば目  
 蓮の和りにコヤのふ聊り驚くまじ我の世尊の御弟子にて目蓮と呼ぶる者なり其の順逆の  
 知らぬ共道心の心ざし甚頼もしく覺ゆるなり名の何と呼ぶるやと言れて諸の早くも覺り  
 て左れば我ころの聞も及ばん世尊の一字善星なるが越方の咎を償ふために斯る姿に改めて  
 父上様の許へ行てお側に給仕致し度ナ、夫の天晴なりシテ又養ひ受られし女中の如何に致

せし予左れば彼の先の程阿那律富婁那と爭論して願の達せぬとを恨みて我を宿屋に置去し  
 て行方知れずになりたれば外に便りもなきものから其方を宜しく頼のみて直様世尊の御元  
 へ何卒伴なひ呉られよと誠しやりに云にぞ目蓮の打點頭ナ、然もわらん心得たり好く社發  
 心召れたり誠の我を初めとして數多の羅漢も御身の事をいと案じて朝暮に寐食とても安  
 くせずヤア何其の寐食どの如何なるとてあする予イヤ寐食どの寐事と食るとをやすなり  
 皆々御身の上を案じる余りに夜寐るも快よく眠られず物食べるにも胸に支へて思ふ儘よ  
 り喰られす之皆真心の厚きが故ナ、夫あらば何にも怖き事ではないさぬナニサ、よし  
 なき言語りするよりもイザ此の竹を苞にして世尊の元へ急がれよサ、我引續きて怪我せ  
 ぬやうよ來たまへと目蓮の忠々しく善星を予伴なひ歸へりしを見て羅漢達の殊のふ歡びつ  
 其の翌日衣を着せ願て世尊の御前より伴ひて出たれども歡び給ふ氣色もなく好くも見やり  
 給ぬ何とやら坐中も志らけて皆手持なく見へたる處へ息を切て馳來る者あり舍利弗の  
 立て之れを支へ止め事の様子を尋れば彼の者息繼あへず云ける様某しの頻婆娑羅王より參  
 らせらるゝ使者なるが此の程約せし法施の品玉の冠りを初めとして所有珍器珍物を多く車



又積て贈られ並びに長者如閻達よりも若干の贈り物も同じ車に積て某し堅固して來りし處  
 夜前此の麓より百丁彼處の山中にて數百人の盜賊又出合て烈しく防ぎ戦ふと雖ども彼らの  
 豫て勢を揃へ待設けたる不敵の曲者なり此方の不慮の人数足ねば力及ばずして彼の品々を  
 残らず奪ひ取れしうば此身の面目何處にあらんイテ切腹と覺期の仕ながら大事の役目を抱  
 し身分なれば待や暫しと思ひ返して生甲斐もなき一命を爰迄延し來りし此の目錄を捧ん  
 爲なりイザ先之を差出すを舍利弗の受取て高らうに之を讀上るに皆結構なる寶の品々に  
 て讀ども盡ぬ王の法施あり又如閻達より送れる物も亦た莫大なる金銀珠玉と披露央ばに件  
 の使者の諸肌脱て刃に手を掛て免させ給へ尊きも場を穢すの最恐れ多けれども止事を得ず  
 武士の一分なれば此の場を去りての言分立ず腹掻切てやし譯と既に斯くよと見へけるを世  
 尊の早くも見返りて夫止めよとの一聲に舍利弗急に走り寄り支へ止めて聲聞しくコハ何に  
 急まり給ふな貴殿が腹を召れしとて其の品々の戻るにもわらず實に忝けなき此度の施物哉  
 如何にも貴き物との云と豈人の命に替んや貴殿今身の晴れに命を捨なば折角なる施主の功  
 徳も却つて罪果となりもやせん佛の慈悲を本として只其の志をしを受くべきなれば其の品

々を何にり爲ん俗人の其品々を望て其の志をしを歡ばず然れば其の寶の長く保す此の目錄  
 の通り法施の物の舍利弗儘かに受取たり此の由を歸りてやし上なば聊か落度の筋にいなら  
 じ今其の品物を盜賊らが奪ふと雖ども終に戻る恵みあり之れ皆佛の功德予やと怨を離れ  
 て人を救ふ情も深き舍利弗の言葉を歡びつゝ件の使者の泪流してやすやラコハ忝けなき仰  
 せ哉其の盜賊とて外人ならず即ち施主の若君なる阿闍世太子が提婆に與して爲らるゝ事な  
 り此の命冥加に拙者ガ力の及ぶだけは佛の功德を弘むべし左らば早く立歸つて此等の次  
 第を披露せんと一禮しつゝ塵打拂ひて本意なげに立出ける後に居並ぶ羅漢達の皆々阿闍世  
 の悪巧みを怖しとぞ嘆じけるに末坐に扣へし善星のみは斯る難儀の物語りを事とも思はぬ  
 風情なりしが頓て聲立つゝ笑ひければ目遣の使者の歸るや否や是れ善星どの其方の今大  
 難に逢たる物語りを聞つゝ聲を上げて笑ひ給ふが如何ある笑しきとの有て然バの事よ是程  
 笑しき事ハおし開い又何故ぞサア我父の世に二人となき尊き人と聞たるが此の一事にて  
 其の愚りなるの知れぬ如何んとなれん若干の法施の寶を盜人に横取せらるゝ不徳の程ころ  
 思ひ遣れて笑ひたり濡手て粟を奪ひたる其の阿闍世と云者こそ大徳備はる尊き者よと早彼



に組する非道の本性の言葉に懸れたるを世尊の聞ぬ風情にて目蓮を近く召れ彼の善星の汝  
 も預るなり急度教諭を加へてよと宣ふ折うら御堂の内へ何やらん怪しげに光る物の入しと  
 見ゆる途端に世尊の暫時正体もなく見へ給ふに予皆々驚く程もかく起直り給ひしと何と  
 く愁を含みて宣ふやうやヨ羅漢達今我れに父上の御一念を以て御命終を知らせ給へば直様  
 宮中へ赴かん舍利弗目蓮は供をせよ其外の残すべし富貴那の我に代りて説法を勤よ三ヶ條  
 の留守の支配なり嚴重に守れりし君召す時の駕を待す殊も尊き我父の慕ひせ給ふ御一念片  
 時も猶豫なり難し速赴かんと如意以て虚空を招き給へば紫雲の忽然と舞下りて世尊及び舍  
 利弗目蓮を覆ふに予其中に玉の蓮臺顯れて天の諸神の之を昇き或る龍馬に跨がりて惡魔を  
 拂ふ神もあり其の眞先に草駄天の立て蓮臺の鼻棒へ手を掛つゝ虚空を走るものうら五百  
 里の摩迦陀國の愚りなり万里も瞬く問なるべし夫生有る者の必ず滅し會たる者の必ず離る  
 此れは是世の中の定まり事にて譬へ万城の天子万福の長者と云と雖ども争てり流轉を通る  
 へき左れば此の程摩迦陀國の帝なる淨飯王の御病はりも唯飯初の事なりしも限りなき世に  
 限りある老の惱となり給へば名醫の配劑百薬も唯金銀を費すのみにて露聊かも其の効なけ

れは仙洞御所に橋曇彌難陀太子を初めとして鹿野女好容夫人及び優陀夷夫婦其の外も皆  
 な晝の終日夜の夜もすがら御伽にお枕元を少しも去らず介抱を爲し奉つれば仙洞の其の精  
 を深く勞らひ給ひつゝ、橋曇彌彌又宣ふやう磨快よく天が下を難陀に譲りて仙洞に移り樂々  
 どして聊かも心に残る事もなし老の惱の自然の事ゆへ悔ひ悲むに足らねども臨終の際に世  
 尊に見えずして此の儘に此の世を去んると唯夫のみ案じられて一入重る此の病き何卒醫未  
 だ世にある内一目逢て後の世をも頼み度すと聞ゆれば如何にも道理様なり斯る次第を知  
 るならば何ぞや強て願はず世尊を留め参らすべきを自から口一つにて此度の御惱をお  
 重するところ面目なき口惜さ去し頃懇ろに我君の世尊の御他行を留給ひしに斯る事のあるを  
 自然と知し召てのとなるう此の御親子の血筋の糸の引處なりけん知ぬ妻が淺ましくも進め  
 て出し参らせしを今更悔て返らねども追てはあ行先を尋たし優陀夷の知るやと橋曇彌より  
 尋ね給へばさんい某世尊の御行先の速より詮議仕つり度々御迎へも出せしうと先より先へ  
 赴き給へば皆行違ひていひき此の程の靈鷲山なる耆闍崖山に在ますとの噂なり斯く俄に重  
 らせられずの急ぎの使ひも間に合ふ可きが彼處までの道程の千五百里余とあれは昨日急ぎ







遣はしたる使ひも未だ迎ても行つくまじと夫のみ案じて僕が身の爰に在れども魂ひの知らぬ彼地へ行たる如し何卒御氣を勵ませられて召上り物をきこし召あそばされ未だ中々御命終杯とす事にはあらじ全たく風に氣候の障りの重しと云ども御熱だに薄なばすらく御本腹の目の前りにいれんと力を附れば浄飯王イヤ優陀夷何を云予今日酉の刻が死期あるぞ迎ても世尊に逢れぬことなれば迫ての事靈鷲山の方へ向ひて我一念を晴したし皆暫く次へ立て啓が呼ぶ夫までい爰へ来る事勿れと聲を正しく宣へば覺束なくの思へども皆々是非もさく退きける其の時仙洞の身を起し給ひて死後に残して益もなし冥土の道の身を清めんと伽羅沈香旃檀杯あらん限り一つに爲て香爐に盛て薫らせつゝ御庭先を開放して靈鷲山の方に向ひ座を左右へ打拂ひ一念力を凝し給へば不思議や其の時御口より琉璃の如き物飛出し其の儘其處に伏給ひぬ此世尊を渴仰あらせられたる一心の爲處にて御魂も脱出たるならん此時の朝の巳の刻なりしがや二時餘り立ども未だ伏給ふ儘なれば此のはや崩御ま給ふうと隔の隙より伺ふ優陀夷の女房の獨り氣を揉みあせれども追に優陀夷の取合ず伏給ふまの崩御にわらず仮令へ神去給へばとて給命なれば争てう背れんやとはいへども知死期と

宣い志酉の刻にも早近し兎や角と思ひ回らしつゝ蔭を守る程もなく向はせ給ふ虚空より香ばしき風の吹に伴一叢の雲の矢を射如くに御所の庭面に舞下りて其の内より忽然として世尊並びに舍利弗目蓮の顯れ出て闍がはしく王の邊りに進み給ふ此れ親と子の縁厚くして知死期を知する一念の即時に届きし不思議なり世尊の淨飯王の頭部をやをら撫給ひてのふ父上如何や只今釋迦が参りたりと宣へば父王の自らむくと起直りてアラ有難や僅の間に世尊の爰へ來ませしりお事今靈鷲山の耆闍崛山に在する由啓が臨終も明日を待ねば責て臨終の暇乞に我念力を屈りせんと渴仰しつゝ伏たる夢に御身の足を摩りしと思ひし尙夢ならして斯く舍利弗目蓮まで伴なひ來たる神通の殊に尊き臨終の歡び皆來れりしと呼ばせ給へば一間の内より橋曇彌難陀太子を初めとして皆く御臨終に漏まじとて處狭まで詰けるに宮殿の内へ忽ち靈香の薫り満ちて御惱も速に薄らぎつゝ世尊の御袈裟を放ち給はず只管念佛志給ふものうら世尊の御親族を初め羅喉羅優陀夷夫婦及び局ね達に至るまで御暇乞を致させつゝ頓て四句の偈を授け給へば淨飯王の眠るが如く寛に神去給ひける此の時虚空に諸佛薩埵の來迎して音樂を奏して因生の隨應を顯しけるの尊しといふも愚かなり偕又難陀太



子橋曼彌羅喉羅の君を初めとして伽の局ね優陀夷夫婦光明大臣其の外男女に至るまで雲霞の如くに集まり居て一度に嘆く其の聲の夥多しきろの中に世尊の合掌十念を授け給ふ其の体に對應して自から最も殊勝に聞へける斯くて尊骸を七寶の棺に取收りて香華を供養しつゝ世尊を初め奉つり羅漢も諸共に御供養の法式も事終りて初利天上寺へ納め奉つるに決れば橋曼彌及び伽の局ね達ハ皆く剃髪して尼になり御跡を吊らひ奉つり度よしを願ひしと皆々異議なく御許しを蒙りける緒又優陀夷も先づ年既に出家と成たれども未だ剃髪し許るされざりしを爰に於て漸く願ひを遂續きて女房も尼になりたき由を願ひしうども難陀太子ハ彼の獨りの願ひを許し給はず此ハ正しく跡々の爲を思召ての事からんり既よ御葬式の時刻にも至れば世尊ハ末世孝心の手本にとて御棺の前を昇て輿丁に渡し給へば御親族ハ云も更なり月卿雲客之れを警固し優陀夷ハ殊に大切なる御位牌持の役を蒙り光明の臣ハ御留守を預けられて御所に残りたり去る程に御行列ハ宮中より音樂にて靜やかに操出しつゝ先摩耶山の麓にて御供養の上御尊骸を茶毘し奉つり夫よりして天上寺なる摩耶夫人の陵の上へ埋葬して十三層の寶塔を嚴重に建させられ無位正覺の生如來が自ら御供養遊

ハさるゝが上に神力不可思議なる羅漢までが丹誠を凝して尊靈を吊ひ奉つれば御再生ハ兜率天ぞと皆く擧つて云と雖ども中々左にハ非ざるべし究めて西方の淨刹に往生させ給ふべし穴賢々々「サ是ハ誰ナにも御存じの如く椰子の油ハ第一に切疵氷傷霜傷の大妙藥なり如何なる手の荒性にて是此の如くに摺込バ氷傷霜傷ハ一夜ハ癒る予や又此の實の皮を以て酒を飲バ酒中らず先づ杯きとなり升となり柄杓となり椀となり又足を附ればお鉢となる五の調法ある物なれば五調法なる椰子の實なり此の靈熱山の名物なれば今度此の度初まりました八日市場のお土産に樂ハ此程に負て上るハ、御用り彼方へもハイ左様なら此方へもサ、お購めなされお贈めなされサア狼多羅をまけます〜此の狼多羅と云物ハ日本國の紙の如くに文字を書たり畫を畫たり又色文春情文でもお好み次第に書れる予や若々其處の女房さんイヤ此方のお老婆さん御遠慮なく此處へお寄りなされ安く負ます其のお子の手習紙にても買さんせ此れ是丈をお負にすれば鼻でも拭だが好いはいな輩その事と思ひ切てまう二三枚晩のお寐間のお入用程負て進めるサ、買さんせ〜夫でも否ならシヨコトがないサア誰でも此處でも近ふよりて手に取て御覽じませ蠟や角で拵へた珊瑚珠ハ御さ



りませぬ此の黒ん坊が流沙川で取て磨ひた品々五分でも六分でもお好み次第なり又の根懸の小玉揃ひ廉價こうに上ます此の黒ん坊の顔が看板なり年の三五の娘子の貰入れの緒へ杯も日本ての直が高い私の本元の御し並直段の三五五文安くて目玉り飛出ますはト人玉頭願ヒヨツクリ玉何んぼ玉やていどて何様玉をバ賣ませぬサア姉さん一ツ召て下さらぬ此の夥しい参詣に今日の一つも賣ぬゆへ明日より御法座の入用になる珠數玉までも爲た方ダ好らうへサアお苞に買て下され仕舞物だ安く負ます此れ血の垂れるやうな流沙川の鯉鮒鱈此れ日本の江戸川や刀禰川淀川も名物なれど流沙川の野べとの競べ物にのりませぬ予併し江戸の日本橋ての初鯉を小判で買どの狭に似合ぬ勇な國だ夫の好が今日の未だ一疋も賣ぬ性な日だ何と椰子賣どの見るに貴様の先きよりゑろう設けた容子だ私未だ錢の顔を今日の些とも見ないのへイヤ貴様の物の賣ぬ筈よ此の市を何と思ふ予世尊此の御山に御法坐を開うれてより参詣の人の皆念佛三昧の者され何て着を買もの予迫て生て居ならん放し龜の代りにどてヒヨットしたらバ賣まいものでもなし如何さま左様だよ其上に此の二三日前の夜のどと頻婆娑羅王より莫大なる寶物と金を澤山に此のお山へお納ら

るゝを圖ずも麓の山續きて奪はれたと云ふ噂があるゆゑ余所の事でも氣の減る習にて人ダ錢を費はぬ筈だ夫を思へバ鯉鮒鱈をりて稼ぐよりも盗人が一番割が好いと知らずよ云も疵持胸は打るゝ釘の先折らんとて椰子油賣の冷笑ひてろりや本眞の事でもあるまじ人の徳もならぬのに好く其様事を云たがるが屹度市にて損をしたる奴が此の市の景氣をさびらす悪口ならん貴様ろんなに儲けたくバ先初春の賣初門松を賣五月六日は菖蒲九月十日にナツト菊迄もない知れて居るイヤはや我等は今銅も釜も皆な賣喰だイヤ戯言の借置何ぞ好儲け口があるならバ教へて下され一生恩に着まどろや左らバ本眞に我ら任せにありて商賣する氣が有るならバ先改めて親分子分の杯きしたる上にて密々に傳授するところある既に今我子分となりたる人ダ此の前方貴様も好く似て年の市も春掃初の筈と塵拂を賣らバ一廉の錢儲けなりと市も出て箒に塵拂くと賣しが皆身祝ひに出る市の人なれば初春よりはたきての御徳が悪いとて云ひ合せねど人の心の同じ事よて獨りも買ぬバ其まゝ賣残りて此の餅も春ぬ上に元手が皆借物なれば此の節季に賣まれ言譯するより寧ろ駈落と決たるを私ダ一言の賣聲の傳授にて其の朝飯前に賣残り物を一本残さず賣切しの外でもなしついで爲た事



のほうきと云をばつこめと云はたきの事をさひひと呼と教へし通りに大音にてはつこめ  
くさいひひくと呼たれば何うの情置慾の深き世の中なれば我一先も買も道理にて賣れ  
るも亦道理の此んなものよ又去年の暮の市にも此様阿房が獨ありてそりや又元が田舎の大  
工にて仕事か暇にて此暮の峻ぎに錢を儲けんとて女中衆が洗濯の衣を張る板を拵へしが此  
の未だ賣人もなければ何處でもなくて困る物ゆへ獨りぢめと考へしに儲も余程智恵袋の  
廣い奴じやと思ひしが夫から先が阿房ゆゑ市へ賣に出うけつゝ衣が一丈引返しに張れる板  
より思ひ附て丈張く丈張の板を召ませア張附板を負ましたと大音に呼を聞て市の群集  
の人々の呆れて那奴の氣でも觸たるう丈張の張付のと余程各の重い奴なり丈張ならば板よ  
りも鏡にまたらぬ地獄より閻魔どのでも買に來ようと惡口聞かれる計にて未だ一枚も賣ぬ  
ゆゑ一寸と賣聲を教へたれば日の暮際より賣出て火の點や點ぬ間に皆賣切て仕舞たるが其  
賣聲とて只だ一口にはるいたくと呼だもの故來る時の閻魔顔が戻る時の地藏顔にてこり  
や春の來前の祝ひにはる板どの縁起が好し何ぞやより女房が欲がつてゐたも道理なり入口  
の戸へ張物すると大屋様より呼立られて劍突を喰ふゆへ一杯飲ずに張返んとて獨りに直が

出來て二人が買を三人で四枚となりける何事も時と人氣を取るのが肝用と立あがらの咄  
し央に并に店を出したる狼多羅賣も爰へ來りてイヤ親方最前よりの商買咄しを立聞せしが  
可笑き中にも道理のありて其方の才智に感心したり何を隠さう私の去年の年の市に譲り葉  
を賣て思ひの外に儲けたるゆへ此の八日市の追目をして狼多羅どの考へ過の智恵に負て  
サツパリ賣ず何ぞ私も其方の子分にして照降のなき金の莖を授て下さるまいかチ、二人  
ともに受合たり先づ私が賣此の椰子の油を生蠟の中へ交物して質の中へ詰て置氷傷赤切の  
妙薬にお負を付て切疵焼傷に功能もなき薬を萬能膏とて賣に等しく只辨舌にて威せば山家  
同者や扱参りも根が安くて好きぢなり私が娘のお末を勤めて手も足も氷傷赤切にて芥子の  
熱したるやうなればこりや何よりの芭げ物予よ一ッ呉といふもわり父様や悴を欺す鼻薬よ  
りも安上りなれば己も彼もど買行ハ資本入すの掴み取なり其處で多くの私の子分達は追々  
に唐へ渡り夫より又和國にも渡りて今江戸なすの大道にて山薬を賣ものを椰子と云ひ皆私  
が手先の者よ左れば三國の椰子の司を親分と頼むらに今より直に我宿へ伴て戻らん早  
日も暮たり二人とも見世をばねて一所よ來やれと云つゝ店を取纏めて二人を連れて道の程五



十丁ほど山裏の家に戻りて二人を呼上先づ其方達の賣物を直段好く我買取んと云つゝ戸棚引開て金苞みを取出して二人が前へ抛出せば互に呆て取ざるを先取ると受取せつゝ肴を拵へて酒の用意の出来る中に親分子分の契約せんと一つの巻物をとり出し二人に見すれば肴賣のつくぐと見て頭を掻其の契約どの何の事じや此巻物の中に残らず上下を着たやうなる文字があれど私ぞ知たのの一をろく二をぶり三をきのじ杯と魚河岸の符牒の外に給つけさせぬと云ふに又狼多羅賣も額を撫ハイ私しも御同様と云ふ此方の黙頭で左らば吾讀聞せん近く寄て好く聞べし一此度貴殿と親子契約を致せし上の善惡共に違背せず勿論他言致す問敷若之を背くに於ては上の三十三天の神々下の地神の冥罰を屹度蒙る處也依て誓文件の如し其方が名の何と云ふ私しは肴屋麻九郎シテ其方の名の八百屋の芋八ム、サア是へ爪印せよへいゝといふに予其時此方の屹となりチ、二人とも其如く確又爪印せし上の何を隠さん某ころの阿闍世太子に頼まれて世尊を滅す其爲に數万人の一味を集る軍婆羅と云者なりと聞より一愕エ、ヒ一是れさな怖れ予驚くまじ今にも本望を達する上の貴様達も阿闍世太子の御家人なりはや手初めに頻婆娑羅王及び如闍達よりの法施の物を奪ひ取て爰に在

ぬ此莫大なる此の寶や金が欲くの骨を折と肩肘張て云聞する折しも圖す襖を開きてぬつと入たる善星はイヤ好き事の出来たるを疾知せたく思へども出入が殊に嚴敷ゆゑ今日裏手の山を抜て漸どの事にて來りたり此節我等の祖父が亡なりて世尊の潛み彼方へ行れ説法の富婁那めが似者して胡麻加せば今此時を謀なば此山の羅漢共の籠の鳥を捨るよりも容易きとに非ずやと誇り顔に傳ふれば軍婆羅の膝立直して其は好き時節の來りたり少しも猶豫の成ずかし今より直に阿闍世太子へ告て火急に事を計るべしと云つゝ立て着替る物具手下の者にも用意を爲させてイヤ善星様の先跡に残りて御休息われ幸ひ肴も有合すれば一杯給て行れよと云折りらる響く鐘に善星の耳聳てゝありしが那れの初夜の勤の合圖なり斯して居られまじ左らば其肴を一つ貰て山へ歸らうとて彼流沙川の鯉を引提つゝ表の方へ出ながらこりや天上の時が來て鯉どの有難や山寺への本道の一里余りよて裏山を抜れば半道に足すと云つゝも其處に繁りたる路の志のぶを引むしりて鯉を手早く押包み志のぶ鯉どの有難し彼の鐘の鳴終らぬ其中にとて御山を向て予急ぎける

釋迦八相倭文庫四十二編終



釋迦八相倭文庫四十三編

さる程に者關崖山に富婁那尊者の世尊を代りて妙法を説又三ヶ條の一山の取締りなりとて命ぜられたれば最堅固に守りつゝ、仙洞の崩御も自然と知れければ日暮の勤行も尙怠らざりしに不思議と地震の如くに法堂の震ふに富婁那尊者の天眼第一なる阿那律に命じて此地妖を見究させしに阿那律の直様定入ぬ斯の時非常を知する鐘を敲く者ありければ優樓頻羅迦葉心元なく急ぎ取次の間へ立出見れば取亂したる二人の者來りて先一人の者の言ける様定て御存もゐるべし私の此の御山の麓なる宿屋の主にて侍るなり又此に居り八日市の商人にて我方へ宿を取心底も確なる者ゆる同道致しぬ諸私しらす斯く亂れたる様にて參し仔細の開も過つる日阿闍世太子の家臣なる軍婆羅と云ふ者我方に宿を取居て世尊の御内と云ふ女童と大膽ある事を巧しを此の者合宿の隣坐敷にて具に聞夫より二人云合せて心を附しに明白に分りぬ諸軍婆羅の此御山を奪取て羅漢達を慶ろしにする巧みより過つる頃頻婆娑羅王及び如閻達よりも此の御山に納し若干の寶を奪ひ取て夫を其處此處振り侍て數多の人夫を手に入て既私しの宿の責口に究竟の場所なりとて一味入べき由を云ひ勸げれど

も私くしは之れを開入なけれハ先刻軍婆羅が我宿に來りて一味せずハ生て置ぬといふ其争ひより終に戦ひて幸ひに軍婆羅が首の斯の如く持參せり則ち軍婆羅が懷中せし一味の連判帳を奪ひ取たれば先之を見て其人數の多勢を知給へと差出すを優樓頻羅の開見て打驚きこゝ容易からざる一山の大事なり能ころ急告たる予其心さし強ち世尊へ致すのみならず皆三寶を奪む其功德の豈天道の捨可きや願て世尊へ達すべきが汝は又宿屋を素より本業と爲す者とも見えず如何と尋ければさん其御不密なきに非ず开も我の私良摩國達婆の家臣寶頭盧と云ふ者なりしが國王に父を討れ其上に母諸共に國を拂れて余義なく此處の母の古郷なれば共に來て住む中又母の死去哀なる武士の馴も習ぬ田を耕して其日を送る甲斐ありて今の世尊の此の御山に來らせ給ひてより參詣の者の行戻りに休ひ處に望れしが終に其の事の繁きがゆゑ余義なく宿屋どのなり侍れど昔を捨ぬ武士の魂の鏑を以て鳥合勢の百二百の敵手に取んも心安くあるべしと具に語れば優樓頻羅の切ころく潔よき身の素性哉其達婆と云者の惡逆にて國を失ひしが今其甥なる者が國を取り立て宇傳王と云なり然ハ御身が同輩ならん迦旃延と云者の早世尊の徒弟となりて羅漢の中に在御身も世尊に隨從し



て後世安樂を願はんやと勸けれバ賓頭盧の井の何より以て願ふ處なり偏に頼み置侍るなり  
と云ふ下よりも今獨の黒男が尙進み出て私其昔と堅立太子の家臣の子なるが斯く色の黒  
を以て市に棄られて人となり名を迦留大と云ふ者なり願くは某しも共に御弟子の中頼と  
あれバ優樓頻羅迦葉は快よく二人の願の確又聞届ぬ諸此の連判の面を見れば其勢二千余人  
あれど唯怖べき其の中の四天王の者に在なり斯る大事のある告にや一山に無明の烟霧舞き  
又地の震ふと不思議なれば最前天眼通を得し阿那律を以て定に入夫等の事を見究させぬと  
云ふ折節幽に鈴の音の響ければ此の阿那律が定より出たり事を聞たる上にて計るべき手立  
もあらん暫らく爰に待べしといひ乘て法堂に赴きければ阿那律の定を出て羅漢達を待ける  
所へ皆馳集りて世界の有様如何なりやと尋ければ阿那律の眉を擡めて我定に入て世界の事  
を見たるどころ此山の思しき大事の出來り開の提婆の軍勢凡そ二千余人今將に此の一山を  
襲り取んとする其勢ひの左ながら破竹の如くなり就中提婆の家臣中にて四天王と呼ばれたる  
俱伽梨の臣乾陀婆伽留羅提舍三聞達多獅子分身の勢ひは殊に凄じけれども亦防べき手立も  
あらんが今此靈山に不思議と無明の雲霧覆ひて自から腥き風のあるなれば何を以て諸神諸

佛の應護あるべきや此希代の珍事ありと嘆息するを見て羅漢達の我々も疾より斯く思ひぬ  
今賓頭盧及び迦留大と云ふ者二人今尊者の告に違ひぬ一山の大事を告來りて軍婆羅と云ふ  
者の首を取て持來りたり彼の頻婆娑羅王并に如閻達より法施を盜し奴にて此の頃身を  
山藥を賣者に變して數多の人夫を語ひたる由夫のみならず善星に惡巧を勧めたれば先善星  
を捕へて糺し見べくとて其處此處の部屋へを尋見けれども更に見わたらずして不思議と  
靈位堂の裏手より烟の出ければ早速其處を見てけるに善星は香爐の内に佛具を打焚て着を  
焼優々と喰居ければ阿那律の驚きて此の生ながら魔道に入しや善星どの爰を何と思ふて着  
を喰ふ不此一山の潔齋の地にして五辛肉食を禁ずる事の先に堅く云渡し置ぬ殊に仙洞の崩  
御に依て大切の勤行中なるに斯る尊き靈位を並ぶる段上を汚す事先以て世尊への恐れあり  
斯る事のある兆もや一山に希有の事ありと泪を落して云ければ優樓頻羅も堪兼て其方の軍  
婆羅に一味して此一山の者に何を以て仇を爲や爰に其方の父が法坐を開き給ひて衆生等に  
無常迅速を示さるゝ靈山なり先此方へ來ませと云ひければ善星の二人を白眼附てヤア我を  
誰と思ふや世尊爰に在さぬ其時の我此山の主人なり鳥を喰ひ着を喰ども誰に遠慮のあるべ



きぞシテまた今我祖父が崩御して此魚になりたるか若し祖父や父が着になれば着なり何ぞ  
 と云へば因じや果じや報ひじやと云居る前世に馬が川へ落て此世で川が馬に落るか一寸先  
 の間の世なり何ても喰たき物を喰ふを以て極樂と爲がよし汝らの夫も喰へぬ之も喰ぬと今  
 に豆腐も喰れぬぞや我目より見る時の羅漢ども餓鬼道と思ふあり如何にも汝が云如く  
 我此山に登し軍婆羅に一味して羅漢どもを俘囚する手引を頼れたり夫が惡きう如何に  
 ずや汝らの此我家臣筋なり惡く袖なりと障りなば不忠の咎を蒙らん命惜く我意に従ひて  
 阿闍世の方へ我供に草履なりとも撰むべしと論に絶たる言葉聞いて優樓頻羅の先段より引  
 下して法堂に坐せしめつゝ其方の早魔属に入れバ我云ふ言葉耳にも入まじきと云へバ  
 情なきゆゑ一通りを聞するなり若干に一つも耳に留れバ先其方の仕合せなり扱鯉と云魚の  
 三十六の鱗を持て是陰の數にて能く神變を施す物なり之を烘て烟らす時に人の眼を瞑ま  
 すのみならず諸神諸佛も之を深く忌嫌ふ物ゆへに再々の天變ありしも今之れ又て知りぬ然  
 りとの知らて阿那律を定入らしめて山下の事を見せしめけれバ此一山を攻る法賊二千余  
 人ありぬ夫に一味有上にの喩へ世尊の御子といへども法の道に君臣なし糺明させずや

と云を聞より善星の直とたちてナニ我を糺明するとやと怒りを宥むる富世那を取て抛捨  
 逃んとするを優樓頻羅の裾を引止めて今世尊に代りて説法を致せば此れ世尊あり夫を抛る  
 の此れ父を抛ぐるに殊ならずもは忍ぶ余る善星を捕へん皆々來ませと云ふ聲も四五人  
 一集馳掛て終に繩めに掛たる折うら籠の方にて雷の如き鯨波を發しけれバ優樓頻羅等ハス  
 者共の責來るに予二男那提三男伽耶や急ぎ向ふて敵を防ぐべし富世那及び羅漢の面々の  
 爰にて丹誠を凝して天神地祇へ怨敵退散を祈るべしと論しつゝ法衣の上に降魔の太刀を佩  
 て急ぎ出けるに彼の賓頭盧のばや一合戦して爰に立戻り來て優樓頻羅を見るよりも御坊暫  
 く待給へ我最前御舍弟二人に伴達て厭離穢土欣求淨土の願を眞先も靡うして馳向ひ先陣の  
 者と戦ひしが提婆阿闍世の爰に來らず提婆の四天王の者を大將として其勢尤も強けれバ彼  
 らを相敵にして勝たれバとて詮なし爰の謀客にて一先此山を開きて無事を計り給へ中々十  
 や二十の端た勢にて防ぐべきところに非ず御身得心の上ならば二人へも云次べきにと云  
 を聞より優樓頻羅迦葉の如何も軍の掛引ありて其利に附されバ敗北するハ勿論されども  
 其方の俗人ですら厭離穢土欣求淨土を尊びて三方に一命を棄るをや我足らずも御留守の警



固を直々に命ぜらるれば爰に命を棄る覺悟せり若し叶ぬ其時の假に昔の魔道又立歸りて身を千方に分ちて戦はん汝等二人の身の願ひ富貴那まで云ひ置たれば心安うれ我の返さじとて麓を指て行んとすれば賓頭盧の御身斯までに覺悟ある上某し何り命を惜まんイテ御供と引續きて赴く向ふより二人の迦葉の新手の多勢に追卷られて退くを優樓頻羅の齒嚙をなして追やらんとしてけれども其勢の殊に夥多しければ法堂の方を顧みて伏拜みつゝ我偶々外道を免れて阿羅漢果を得しが今又外道に落入されば此敵を討事ならず佛道を守る神の坐を在ざるう優樓頻羅を守る菩薩の無き事かど嘆じければ此の不思議なる哉麓の方へ法堂の中より二ツの光物の飛行しが山の中段に落るよと見へける中に其丈五丈余りの二人の力士に變じて惣身恰も朱の如くにて大の腕以て大岩石を擡擡て怨敵退治とといふ聲も天に轟き地に響き怖しく見へける其の中に彼の大磐石を敵の群がる真中へ抛打ければ流石の佛敵も之れよは避易して大半は大磐石に挫れてければ後陣に扣へし者之れを見るよりも逃去りて瞬くひまに一山平穩になりたるに全く此の密迹金剛の加護あるが故なり左れば未代にも寺門に祭る二王と云ふの則ち是なりき去程に又丹車の軍婆羅の差圖に依て阿闍世の館へ奔

たる寶物なすを人夫に齎せて赴き密りに案内を乞て軍婆羅よりの手紙を渡しければ阿闍世の手紙にて委き事を知急ぎ丹車を召出して尙有し事なすを尋ければ元より口まめの丹車なれば善星を善闇囑に登せて内通を致せしに此の程世尊の父の亡て世尊の迦毘羅城に至りて跡の羅漢のみ縁に居る由なればころ幸ひ今急に攻まな籠の鳥を捨るよりも易き事と告來るがゆゑ軍婆羅の俄に提婆どのへ是を告しかば世尊の留守を攻るに我行迄も無し我代として腹臣の四人の者を遣んとて豫じめ軍勢の調ひたるまでを聞て我の彼の家を出ぬ何卒事の遂し上の善星の兎も角も自らを恵み下されよ先暫く此の館の奥に止り侍るがゆへ御心安く成下されと云ふに阿闍世の打點頭て开は幸ひかな此奥も今締する女も無れば万事何かに氣を附て女どもの差配を頼なり事達せし上には善星の一簾の者ども成ん先休息致せとて暇を給ひ幸いに明たる好部屋の有を以て丹車に與ければ殊なふ歡びつゝ元より不敵の魂いなれば阿闍世の甘き言葉よりはや大奥どもなりたる心地して數多の女中を殘ず部屋に呼入て阿闍世太子よりの頼みに依て此奥の支配をすれば此れ迄の如何なるとも此よりの我差圖を好守りて勤べしと一々名前と顔を見覺て殊更權威を取が上り又何とぞ韋提希夫人の非を見



出し成る無者として己一國の女の司と成ん事を巧しに目の寄處へ玉とやらにて女中の内にも悪賢き者へ今丹車に取入て身の立處なしと思ひて日に一輕薄の者も殖けるゆゑ其の者等に云つけて韋提希夫人の身の行ひ又彼の奥殿の女中の不仕だらを見付次第に我に告よ其の者を退けて其の跡役にして取すなど沙汰しければ之を聞て歡ぶ者もあり又怖る者も有けり偕又頻婆娑羅王の過し頃世尊に値偶してより厚く三寶を尊び長く宮中又留め奉らんと爲けるに一子阿闍世の逆意より勿体無くも竊かに國中を出し奉りしが夫より耆闍崖山に法坐を開き給ふと聞き若干の寶を五百輛の車又附て之を贈らせけるに途中にて奪れたる事を竊に聞給ひ此も阿闍世の爲處と深く御心を痛め給ひしに迦毘羅城の仙洞崩御に依て世尊の天上寺に來らせ給ふよしを聞給へば是好折こそなれば彼處へ赴きて尙無常の法門をも聞度又取殘したる寶を布施して我子の惡事を贖ひつゝ二世を助りたしと思へども此事阿闍世の耳入らば又妨げの出來べきゆゑ如何せん且竊に韋提希夫人に語り給へば然あらば我召仕の名をかり給ひて女の駕に召れて輿より出なば彼處の勿論此方も知者斷て少し斯思召たらば急ぎ御參詣あれかしと畏くも教へ給へば頻婆娑羅王殊に歡び給ひて誠に夫に越事お

しとて重き女中の名をかりつゝ其の駕に召せて竊に輿を出給ひぬ諸隱すより顯るのなしとの諭への如く此頃日にち毎日阿闍世太子より四方へ横目の者を徘徊さすれば此の駕の夕陽山へ赴きしを貪官と云ふ者之れを見つけて急ぎ阿闍世太子の方へ通達に及ければ阿闍世太子の殊に怒りつゝ我父兔に角世尊に誑うされて國中の寶を奪れ尽して果に土民に落ゆる事を先達て提婆の諭しけるが誠に夫なりき今日又女共を使として夕陽山へやらるゝ事最安心ならず鳥も翅なくて飛れず彼の使を爲者を警めなば終りの父も音信を止べし急ぎ今日使に出たる女中の誰なりとも歸りを待受て途中より此方へ乗物を奪ひ來よ以後の見せ示に爲事ありと云傍らより丹車の云けるやう何ぞ予其役を我に勤させ給へ惣て女の事の女が計りて利ありと云ふに阿闍世太子は夫ころ好らめと云へば丹車の急ぎ衣服を改め腹心の女中を誑ひ又下人迄も阿闍世太子の服臣の者を撰びて美々しき乗物を取ださせて夫に乘て急ぎ夕陽山なる天上寺の道へと急がせけり斯て又韋提希夫人の方に於ても豫てより此方の奥へ横目の者を通いせ置ければ今日大輿より女中の駕の出たるを見附て告る者あるに依て太子の其の者を奪へんと丹車と云ふ新參の老女を赴けしと聞へければ韋提希夫人ハト胸を突給



ひ若其の者に駕を奪れなば我君の難儀の如何ならん斯る事を顧り見なば疾月光の臣に命じて好謀らん者を極密の出御今更悔るに甲斐なし然ながら急ぎ其の事を彼處に知らせしめて暫らく御跡を見合せ置跡より好御迎の者を遣さんと急ぎつゝ思しき側女に云合て天上寺へ急せける扱又頻婆娑羅王の恙なく御參詣を遂られて世尊に目見へ奉り越方阿闍世が重くの咎を詫給ひて又若干の寶を獻て妙なる説法を懇ろに聞給ひて御快く天上寺を下りつゝ廣き林の央に至り給へば獨の女中が夫と見るより駕に近づきて唯今韋提希夫人の御參詣なり御身の定て夫人の女中と見ゆる急ぎ駕をとり侍りて御目見へ有れと云へば附の女中之れも答へけるやう此女中の仔細有れば駕の儘にて御目見苦しからず其方の未だ見知らぬ者なるが何れを勤る女ありや大輿の者ならば我を知らぬ事の有まじと理附れば然れば今日大輿の極御忍びの事なれば途中を憚りて總て御供の者の今參りの者のみを召連られて彼處なる山麓に往來を避て下人らを拂ひ置の此方も人を拂ひて御目見あるべしと理を云へば聊か不審にの思へども亦さる事のなきにも非ずと御駕を其邊に昇き居へさせて下人共を拂ひて御駕の内なる頻婆娑羅王へ云々と言上すれば然れば大輿も忍ぶに余りて密に參詣有しう傍りに

人もなければ對面せんとてやをらちん乗物をとり給ひて被きの衣に御姿を隠し給ふ儘にて其の駕を差覗き給へば丹車の石を尋て玉を得る心地して諸の女中との偽りなり是予頻婆娑羅王なりとほく笑み堅唾を吞て駕の戸を開きつゝ出て土に手をつけば帝の俄りに驚き給ひて汝の如何なる者にて韋提希の名を騙りて爰に來たるやと宣へば左れば其御不審の御尤なり我の今參りの者にて未だ御目見も致さぬを幸ひと今日密に御夫人に命ぜられし事の外あらず君潜り又宮を出給ひし事を早くも阿闍世の君に告る者ありしうに途中にて御前を奪ひ取らんと已に數人を爰に向けられぬ先畏れながら妾の乗物と其御乗物を取替て還御あるばされ妾の万一太子に捕れても命を惜まずに君の事を隠せとて呉々も仰せ含められたれば人目に懸り給へぬうち急ぎ之に乗り給へど顔に誠を顯して云ひければ神ならぬ身の情なや附添女中も阿闍世太子の振舞の夫らの事をせぬにあらねば女の云ふとを今の偽りとも思はず好婦人の助にて無事に歸る嬉しさと君も歡び給ひて急ぎ其駕に乗給へば丹車の仕濟したりと彼の女中に向ひて其方へ太子方にて見覺へもあらん我々の御駕を守りて先に行は是迄の御供連に付添ふて後より歸り給へ頼て奥にてゆるりとお目もじ致さんと氣をおち



つうせつ、豫て合圖の事あれバ木蔭よりして六尺ごもの馳集りて件の駕を昇て行よ阿闍世の方へ行どの知らず君の御供の遙りに引下りて怖るく戻りけるを韋提希夫人より更らに出たる使の女の之れを見るより馳付て其側女に向ひて云々の混雜あれバ一先君の御歸りを扣へ給へど韋提希さまの仰せありしと告げれば女中共は二度驚き惜の今の其丹車と云ふ女ならめ情けなし如何に方々今君を入れ奉りし阿闍世太子の廻し者なりいざ足手の續く丈の追付て取戻し給へ此の何とせんと周章嗚叫びて云ふを聞スハやと侍下人まで其御跡を一走に追駈ぬ去程は頻婆娑羅王の丹車の謀計にて阿闍世の方に捕れ來給ひて生心地もなく居給ふを阿闍世太子の殊更怒りて己が居間に引入つ、傍りを警固させ頼て糾問し給ふやう御身何を以て女中の名を騙りて世尊の方へ赴きしや此の究めて我へ忍ぶに依てならんさ程我に心を置給ひなせに我を殺し給ひぬや我其方を警めたくの思ひねども自然其方の惡意より天の網に掛り給へば左な御嘆き有まじと匂りければ頻婆娑羅王の堪へりぬて惡意どの何事や我何とぞして親子二世の安樂を願へばこそ世尊の方へも參詣すれど云ふを待ずに尙聲を願まして黙りめされよ親子とわれバ則ち子の某しなり我二世の安樂を争て願ひ

呉れ召者ぞ先我生るゝ其時に劍の中へ落せし如何や此れ偽りの一つあり又我毎々諫めやをも聞し召すして國の寶を世尊羅漢に隠れ忍びて施し我又位を讓ずして國を絶やさんとする慈悲無き親が又と世に有べきや人の親となりての慈に止るとい下賤の者も辨まゆるに夫に何やや鳥獸に劣て子を子とせず國を國とせず我自滅せる事を巧めばとて豈天道の免すべきや過つる頃莫大なる藏の寶を世尊に贈られたれど親の寶の子の寶に非ざるの無がゆゑ我軍婆羅に奪はせて手に入ぬ則ち之なりと丹車が持て來し寶物を目前に取并つゝコハ定し御見知の物ならん誠ある親子ならバ我へ附屬するを以て二世安樂の道とも云ふに僻み曲りし老木の松撓直すにも益なし又之れを忍諾にする時の國中の寶の皆滅して我路頭に迷ふこそ目の的なれば我今より自立して國王となれば國に二人の王無きを以て其方の罪は最重しといへども刃の死を宥めて獄屋に閉居成しむると聞えければ頻婆娑羅王の慈傷の泪を拂ひ給ひて嫡子が立腹は又理なきにも非ざるがと云懸れば目をむき出して理なきにも非ずと其方にも已に分りなば益なき言葉を宣ふなど云へど尙止給はず我の早世は短き命なれば汝が意にも服すべきが子として親を獄屋に下さば天の咎め其の身に報うべきと云ひ給へばから



くと打笑ひて其方我を生べ則ち親なり我も亦子をもてば親なり今よりの我國の王となる上の國の爲に悪王を成敗するを豈天の惡み給ふ謂れあらんや如何に貪官獄へ直様伴まして堅固に守りの者を附置て食事の勿論湯水などを如何なる者が運ども堅く禁じて入れまじと尖き言葉に貪官の御老体をも痛りなく伴奉つる予不敵なれ斯る折から阿闍世の前へ提婆殿より御使の來ると告るに予左らば表坐敷にて對面の用意せよと直様衣服を改めて對面してけれは提婆の使の敬々しく禮義を述べ備此程世尊の天上寺にありて耆闍崖に羅漢のみゆる軍婆羅を案内として提婆の四天王の臣を以て攻させし處ろ敗北せしのみならず軍婆羅及び四天王の臣等の希代の力士に憂目を見れば極密の謀計を以て世尊を滅し重々の鬱憤を拂す物語を急よ致たけれは君にも御出有べきやう主人提婆より直々に云ひ侍りたりと披露すれば阿闍世王开の誠に口惜き事にこそ我急ぎ行べき筈なれ共今日國王を廢して我今より國政を改むれば此由を告て不參を述べし又此方より使をもて云ひ送らんとせしに幸ひの使なれば託するなり开は余の儀に非ず何ぞや烟儀を調へし我妻女を急ぎ此方へ送る可きやう懇ろに傳へよ最早此の一國の我物ゆる未頼母しく思ふやう委しく云吳よと其日の

有様な予も語り問もなく使者を返しけり情御痛しきの獨り頻婆娑羅王にて大國の帝に坐まして殊に御老体に及びける御身を七重の獄に囚られて番卒殊に嚴敷守りけれは針の庭に居よりも尙辛く覺し召のみならず三度の餉の愚か織の湯水だに與へさせぬは事う太子の劍にかゝりたる方こそ増ならんと悲歎泣き給ふ御涙も端無く乾く饑渴の苦みの何に喩へん方もかし諸章提希夫人の我君の終に獄に囚られしと聞給ひて阿闍世の許へさまとに詫入れれども只國を亡ぼす惡王あればさる事ハ愚かあり是を深く嘆き給ひ共獄屋に入給へな予と云ひ暮れば頼みの綱も切れ侍れど又其の儘にも捨置べき者ならぬは夜とて更に寢給はず肝膽を碎かせらるゝ折柄三度の餉の勿論聊かの湯水をも與へ給ひぬ由を告る者者けれは身を震ひして驚き給ひ然る上の先給物を急ぎ送んとて自ら精心を込給ひて馴も習ひぬ水仕業に御手を滯して清らかに米を炊ぎ又其外の珍味を撰びつゝ夫人の泪に露も増す厚き心の羹な予才智ある女中に持せて獄屋の中へ送らせけるに間もなく其の女中が馳戻りて泪ながらに告るやう御丹誠の品々を大切守りて獄屋の前へ至りしどころ門内より警固の者出來りて咎めけるゆゑ是ハ大輿より君へ奉る物なり異儀なく通されよと云ひけれは君と云ふハ阿



闇世王に在ますなり其の君何ぞ是の穢れたる獄屋に居給ふや疾歸れと匂りけるゆゑ頻婆娑  
 羅王へ聊か贈る御品と言は如何さま夫にてあらん夫ならば尙通す事の相成ず食事の勿論水  
 一たり共御臺の愚か天道様があ越されても通す事と堅く戒められたり見通すこと相成ず  
 と棒を以て粉々に器諸共打碎きて門内に入侍ると告るを聞給ひて韋提希夫人はらくと  
 涙を落し給ひ借りはや下人迄に君を初め自らまで斯く侮らるゝやうになりしか左も有らん  
 君閉居わらせられしと聞よりも此奥の女どもさへ大半阿闍世の奥へぞ移りたれば男ども  
 云ふよや及ぶ好此の上の命に掛ても君の饑渴を助くべきに俄かに沐浴を成給ひて蘇蜜を  
 麩に交給ひ清淨なる御身に塗り又瓔珞の中に蒲桃の漿を盛最上の御服を召給ひて天地を拜  
 しつゝ何卒我誠心の障りなく君に届く様に守給へイテ女ども我供せよ天日未だ地に落給  
 ずと嘆きの色に恨を含むその粧ひぞ優なりける

釋迦八相倭文庫四十二編終

釋迦八相倭文庫四十四編

去程に韋提希夫人の御心を勵まされて君の閉居在す獄の方へ赴らせ給ふ御車を見付てけれ  
 ば獄の外番ある者急ぎ此の趣きを食曾官の役場へ訴へければ食曾官の直ちに門前に立出車  
 を押留めて云やうコハ心得ぬ夫人の御入哉我此の獄を司とれば疎うに夫人たりども入る事  
 の相成ず速りに車を引戻されよと權柄に匂りければ老女の進み出如何に其方の警固の司に  
 て堅く守る事の知らぬにあらず阿闍世様の夫人のお子ならずや開の人も依るすかし是非  
 を辨へぬ鹿言哉近頃無禮なり又夫人に於ても其方の家臣の身として斯る疎忽を云ひて濟べ  
 きや濟どもく其處らひ已に合點あり今阿闍世王の國の主在すなり其御方より嚴敷命せ  
 らるゝがゆる入奉つるとの相成らぬと云募るを老女の聞兼て其方も好聞れよ最前夫人より  
 送られし品有しどころ給物の聊か入る事相成ずとて其品々を皆打碎せし如何に予や成ず  
 ば其由を斷りて然るべきに夫人に對して慮外千万夫も咎め給はずして給へ物を禁ずと有ら  
 ば只今生の御暇乞に御來臨ありたるなり何ほど厳しく禁せらるゝとも一方成ぬ御身を思ひ  
 て其方より好程に取計らひて此世のお別れをさせ奉つるを以て人の道ども云べき今夫人



大王に拜謁給へばとて如何なるさわりに成べきやと理りを云へば貪官の給物さへ持運  
 はずの穩便に入れべきとて左ながら鷹の如き目を見張て夫人の勿論女中達の身の廻りを見  
 ましけるに重立し女中の中に何とぞ君に拜謁えなば志ざしを奉つらんと聊う菓物なす  
 隠し持たる包を見顯のされて皆奪ひ取られ獄屋の入口にて留められぬ借貪官が獄の錠を  
 開る音の凡そ十里も響く計りなれば女中の吠と肝を冷せと章提希夫人の嬉しさの余りに夫  
 さへ耳に入れずして急ぎ只お獨にて獄の内へ入りて見れば元より火の氣もなく濕々と冷へ  
 渡りて日の目も見ぬ薄暗く何處に君の居給ふと見廻す傍へに聊うの屏風を以て圍ふて有  
 れば开を掻開きてと見るより誠又哀れなる君の有様哉やをら抱きまゐらせて暫しの言葉も  
 泣のみなり頻婆娑羅王の元より衰へ給ふ上にて三日一粒の米の勿論湯水も上らず今此  
 世に秋過て泣も苦しき罍陀羅の野に残る虫の息のみにて只聊う動られるを一つの力先環  
 珞の漿を吸せまいらせしに御咽喉の渴盡志にや通じ侍らぬ抱き起しまいらせて吸しめけ  
 れば遠々に甘露の味あるを以て忽ち御顔も麗しく御目を見開き給ひたる此の夢よての非ざ  
 るかと啞び泣に泣給ふゆへ御脊を撫摩りて頓て身内に塗り給ひたる麩いを含ませ給へば快

く聞し召ければ夫人のいと歡つゝ頓て御前に平伏して宣ふやう誠に不意の事よりして御身  
 の大難に及びて言葉に盡す様も之なき次第なり自らの是れまでにさまじくと詫び入れれど  
 も阿闍世の更らに聞入ぬのみならず尙召上り物を禁せしと聞しよりも妾の咽喉迄も差詰  
 る心地すれば急ぎ食物を送らせけるを嚴敷断りて入れぬとわれ自ら天地を拜して此二品  
 を持來りたる甲斐ありて御快よく召上りしを見奉りて此の上の歡びのなし明日も亦斯の如  
 くして來ませば今暫らくの苦を忍び給へ其内より何れども致すべしと忠しく述べければ頻婆  
 娑羅王の御泪を拂ひ給ひてア、忝じけなき誠心哉誰う之れを爲すべきぞ只妻子の外に又ど  
 有んや其子たる者に斯せらるゝも親の心には少しも彼れを惡しと思ひぬば先阿闍世の心  
 ろ任せにして於て呉れどわれ夫人の涙を呑つゝ君も左の覺さるゝや妾も如何なる憂目を  
 見る迎も恨みと思ひぬども何卒彼が行末を好き者に致し度思ふなり総て世の人の親の子  
 ゆゑ又憂目を見る者の如何計りぞ親程も子の思はずして親を捨て歸る子の山路に若しや迷  
 りぬ爲にとて乘を立るも親の慈悲なり夫れら此れらを例しとして今暫らくも丈夫にと諫む  
 る處へ貪官の余りの隙取り心得ずと入來たるを見給へば後の言葉も嵐吹く心の中を忍び



つゝ間もなく輿殿へ返らせける。偕又世尊の頻婆娑羅王の天上寺へ來りてより大難に遇ひ給ふ事を自然と知り給へば目蓮を以て救ひ給へどありければ目蓮の直様天上寺を出て阿闍世の館近く迄紛れ入つゝ高らうみ念佛を唱へて布施を乞ふがゆへに阿闍世に依ねる者之をいち早く見付て欺し賺して細目に掛け阿闍世の前へ引出しければ阿闍世の機嫌斜めならず歡びて先づ目蓮に向ひて我此程世尊の族を招きて我父の獄に囚る様を見せ示さんと思ひしに計らずも汝の來たる事こそ幸ひなり其方の弟子の中にも知れ者と聞及ぶなり能も我父を騙らうして數多の寶を奪い取りしぞ先我父の餓死するを見せたる上にて汝も其處にて干殺さん急ぎ貪官官の手に渡して牢縛しめよとわれは丹車の走り出て端近くにイずみつゝ是や目蓮我の丹車と云者なり先に我善星を育みて世尊の元へ送らんとて蹈も習ぬ山坂を越て伴行しに富婁那と阿那律と云奴輩が恩儀も知らぬ痴漢までけんもほろゝの挨拶に數多の路用を費せしが天の恵みにて今のは斯る姿と成たるを好見て置よ偕ても小氣味好様かなと空笑ひして翫りつゝ間もなく牢屋へ送らせける偕目蓮の斯くなる事疾より知りてのとなるゆへ牢屋に入しをいと歡び何ぞ頻婆娑羅王に拜謁へ説法して苦痛を脱せ給へんと思

へども同じ獄屋の内なれども其居間を隔ちければ身に備はりし神通を以て夜に入れの姿を頻婆娑羅王の枕邊に顯ひして法を説き示し又八戒を授けて娑婆の苦惱を退らしめ偕又韋提希夫人の謀客をめぐらして日に一過ひ給ひて潜りに食事を勤めけるゆゑ頻婆娑羅王の目蓮の説法に苦患を忘れ又夫人の爲に饑渴を忘れて健かに在しける既に獄に入給ひてより三七日程立ども未だ亡給ひねば阿闍世王の殊なふ怒りて急ぎ貪官官を召出して嚴敷尋ねければ貪官官も云ふやう誠に其の御不審なきにわらず私しも殊更不審に存じて様々に工夫を致しぬ开も頻婆娑羅の獄に入給ひて三日過て大輿より膳部を持せ送り處豫て嚴しく申渡し置たれば其の品を打捨侍りし間もなく韋提希夫人の來らせ給ひて今生の御暇乞に拜謁ゆるのみなり食事の聊か持しどわれは御身の廻を改めて吟味の上に入奉りてより毎日の御見舞も以前に替へらず誠に食事を召さぬ身の斯生延び給ふ謂れやあると心付バ一日二日忍て心を付て見てける處韋提希様の何やら御身に塗りたる物をすゝめ給ひ又瓔珞の内よりして小さき壺を取出して物を吸ひせ給ふ處を確に見付ぬ又夜分に別に繋ぎおく目蓮が不思議と頻婆娑羅の枕邊に來りて何やら唱ふれば涙を流して之を聞給ふ有様の殊に不審の晴ざる處



とわりの儘を訴へければ阿闍世王の憤然と眼を怒らせてアラ思ひしき者どもかな然ハ先章  
 提希より成敗を爲んとて俄に丹車に事を告て大輿へ伴行し時も時韋提希夫人の今既に頻婆  
 娑羅王の方へ赴うんと思召て瓔珞の内へ漿を志たしめ衣服なす取出したる處なれば手早く  
 丹車の衣服を剝取て改めんとするを女中達ハ之れを支へ留むるを蹴はなして内外を改め見  
 るに如何にも妙なる香の薫わり尙瓔珞をも取らんとするを獨りの女中が携へて逃んどする  
 を阿闍世王は其の女を散々に打敲き抛退けつゝ瓔珞を改むれば案の如くにさゝいの漿志た  
 しめて有るを見るより阿闍世王は其の瓔珞を踏粉して漿を庭に抛捨てて劍を振て韋提希夫人  
 を探し廻る其の有さまハ阿修羅王の荒たる如くにて其處の廊下彼處の妻戸も皆踏こなして  
 出合者ハ或ハ踏れ抛られて生心地も無き中にも何卒韋提希さまを助け參らせんと忠臣の者  
 ハ命を捨て掛るもあり又心無き者ハ部屋へに駈籠りて戸棚や葛籠の中に隠れ忍びて桑原  
 へ方歳樂と身をふるわして怖るゝ者もありぬ此騒ぎを韋提希夫人ハ自ら鎮めんとて數多  
 の諫も聞し召さずして自ら對面の間へ出給ひけるを阿闍世王ハト見るよりも鷹の鳥を掴む  
 が如くに走りかゝりて只一討にと氷の如き劍を振り上たりし折柄後ろにて押ゆる者ありて

身を捨てて誰かと思れば月光の臣なり又其の處へ耆婆大臣の馳せ來りて阿闍世王の左右の  
 腕を押へつゝ先耆婆の云ふやうコハ無道なり昔しより以來諸々の惡王ありて國威を食るが  
 ゆゑに父を弑せし者一万余人ありと聞しが其母を弑す者を未だ聞ずと云ふに續きて月光  
 の曰く今逆意を以て刹利種を穢さば臣見るに忍びず一國の臣を引て愛を去らん誠に旃陀羅  
 の業なりと諫めければ阿闍世王ハ固より大力の者なりしが二人の忠臣に押へられて身動き  
 もならぬバハ己れの殺されんかと思ひて聊々顔の色を和らげて汝ら我を助くるやと云へ  
 ば耆婆は母を弑する事勿れと述べ忽ちに劍を抛捨て左らハ母の命ハ助くべしと誓を立れ  
 ば其刃ばを取擧て兩臣ハ頓て退きけれども阿闍世王の怒りの尙ほ止まず終に韋提希夫人を深  
 宮に閉込つゝ其日より父王の方へ通ふ事を堅く禁ぜられたり維沙那國の養ひ姫妙天夫人王  
 城の阿闍世様へ御婚禮のお供先エハホウ横によれ下に居れヤイ其處な馬子めハ何下にある  
 馬子ハ立て口を取れ先箱花馬は花を飾れば是花嫁の行列とハ知れけり問もなく先拂ひの知  
 らせによりて王城の方よりハ數多の出迎ひ乗物に附添ひて御殿の内へぞ身入ける情爰ハ不  
 思議の者ありて形ハ法師の様なれども顔形ちを深く包め誰と云ふとも知らず王城の門前







より不思議と姿を空に飛して中に入ぬ斯て又阿闍世の御殿のさいめき渡る儀式もはや鎮りて阿闍世の今日ころ千代万代よの睦言を深く歡び臥床の内に安坐してありける處へ以前の法師の姿を顯りして阿闍世くと呼聲に大いふ驚き夫と見るより枕刀を小脇に挿込バヤア我を誰と思ふぞ今日祝言の姫の仲立ちありと云へども不審なる法師の姿なり先に目蓮を縛めぬれば開奴め我を誑らかして闇の妨げする悪くさど一圖に思ひて死さぬ氣色に彼の法師頭巾を取て急まるまじ我なりと云ふに驚き刃を収めてコハ提婆殿不審の姿にこそ偕の世尊の徒弟と成れしうアラ口惜き次第哉其方の佛を殺て佛となり我の父を殺して王とならバ神佛臣王立并んで事を成バ最樂しからんと契約せしを早忘れたるう我の早父を廢して自ら王城の國王たりと云ふを聞て提婆の云ふやう左ればころ我今夕の姿を不審に思は道理なり我累年法性妙顯に隨ひて有所外道の法を學べど未だ六通の奧意を得ざりしが此程地水火風の輕き趣きを悟りて自在三昧を得て以て心に思ふ事叶はずといふ事なし之に依て今其方不思議を其方に見せ示ん爲斯のして來たるなり又我法師の姿となりし次第の此程服臣の者を斯る姿となして彼の世尊といふ悉達の瞿曇方へ赴けて徒弟となしつゝ謀略を以て殺さん

とせしに幸に彼らを徒弟と成しかども様々の戒を守せ其作方の尤も嚴しければ我其戒及び坐禪を守る事能はずして或の鞭に打れて逃歸るもあり又終に戒を遂て彼が誠の弟子となりて歸らぬ奴も有がゆる其の謀略も達せぬバ又一つの極意を廻らして此度の是非に滅亡の手段と云ふの先五百の象を酒と酔しめて瞿曇の方へ向て放ちなバ手を濡さずして滅亡するは的確なり其計畧然るに依て其方の使を立瞿曇を明日迎へ給へと語りければ阿闍世は歡びつゝ如何様此の好手段なり彼の好神通を施こして身を自在に働らき殊に舍利弗目蓮とて思々しき者なりしが其目蓮はは獄やに縛しめしゆえ諭へ舍利弗に智慧を競べての叶ふまじきが彼れも蜻の脛足なるが今斯く囚と致す上は我等の謀計を妨ぐることもかなふまじ夫を見物して甘酒を飲んど云へバ提婆は點頂つゝ何にもく其手段の万一空しき時の其方今日娶られし國夫人の色香に迷ひして殺す手段の奥の手あり又我日頃目を掛置たる耶輸陀羅尼丘を其隙に奪ひ取りて永年の凡惱も晴したし又未だ瞿曇が行ぬ國を馳廻りて味方に附る其爲の此の姿にて名を天熱と稱て事を成すなり万事明日の手段の我方より調へ越せば宜しく頼むぞよ然バと云ひ捨形ちを其處に隠しける偕又阿闍世の夜の明るを待て頻婆娑羅王及び



韋提希夫人の招きと云ひ傳へて世尊の方へ使を遣ひしけるも世尊の早夫等の事の悟り給へ  
 ど異議もなく赴く旨を答へけるゆゑ阿闍世の殊に歡びて提婆の服臣の者と示し合せて五百  
 の象を城門の片傍りに集め置て酒を飲せ其外警固の者を嚴しく付て待構へたる其處へ世尊  
 の天上寺より舍利弗只獨りを召伴させられて左ながら非人の托鉢の如くに立給へども諸  
 天諸佛の前後を守り給へば五百の羅漢を召伴られたる如くよして人をも能く見へ阿闍世の  
 妙天夫人を伴ひて高殿にて象の狼藉を見物せんと見て居たりしが今世尊の人少など思ひ  
 しに斯大勢の徒弟を伴ひられし事ころ不審なりと少しく心後れける時しも城門の内にて  
 鯨波の聲を揚るゆゑ舍利弗の驚きて世尊に進む事勿れと御衣を引留めければ何の仔細やは  
 ど尙進み給ふ向ふより尾に火を點られし五百の象狼藉にわれて只一口にと世尊を目かけて  
 飛掛らんと爲す時に世尊の少しも怖れ給はず右の御手を空へ差て一指つゝ弾きし給へば立  
 處に五匹の獅子の顯れて吠ければさしもに怒りし大象も草に風を加へし如くしほくとし  
 て足を縮め頭を垂れて踏まりし其上を世尊の優然と渡り給ふに舍利弗の心も漸く安堵て  
 御跡に隨ひ行ぬ阿闍世の此の有様を見て世尊の大徳にのほはや叶わぬ事なりと我慢も折け

る其色の面に顯れければ妙天夫人の側より諫むるやう些少後れ給ふべからず此の上の自ら  
 謀計を以て目前に害して見すべし高殿を立去て一間に戻りける其時世尊の案内に従ぐひて  
 輿の一間に坐侍ると告げれば左ら自らと共に出て對面遊ばせ自ら豫て認め置たる甘露を  
 彼に嚥應すべし此れ誠の毒味なり然れば世尊の若御身に杯を返とも必ず飲給ふなど忠や  
 うに示して頼て兩人共に綾錦の衣服にて世尊の前へぞ出けるに舍利弗の世尊に附添けるを  
 妙天夫人之れを見て云ひけるやう此坐よ世尊の二人の在ますまじ必ず獨りの徒弟ならん  
 ど知ぬ振にて云ひければ舍利弗の平伏して如何にも私しは徒弟の舍利弗に侍るなりといひ  
 ければ妙天夫人然れば汝ぞ何ぞ君臣の禮義を知らぬや徒弟の是臣なり夫を主と同坐すると  
 の先以て世尊を侮り國王夫婦を輕しむる事沙門の法に在るとにやさんい三衣の身の卑賤を論  
 ぜず同坐をも仕まつると云せも果す此の心得ぬ事なり沙門の法の免にもあれ王者の一國に  
 限らず總て君臣の道を正すを以て政事の一とす其處立去れと嬌嫵なる聲もあざやかと述べ  
 れば舍利弗の返す言葉もなく次の間へ退きける如何なるゆへにや頻りに胸騒ぎのみすれ  
 ば何様うなして世尊の側へ行たく思ふうちに數多の男女の此の坐に進み入れば爰ぞ答め處



どて年たけたる女中も向ひていふやう最前國夫人が拙僧を咎めて臣の身にて君と同坐する  
 を咎められしが御兩人の外は皆臣ならん若給仕あらば我も世尊に配膳せんと云ひ上くれよ  
 と述べれば此一言の理にわたりて問もなく男女の退りける諸阿闍世の低頭して我れ我慢  
 を以て近來折角の佛心を翻がへして仇もなき世尊に敵對せし事今更後悔臍を噛ぬ之を詫ん  
 爲に父王の名を以て御入を願ひし處早速の御降臨何より以て忝けおし之に依て鹿末なれど  
 も些少夫婦が饗なすところの天の甘露を快よく聞し召さば尙は大慶の至りなりと云ふとき  
 妙天夫人の土器を携へて進ければ世尊の微笑して饗し先享主より初むるを禮とすと宣へ  
 ば妙天夫人嬉なりなる聲にて開人にもより侍るにこそ神佛と崇め奉つるものへ主より  
 する謂れなし世尊先づ一つきこし召てより國王へ差給へ取分女子の罪深きと説せ給ふも聞  
 はべれば今日の嬉しき日に逢て世尊のお下を戴きつゝ後世安樂の身とならんといへ〜ひと  
 つ聞し召と終に御膝より近寄て右の手に土器左りの手に用意の懷劍を隠し持て只一突とする  
 處を世尊の其土器を取上給ひて珍味の饗應しイデひとつ傾けんと宣ふに心の相違して懷劍  
 を後ろに取匿して満々と盛て退けば世尊の二人の顔を見給ひていざ見事に飲むべしと飲盡

し給ひて阿闍世に差給へば妙天夫人の今一つ聞し召と坐に歡び進みけるを摩迦薩如意にて  
 胸の當りを突給へばと云ふ聲を限にて居縮まる予不思議なり其時阿闍世に宣ふやう如何  
 に阿闍世懺りに聞け汝が我を方便て毒味をもて殺さんとするとも我身の是れ諸神諸佛の擁  
 護われば毒味却て甘露と變じ又甘露も毒味と變ずるともあり爰を以て三界惟一の名を施す  
 なり夫れを何ぞや蟻螂の斧に折ける此女を誠の女と思へるう此の汝を泥近んが爲め法性  
 妙顯魔術を以て女の古き骨を繋ぎて魂魄を之に移して妙天夫人と名乗せつゝ己れが五脉の  
 外又隠す邪術なるを知らず若し之れと契らば其息の臭きにても知らるべきに凡夫こそ淺ま  
 しく汝が先に魔術の巧みなる有様を見たらん今又我法徳の功を以て此妙天に身入りたる  
 妙顯の魂魄を此鎮鉢に封じ込み其本性を現ひして見せん如何に舍利弗爰へ來まして最前汝  
 ちを詰りし妙天の本性を現ひして阿闍世の疑ひ晴せと仰せられければ舍利弗のハツと答へ  
 て世尊の如意を授りて邪魂去飯空邪魂去飯空と唱へて立つゝ如意にて居縮まりたる妙天  
 を打ば不思議や古き骸骨と變じて首手足も離れ〜に折けるを見て阿闍世の駭き且怖れて  
 世尊を此時に始めて眞心以て敬まひつゝ我惡人に誰らうされて害心を重ねたれども何卒其



罪を免るして妙法を授け給へ先に父が献せし寶を奪ひたるも我なるが今の道々手に入れ  
 速うに先之れを奉つらんと述べられバテ、左無ての叶ぬ事予今の汝が心服も明らかなり然  
 らバ先獄の父を免れ先之れを母諸共に敬ひて再び異心を起すまじ我先に目蓮を以て三方歸  
 依の父の心を慰めに越しぬ又我の今日爰へ入事も汝が使の爲に來るにあらず母韋提希夫  
 人の深宮に苦しめられて一心を凝して遙うに我を頼めバ社來りたり諸人の縁に依て悟ると  
 の其許が事よ今身の咎を懺悔して悔めバ善根の花が咲地に依りて倒るゝ者ハ又地に依りて  
 立どの惡人の發起を云ふなりアラ目出度く〜と宣ふ折しも此事の早くも彼方へ知れければ  
 耆婆月光忠臣の者出來りて世尊を尊び又阿闍世を敬へバ阿闍世の急ぎ頻婆娑羅王韋提希夫  
 人を免し給ふを命ぜらるゝがゆゑ此事を丹車に聞よりも肝を潰し此まゝ浮々爰に在バ憂目  
 を見るの究めてなりと駭く中にも不敵の巧みに奥の混雜に取紛れて先づ頃軍婆羅より己  
 が持來りし寶物や其外何異となく珍物を彌が上にも脊負て夫を打掛にて隠しつゝ獨りの下  
 女にも脊負せなすして徒步素足よて奥を忍び出夫より獄の方へ赴きて貪官に對面して其  
 逐一を述べ貪官も深く駭き左らバ我とて是れまでの罪ハ遁れず其方の言葉に隨ひて直

さま提婆の方へ行て命を助うらんとて其處より直と伴立て逃出しぬ誠に昨日の人の身を  
 責し身の今日の己れが責らるゝ身と予なりしも此己れが名に顯れたる如く官を貪る惡臣ゆ  
 ゑと知られたり去程に頻婆娑羅王を獄の内より月光の臣伴ひ奉りて世尊の御前へ出ければ  
 頻婆娑羅王殊ち疲弱給ひたる御聲にて世尊偏に後世を助け給へと頭面禮足して敬ひけれ  
 ば世尊の不思議と五色の光を放ち給ふ其光の頻婆娑羅王の頭を照しけるゆゑ忽ち阿那含果  
 を予開き給ふころ有難けれ諸月光大臣の君の御勞れを補ひ奉らんとて直に御帳の内に休  
 せまいらせて世尊に告るやう何異の御慈愛に依て國大平の基となりぬ時に御弟子の中ある  
 目蓮御坊を豫て獄に囚たりしが何處へ行しや今の行方なく只衣に繩のみ繋りて残り侍ると  
 告れば其不密の心安うれば彼の神通を以て雲に駕し水を渡る身なれば何う仔細予有んと示し  
 給ふところへ韋提希夫人の來り給ひて世尊を拜しつゝコハ有難き御入なり此程深宮に閉囚  
 られて苦惱に堪がたければ今のはや耆闍維に歸らせ給ひたらんと彼の方を一筋に念じて御  
 助けを乞ける處有難や世尊の光りを放ち給ひて白寶蓮華に坐し給ひ右に目蓮左りも阿  
 難の在まして普く天の妙花を降して自らを救へせ給ふと夢見けるに其祥瑞に違はずして現



に今日世尊を拜むありがたき自ら何の因縁を以て斯る惡子を手に持しぞ又世尊の何の因縁  
 以て提婆を親族にもち給ふや未來の君諸共に偏に苦惱なき處へ生れさせ給へ今既に女ども  
 の告めて今日重々の有難きこと聞知りたりひとへに助け給へとわれは世尊の頻婆娑羅王  
 又授け給ひし如き靈驗を施し給ひて光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨と唱へさせ給ふ  
 此文の意味の佛の光明の普く十方の念佛を唱ふる者を捨給ふ事なしとの事なり是淨土の觀  
 無量壽經の説めて其は豫じめ斯の如し偕又阿闍世は是れまでの父母は不幸の咎を厚く詫入  
 て勞りつゝ、耆婆月光の忠義を擧て重んじ頓て世尊へ百味の飲食を勸め奉りて法の徳を報  
 ひ奉つり又過し頃軍婆羅が奪ひし寶物を世尊へ獻せんとせしに其物なきゆへに詮議すれば  
 已に丹車の持去し事の現るれば彼れを深く惡み又外又奪き寶物を若干獻じければ世尊の斜  
 めならず歡こび給ひて最早や天上寺の御法も濟上の之れよりして直と耆闍崛山に赴うんと  
 命ぜらるれば阿闍世の路の警固を最嚴重に云付給ふ折うら目蓮は何處より現れ出で世  
 尊に拜謁てやすや私し牢獄の内に縛しめられながら此の御殿の内の事を神通以て見究め  
 しに虚空を踏て來りし法師あり此の神り佛りと尊く思ひしに開の提婆達多にて名を天熱若

人と稱阿闍世と世尊を謀る惡巧みを示しつゝ頓て耶輸陀羅比丘を奪へんとて失けるゆゑ我  
 も亦劣らず神通を以て繩を抜け出て跡を追かけしに彼れは既に比丘を奪ひ取んとす處を  
 支へ止めけれども終に奪ひ取られたるころ甲斐なければ今はや生甲斐もなしと述ければ  
 開の左もあらん汝の神通を以て知らるれども未だ三妙六通に達せず提婆の元より聰明にて  
 六万藏の法を學び又此程法性妙顯より神足の奧意を究められ其身の既に自在を得たるな  
 り彼れ我に斯の如く仇と成し耶輸陀羅比丘より始まるものうら今に執心の止まらず左り  
 ながら夫れらの些少苦にせまじ喩へ比丘を奪ひて野山の果へ行たればとて豈淫れ事又落入  
 らんや今の比丘に大鉢塞建梃力ありぬいぞ我に隨ふて耆闍崛山に赴けとて問もなく王城  
 を出給ひぬ

釋迦八相倭文庫四十四編終



釋迦八相倭文庫四十五編

提婆達多其身を法師の容に現して夕陽山の庵室に赴きて妙惠の耶輸陀羅尼を奪ふ所へ目蓮は神通以て馳來りて支へ留めしかど提婆は此程自在三昧の奥意を得けるかゆへ手も無く目蓮を投退けて旨々と比丘尼を奪ひ取て我館に戻りつゝ妙寶の床に座せしめて己れの大王の装束を着つゝ重々しく耶輸陀羅尼を敬ひて云ふやう我先つ年より其方を娶りて第一の國夫人と爲たければ是迄心を碎け共其志ざしを達せず尙ほ片時も忘るゝ間もなく戀慕しが夫の未だ身に廻らざる縁なりしが此程所有道の奥意を明めて貴女を茲へ通力にて連來る程の功しあり貴女の若し沙門を好み召べ我眞佛となりて沙門の司とならん又世の榮華を好めば一國の大夫人と仰ん宜敷我が詞を聞入よと敬ふ中に意を合む其面魂ひぞ苦々しける耶輸陀羅尼の稍須臾黙然として居給ひしが莞爾と笑ひこゝハ聞も穢りしき戯れ言哉汝ぢの外道の奥意を極めて自らを茲に勾引すと雖ども我奚ぞ汝ぢが妻室とやらんや身も禍ひの無き内に急ぎ我を菴室に送らしめよと頻伽の如き聲音にて宣へば「其方の口よりして然らば妻にもならんと云ぬの縊て女の常あれども斯く我家に入からよ何も恥る所なし疾く閨に入りて娛ま

んはや瞿曇の阿闍世の家にて醉象の口よ入ば今よりの我妻なり茲なわやかり者我も衣服を改むれば其むさくるしき衣杯を脱捨て綾錦の褥に座して金襴の帳に包れつゝ俱に命の長枕夜の物なす此へ持と云ふ間も非ず女中達の美々敷品々を持來りて疾く召替させよと勸めければ耶輸陀羅尼の直立と起て侍女が持くる物なぞを投除給ひ聲振立自らの穩便を事とすれども斯く手込同様我を侮る上からの忍び堪る所に非ずイザ我力を現さん見度ば寄て試し見よ大概五天竺の其中に世尊を除て其外に多力の者三人ありぬ一に阿難二に我三に一釋此の者らどもに大鉢塞建楯の力有て能く是に勝る者を聞ず我名を或の瞿夷又瞿婆釋ども呼ぶ事を知ざるやと怒り給へど何しやう姿の風の柳腰提婆は是を打聞て冷笑ひつゝ云けるやう「成程口の寶なり千人力万人力と口で云のの安ひ事なり其方の自ら其大言を吐ばまづ戯れに女共を敵手として力の程を試し見られよ夫女どもよ我許すに遠慮に及ばぬ力の有たけに立掛りて打倒せ勝たる者には褒美を取す負たる者の愛目を見するど日頃の短氣の眼に現るれば承給りぬと侍女共の三四人前後左右に組附て押と叩けど動はころ大磐石の如くなりぬ耶輸陀羅尼の莞爾と打笑ひつゝ身を捻れば残らず其はづみに投出されて眩きて予



倒れける提婆の是を見るよりも怒りの色を現しつゝ、這の面白く我節くれ松の腕を以て其手柳の手先を握りて折なば折るも意に介まず日頃の想ひを晴さてやりと床に上り腰を抱きて手を取ば耶輸陀羅尼の少しも臆せず其手を腕と握り給へば流石の提婆も堪へ兼て鬼の眼より湯玉の如き泪を溢して苦し氣にア、許し給へ賊事なりと負惜みを云ふよりも耶輸陀羅尼の益々怒りヤア我最前より諫れども聞入らず今とありて苦しきと戲事よ落さんとする汝ちが心底真に無懶愚蠢の限りなり我れ仮初にする力すら女共を那の如くに投除たりし形状を見たりしならずや況んや我を犯さんとする其科に於てをや殊に我夫なる者の天上天下に唯一人なり夫をも知つゝ不義徒らこゝろ惡むべし汝ち六通を得たるとならば我此の腕を放して見よと云様に又一締へ給へば松に纏らる葛桂節くれ立し提婆が腕の骨碎て五指よりも鮮血の走り出今いしも堪難く命の限りと思ふにより誠心に選たりて無難を種々詫入れければ耶輸陀羅尼の些しく面を和げ給ひ然らば我を庵室よ此の儘送り返さるゝや其誓言を見たる上にて放し得せん如何にぞと云ふに提婆の争か御意を背く可き意を送り奉つると云ふ此方の點頭で頓て其手を放し給へば急ぎ家臣よすし附て策を以て夕陽山へ送らせける提婆の其

後の腕の骨碎けて痛み堪難ければ服臣の俱伽梨を召て事の様を語りければ以ての外に打駭きて渠こゝろ正に外面女菩薩内心女夜叉と云ふ者なれば未だ君の御運の強くして御臺所に爲らぬこそ僥倖なれと慰めつゝ種々と勞りて藥りを詮議なす折柄彼の丹車の貪官を連て茲に來り案内を以て委細を述べ先に軍婆羅より云告ことの有らば頓て居間へ召出して事の仔細を聞けるに丹車の側へ進み寄て阿闍世の方の事の仕末を箇様々云々なりと詳らかに物語れば提婆の面の色を變て駭きつゝ然れば阿闍世の佛の味方と成たりしか左うどの知て罫曇を殺せし吉左右今や來るかと思ひしに千日の謀計も一日の水の泡と成たりしが何の兎もあれ法性妙顯の本身を改ため見たし今妙顯に他界へ移られての翼なき鳥ども成んいで〜妙顯の隠れし本身を改め見よと命ずるに此在所を知者の伽留羅のみなれば伽留羅の急ぎ妙顯が本身を隠したる其崖に赴きて見たる所如何にも入定の如くに安座したる儘にて魂ひの茲に戻らざれば呼と叩けど朽木の如くなりければ扱ひ丹車の告しに違はず正しく世尊の鉄鉢に封じ籠られしに疑ひなしと駭き恐れて身を翻へしつゝ返らんと爲たりしがイヤ待て須臾後の日に蘇生るともあらば我が越度共ありぬ可し鞏のこに此五臓を連て返るに



如となしと伽留羅の人夫に背負せて立歸りて提婆が前へ差出せば提婆の殆んど力を落して  
 妙顯に打向ひ眞又過たるの尙ほ及ばざるの譬へなり今更思ひ當りたり後の悔みは更に益な  
 し我阿闍世をば手又懐けんとして其方と語らひ天女に迄成れる術を以て如何して斯る事と  
 の成れしや杖柱とも頼みし其方に今亡られて腕をもがる心地ぞする折角手に懐し阿  
 闍世の今は早向ふの味方とはなりぬ大概十六大國の者共の我名を知ぬ者も無く是迄に根強  
 く巧し事なれば今更止る謂れやある何卒今一度蘇生りて我が力に成てくれられよ我本剛妙  
 顯腹と泪を流して靈呼聲も鋭く見へて憐れなり伽留羅の側より力を添我が君左のみに歎き  
 給ひぞ御身内に俱伽梨の臣及び乾陀羅又足らぬ乍らも某し等あり今妙顯を亡ふと雖も  
 貪會官を得給へば味方に於て損のなし許多の寶物の實入たるが君の傍伴なり唯心配致すの  
 御手の惱みにこそ如何のせんと言ふ折柄片邊に在し貪會官の進み出て云けるやう其御手の  
 惱めるの聊かお氣に懸られぬ我多くの罪人を扱ふ役にて度々試して知とありぬ夫の我國の  
 耆婆大臣が四百四病の藥を鍊て童子の形を造りつゝ遠近の辻々に立置て遠國の者の助とあ  
 す是を則ち藥王童子と号けぬ病の勿論怪我過ちをする者此童子に向ひて南無妙頂禮無量壽

と祈念をすれば藥を服ずして即座に癒る事神の如し其御影の是なりと差出せば提婆の歡び  
 て這の宜物を得させたり我手の惱みの癒るよ於ての今伽留羅が云ふ如く何條力を落すべき  
 憎み重なる瞿曇めを頓て殺して腹を癒ん先差當り頼み奉つるの藥王童子歸命頂禮無量壽と  
 御影を二度押戴けりあらず不思議や奇なる哉忽ち惱みも薄らぎければ其時提婆の貪會官に  
 打向ひ實又不思議の奇特なり此報ひにの何を以て報ずるよやと問ひければ然の醫術の神事  
 なれば奉加賽錢を以てせず病平癒なしたる者の唯旗を納るのみと聞侍るにぞ然らば平癒に  
 及びたる此手にて唯今旗に童子の御名を認めて納むべしと直様に旗を認めて最寄の宮へ納  
 めける斯る折節世尊の徒弟なる阿難と云ふ者参りたりと告れば提婆の駭きて渠何故に來り  
 しう不審さよと思へども何の兎もあれ對面せんとあれは案内に隨ひて阿難の茲へ進み出備  
 禮儀も畢つて云けるやう是の久しや提婆殿もく其方と某の血脈も近き親戚なりしが  
 不圖したる事よりして疎遠になりて今確執と成しころ是非なけれ初今日此方へ來る事の  
 一山の羅漢達も知ず唯我一个の了簡にて密に來るの外ならず此程世尊儀者闍崖山に返らせ  
 られしに目蓮の云けるに耶輸陀羅尼を貴君が奪ひ取たる由を落もなく語りければ世尊の



是を聞給ひて其尼の我深き因ありて既に戒を授け世棄人となしたれば早女にて女には非ず  
 夫を無体に妻として娛まんど爲の近頃英雄の振舞に非ずと云給ふに予何卒其尼を我に返し  
 給へ又阿闍世も發起せしどわれ其方も我慢を翻へして懺悔ある時昔の因の深き親族な  
 れば世尊豈疎容に思ふ可きや夫ら是らを密に告んため托鉢と偽りて態々來る所なり惡に強  
 き善にも強しとやす譬へもあるものゆゑ只今和睦あるに於ての嘸や嘸世尊の勿論御親族  
 を初めとして歡ぶ者多からん此儀如何と述ければ提婆の詞を和けて予、能も予したり如何  
 にも汝ちの云ふ通り世尊を初め其方も可難にも皆血脈の者なれば隨分和睦に及ぶ可し夫よ  
 附ても其方の持る鉢こそ世尊の所持の物なるや如何にも是の世尊の鉢にて托鉢の節誰  
 になりとも渡し給ひ是に布施を受べ則ち佛の自ら受給ふに異ならず眞に發起われ悦び是  
 に増とあらん是より直様山に返りて此事を聞へ上ん先耶輸陀羅尼を返し給へと云ば提婆の  
 頭點て其儀の最と心安かる可し我先其鉢へ布施を入ん此方へ出し給へとわれ已れに曲れ  
 る心のなれば異議もなく鉢を渡しければ提婆の鉢を携へつゝ奥へ入じが更に出來らず阿  
 難の之れを問へども取次者もなく早日の暮に及べども食事も出さぬ已に餓に及びければ

是非もなく提婆が居間に赴きて鉢と耶輸陀羅尼の事を催促すれば耶輸陀羅尼の替りに鉢の  
 戻さぬ由を云ば深く駭き然らば耶輸陀羅尼を出せよと云ば渠のはや夕陽山へ送りたれば赴き  
 て見るべしとわれども以前の事を知らざれば是も亦偽りならんと思ひて種々に云ども唯戻し  
 たりと云ふ已なれば余儀も無く茲を立出て夕陽山へと赴きけり○提婆の阿難を欺き返せし  
 後にて諸人を集めて云やラコト是を見よ阿難の我を濟度する杯と云共斯く我に騙られて此  
 の鉢を奪れる愚か者哉是を思へば羅漢なんぞと名を大らうにすせども我智に及ぶ者無き事  
 は是等にてても知るべし此鉢の中には妙顯が魂魄を封せしとわれバ招かずして僥倖を得し今  
 日の悦びいで妙顯の本身又向ふて魂を元に納むべしと直ちに本身を抱へ援させて反魂香を  
 薫らしつゝ一件の鉢を差向て法性妙顯くと呼ながら鉢を叩けば這の不思議や妙顯の本身の  
 忽ち窓と見へしが忽ち眼を開きて咳きまつゝアラ世尊なにを以て我を深く戒めしぞ  
 天の甘露を今一つ聞し召せと云ければ提婆のコレ妙顯如何に氣を慥に持給へ我の是世尊に  
 わらず提婆なりヤア是りや何とせん扱の天女に身を變し夢てありしかど只忙然として居  
 たりければ提婆の尙も差寄て有し事どもを云々と落も無く物語れば妙顯の殆ど呆れ果扱も



危き事なりき然らば阿闍世も今より敵なり况や世界一統敵となるも妙顯の再度生るゝ程の運われば心安かれ提婆殿ヲ、其事なり先我手際を見られよかし此鉢の即ち是れ瞿曇が鉢なりといふよぞ開の如何して手に入りしと問へば提婆の打微笑て然らば阿難を云々にして奪ひ取たる上からの謀計の口が明て面白しまた耆闍窟に丹車の育し善星と云ふものわれ萬事の手筈の心安し夫の扱措耶輸陀羅比丘ころ惡むべし我に愛目を見せたりし其無念を何卒して晴し度と云ふ妙顯の打點頭て開の最易き事予かし我の今より彼處へ赴きて其返報を返すべし御身の急ぎ諸國を廻りて國王太子を味方に附よ未だ瞿曇が廻らぬ國の箇様く屈指數へて委細提婆に差示せば提婆は云ふにや及ぶ我迎も豫て心に思ひし事なれば急ぎ諸國を経歴て國王太子を味方に附んち、潔よし〜我の是より容を變て夕陽山へ赴かんと云ふかと思へば妙顯が容の忽ちに掻消す如く臆腫として失にけり斯る所へ侍女が提婆が前に手を供へて豫ての御召に隨ひて外醫の金匠とす者罷り出ゆと告れば提婆の歡びて夫れ待兼し疾く此へと云にぞ侍女の案内して問も無く金匠の出来れば提婆の近く進ませせて汝を呼事は余の儀も非ず我に三十一相あると思ふがゆへ欠たる一相の白毫の玉以て度々補な

へども更に身に附事あらず然るに未生怨王の告るに全く二相欠るとわれは汝が今能改めて其欠たる相を補ひ呉よ謝禮の望みに任せんと云ふ金匠の心得て提婆が身内を其處此處と落も無く改めて遙か下りて平伏なし實に御前の大富貴の相あり然るが仰せの如くに欠たる所二相あり是の金色の相及び足の裏の千輻輪の二相なり是さへ補ひ給ひなば三十二相具足して世に類なき人と云ふべしと云ふ提婆の點頭て偕の寔に欠たる二相なるや如何にも如右なり「然らば欠たる其二相を速に補ひ可きや」仰せの如く少し痛を堪へ給ひ補ふ事の心安くいふにぞ然らば痛を堪へし直ちに二相を補ひ呉よとありければ然らば金色の相あり補ひん迎金の鍋へ油を流らせて身に引て金箔を貼となれば身の皮脹爛れて其痛の忍ぶに余れども我今大義を企てながら斯る痛を堪へずやいと熱き泪を溢しつゝ漸々にして補ひ終りぬ偕尙ほ千輻輪を補ひんには鐵を以て造りたる輻輪型の物を炭火の中へ押入れ火焰の立程又焼て足の裏へ押當ければ提婆も思はず飛上り須臾正氣を失ひけり金匠の急ぎ氣附を用ひて提婆を援け敬ひつゝ能ぞ痛を堪へ給ひしぞ其甲斐ありて今より君に並ぶ者の世尊の外に又ど一人あらざるべし杯と詞を巧に諂ひければ提婆の殊も堪難き痛を堪へて悦べば金匠



の再度云けるやう其痛の癒る薬を供へんとて最敬々しく包たる物を進らすれば提婆の益々  
 悦びつゝ然る褒美を興へんと許多の金を包み遣はして歡び勇子思ひあり「夫の扱措阿難の急  
 ぎ夕陽山の庵室に赴きし所耶輸陀羅尼の殊の外の惱なりと告げれば扱の先提婆が方より戻  
 らせられしころ何密歡べしくと云へども重き惱とわれ急ぎ世尊に告んとあるを侍女の  
 押留尼君様が貴君様に是非に拜顔へ成れ度旨の仰せあれは兎も角も御對面あれかしとす  
 に予直様臥戸に到りつ其面ざしを見てけるに如何にも疲れ果給ひて眼も當られぬ形狀に這  
 りろも如何にと駭けバ耶輸陀羅尼のや詞も出ずして手を以て招ぐ様なれば阿難の夫れど  
 心得て枕邊へ差寄バ最苦し氣なる聲音にて眞に宜所へ來給ひぬ自らの不事の災難に出會て  
 提婆が方に捕われしが漸々にして送られ來しが其道にて不思議や我身の寒氣立病重りて斯  
 の如し我爲に御身ころ種々と御心配下されしと山々なれば何卒して今生に一度見へんと  
 思へども其事を告る詞さへ舌の根も回らず唯心も想ふ已なりしが我一心の届てや此所へ來  
 給ふ事こそ是最期の僥倖なり其方の多聞第一の御方なれば何卒して我今世を去る恤に善事  
 を諭し給へ世尊への我此淺間敷狀を見せ進らせ度も無き故に今日う明日うを限りと思へバ

何卒須臾枕邊に居て給われと頼み給へバ阿難も是を見棄難くして打黙頭夫より茲又留りて  
 藥をすゝめつゝ看病なして何異となく世話せしが阿難一人居るも何となく人の聞へも悪け  
 れバ逆優陀夷へ此事を知しめければ優陀夷の此程天上寺に居たりければ驚きつゝも早速來  
 りて俱に介抱なしけるに予其日の晝より雨の途絶なく降頻りしが夜に入て最烈しく殊々露  
 露の疎く音の凄しく唯ならぬ夜の形勢なりと阿難も優陀夷も心に油断なく耶輸陀羅尼を護  
 り居けるに眞夜中共覺敷頃耶輸陀羅尼の而ざし俄然に變じて蠢く様なれば阿難の側へ立寄  
 てコヤ心を儘に持給へ臨終の人の一大事なりと諫ければ耶輸陀羅尼の物狂のしき聲音よて  
 わら恐しや兎共と覺敷物ヲ我を捕へて行んとすと身を震かせてありければ阿難の聲を高く  
 してろの心の迷ひなり仮令如何なる惡魔鬼神が眼に遮るとも阿彌陀佛の御名を唱ふれば少  
 しも氣遣する事なし假令五逆十惡の人と雖も念佛十遍唱ふれば彌陀の木願空しからず極樂  
 へ引成さし下さる況んや戒を持つ善比丘に在せば唯念佛を唱へ給ひて臨終を遂給へと教れ  
 ば黙頭給ひて念佛を稍霎時唱へさせ給ふにぞ追々面ざしの色の妹はしくなるがゆへ阿難尙  
 ほまた側へ差寄て御心如何にと問ければあら嬉しやありかたや今は兎共の皆失果て正に是



此天人達の天降りて妙なる音楽を奏しつゝ七寶の車を輓て是に乗とあるなり今此世を去  
 て此車に乗んと云バコハ以ての外の僻事なり夢々其車に乗給ふ事勿れ唯念佛を唱へて阿彌  
 陀佛の迎を待給へと諫ければ又も念佛を唱へさせ給ふ内に尙ほ歡び給ふ色のわれバ今如  
 何なるにやと問ければ然バ辱けなや今の車の失去て墨染の衣を着たる尊き聖の來り給ひ  
 て是よりの往き先の路も知ぬ其方なれば我宜敷導かんとあれバ此聖に伴われんと宣ハバ  
 ヤク夫もよしなし極樂へ往よ唯念佛こそ道連なれば聖と心得ころ參るまじと宣ひて只  
 管念佛の數を重ね給へと教ければ又も其如くに念佛を唱へ給ひしに稍暫時ありて耶輸陀羅  
 尼ハ勃然と起直り給ひて今予此世を去る時なりわら尊とや阿彌陀佛アハれ白毫の光りを  
 照じて二十五菩薩の來迎なし給ふ予有難や辱けなや然バ今ころの臨終と云ふ折しも一室の  
 内に紫雲縷ひき靈香薫ると耶輸陀羅尼にハ見ゆれども阿難優陀夷の眼ハ黑雲惡風と見ゆ  
 るに予訝しく思ふ内ハ優陀夷が帶せし獅子王の劍ハ自と吼て鞘を抜出る様に優陀夷ハ心得  
 たりとて既に耶輸陀羅尼の手を捕て疾去んとする者の見へければ走り掛りて劍を抜つ胸  
 の邊りを貫けバ忽ち地震動雷電せしが間も無く菴室の内も穩かに治まりて耶輸陀羅尼も

順に正氣と成給ひて夢の覺たる如く奇り其時優陀夷ハ刺留たる物を能々改め見けるどころ  
 是ハ正しく法性妙顯なれば深く駭き且悦びて云けるやう其昔世尊未だ悉達太子と云給ひし  
 時鬱頭覽の院に在せし折柄此者の番僧と化して障碍を爲んとせし時よも此劍の威徳を以て  
 切拂ひしが今ハ天運の盡たるまや茲て退治なしたる事寔ハ目出度く斯る奇徳のある劍  
 されバ墨染の身と成ても法の守りと是のみハ放たず帶せしも僻事に非ずるも此劍ハ遙かの  
 昔に獅子吼菩薩が毘沙門天より授り給ひたる能作性の玉を以て作れる物なれば末代に尙ほ  
 其靈驗の著しく怨敵退散なしたるなり全く比丘尼にハ病に非ず此鬼瘞の業されバ今より速  
 かに本腹する事疑ひなし是等の事を阿難ハ急ぎ世尊へ申し上て御安心を爲しめよとて歡ぶ  
 事限りなし阿難ハ夫より夜の明るを待て夕陽山を立出て靈鷲山へ返らんと其道筋を來りけ  
 るに殊の外咽の乾きけるに折能も途ある家の前なる井戸に廿歳計りの容貌よき娘が水桶を  
 持て居たりしかバ近く寄て其水を請けるに是惡縁の結ぶ所よや其娘ハ阿難の面ざしの麗し  
 きを見るよりも心に深く想ひける色の面に現れて水を進めつゝ唯阿難ハ恍惚て水桶を落し  
 て己が裳を濡しける故に阿難ハ急ぎ絞り杯しけるを便りとして云けるやう是ハ有難し御身



何國の御方にて御名の何と宣ふと問ければ阿難の我の世尊の御内にて阿難とす者なるが御家の何とすさるゝと問へば娘の而赤らめて自らの摩訶伽の娘摩訶蜜と云ふ者なり左様にていか寔に渴を凌ぎし事の辱けなしと禮を述べ、心急げば阿難は笠を忘れて頓て者聞囁に立戻りて世尊に拜謁へ奉つり提婆が方へ赴きて云々の事より大切なる御鉢を失ひし科の輕からず是に依り宜敷罪又決せられよ又夕陽山にて法性妙顯を優陀夷が刺留たる事杯箇様く云々なりと落もなく物語れば世尊の左のみ驚き給はずして微笑し給ひ汝の多聞第一にして能人を教へ導く所の他に越たれども神通を得ざれば夫等の欺り事を悟らず人に夫々の得手ありぬ縦へば斧の能く大木を碎けども小枝を削るに利なし鉋の小枝を削るに利あれども大木を碎くに利なし茲を以て能く知べし我父の崩御に依りて我れ天上寺に赴きし其留守には一山に必ず法賊の者屯して來る事なぞの先に我れ能く知ぬに有ぬば夫を防ぐに三迦葉又限れるゆへ警護の事を命ぜり又說法に富貴那に及ぶ者なきゆへに夫々其人を以て護らすれば過まつ事更になし諸又彼の妙顯が魂魄も何日の封じを解て鉢の穢を雪がんと思ひしよ自然と本身又立返りて滅する事は僥倖あり又鉢迎も我が持べし奇特ありて提婆

が持べし禍ひありぬ少しも恐るゝ事の無が唯恐るゝの汝ちが面体の其麗しきを以て罪を作る事多し是も又如何ともする事なしと語り給ふ所へ優樓頻螺は賓頭盧と伽留大を連れて出來り昨日仰せを受けて此二人の髪を剃て三飯依を與へしが尚ほ法を授給へと申じ上れば世尊は直ちに法を授給へるに予優樓頻螺の重て又云やう彼の軍婆羅が首の如何致すべし予三寶の功しを後代へ傳へん爲よ一山の内に葬るべきやと伺へばイヤ然る事の悪かる可し其軍婆羅と云ふ者の寔の人にあらず提婆阿闍世を惑ひして軍婆羅龍が人となりし者ゆへに其首の流沙川へ捨よかし如何に羅漢達よく聞かした佛門の尊き理りあればこそ阿闍世の三寶歸依の身となり又妙顯も彼の龍も皆已に滅すれば提婆のはや翼なき鳥の如し今懺悔せざる上に無慘の死を遂るなり是のみ不便に思へると御袖を濡されける情も又摩訶伽の娘摩訶蜜の不圖阿難の麗しき姿を見初てより心に忍び餘れども流石に云出づる術も無く苦世くとして一人心を焦しけるを母の夫とも心附ず娘に向ふて云けるのほんに親と云ふ者の何歳に成ても小兒の様に思ふの世間の人心なり其方も最早年頃なれば身の縁附をせねばならず夫に附ても此間好き豪家より其方を嫁に娶んと云入る者數多ありぬ依りて近き内に何れの方へか



嫁入さするといふ母の詞に駭く摩鄧蜜の娘心の一筋に取敷をも打忘れて母に向ひて云ける  
 やう今の何を包へき此程井戸にて水を請ける者のありしが名を問へば世尊の親族の阿難  
 と云る人なるよし取しき事ながら妾の那御方を除ての如何なる富貴の家なりとも嫁入する  
 心のなし何卒お慈悲に阿難様を妾が夫に持して下されと云に母は駭きて是の開も如何なる  
 事をいふ予其阿難と云る人の世間に美男の聞へりあれども開の世尊の御弟子にて妻を持  
 べき身ならぬが適のぬ事と諦めよと諭けれども聞入らず娘の其儘に泣入て食物さへも食さる  
 故母の殆ど困じ果持余したる折柄に阿難の先の日打忘れたる笠を取に來りし事を下女が斯  
 くと告れば摩鄧伽も流石我子の愛に絆されて兎も角も見へ度と云告れば阿難の一室に來  
 りて娘と母に對面しければ何呉となく響應つゝ頓て摩鄧伽の云けるやう近頃少し悪き事な  
 がら我娘不圖御身に水を與へしより深く其方に戀焦れて夫となして呉よと云ふに予中々に  
 彼の人の世尊の御弟子にてあるなれば妻を持べき身に非ずと諭じけれども更らに聞入らず今  
 の食物さへも碌々喰ずして終日泣てのみ居るなれば何卒曲て妻となして下さらば御身の望  
 に任す可しと云ければ阿難の當惑の色を現し開の思ひ依らざる事あり仰せの如くに我戒を

守れば如何よせん妻を持べき身に非ず何卒外へ嫁さしめ給へどありければ母も是非なく其  
 事を摩鄧蜜に語りければ娘の何卒門を閉て阿難様を出し給ふな左すれば竟にの夫と成もせ  
 め再度我家に來たられしに深き縁のあるならんと悦ぶ面に母も溺れて如何よも夫よと子ゆ  
 への暗に道を忘るゝころ理りなけれ

釋迦八相倭文庫四十五編終



釋迦八相倭文庫四十六編

親の心の暗ならねども子に迷ふ道あるの方の人の親心哉切摩鄧伽の娘摩鄧蜜の阿難に只管戀焦るゝを見るよ忍びず阿難を家に留て門を出さず豫て蟲道を信ずれば過し端午の日に百虫を壺に籠て闘しめ九十九疋を喰殺して生残りたるを蟲道の咒ひに遣ふ事あれば此壺を密に取出して口を開けば中より一疋の虫踊り出るを見て摩鄧伽の云けるの今我娘摩鄧蜜が沙門を夫に爲んど云ふ適ひ難き事を望なり汝は是を能く調へなば屹度能く祀るべし左なくバ禽獸の腹に祀るべし目前に其効を見せよと言合ければ纒の虫ながらも九十九疋を喰殺して今に生残る程の物あれば奇異の奇特ありて其事の達すべき形状あれば生し出杯を喰ひしめて再び件の壺に納めつゝ直ちに夫を黒焼になして頓て取出して半ほど紅絹の赤き袋に籠めて摩鄧蜜の右の臂に掛させ又殘る半の是を婚儀の酒に浸して彼の阿難に飲すれば願ひの適ひぬ事なしとて悦び勇む其折しも下婢ども摩鄧伽を呼て御婚禮の品々も残らず調ひ侍ると告れば摩鄧伽の打點頭て然バ急ぎ其事を調へんと夫々に指揮して表座敷へ取並べつゝ頓て摩鄧蜜に打向ひ豫て其方が願ひの如く阿難と今宵の祝言さすると云へば摩鄧蜜の大に悦び

て俄に浴し梳づり心の丈は装ひ飾れば摩鄧伽の阿難を引連れて臥戸へ來り借改めて云ひけるやう我娘摩鄧蜜事日外御身を見初てより戀焦るゝ事大方ならず何卒妻となし給へと告れば阿難の膽を消し駭きなぐらも明白に斷り云んと思ひしが心の内に能々考へ見るに斯の如く想ひ疑たる親子の心底なれば若し潔白な斷らんに如何なる事もあらんと思ひつゝ言けるやう志しり過分なれども今宵の心ち惱しく腹痛なせば暫時事を延し呉られよ心ちの癒なば兎も角も致しやさん如何なる珍味の饗應も今宵の口に合ずかし進程よく言ける故病氣と言ふに非も然らば身を大事にせられよ斯なる上からの人の事と思ひれず必ず病らひ給ふさとして何となく饗應を替て勸めける扱其夜阿難の一人一室の内に臥てありしが如何にして此家を逃出べきと睡も合さず思案に餘れば密に兩戸を繰開て庭の様子を偵りんとせしに圖らずも摩鄧伽の忍び居て夫と見るよりも御身の何處へ出給ふと咎められてと胸を突しガ心を落附て我熱氣の強くして咽を潤さんために水を索ると云は摩鄧伽の冷笑ひて汝ぢさな偽りを云まじ湯も水も已に先程調へ置しも何卒娘に遇せんと思ふが故なり夫をも辨まへなくして茲を逃出さんと爲ども我咒ひを以て縛し置ば家より外へ出る事成べうらず



汝ち心底の訝しき最前の詞の色にて知れたれども娘に知すまじとて先病とわれ其儘に措しが極めて今宵の逃出べきと思ひしゆへ我下人ども云附てアソの如くに縛を焚せて恰も白晝の如くなるを知らずや何様でも我娘を嫌ひ嫌へ今其返報の目前に知せんと矢に無に阿難の衣を剝取て抱へ持つ阿難の手を引て庭へ下んとするに予阿難の呆れて遣い如何にするやと云ふ云ふにや及ぶ我頼に應ぜぬ上うら那の篝火の中へ投込て焼殺さんと言ければ阿難の駭きて身を震らし遣い御短氣なり實に心ちの悪ければ今宵の祝言を延たるなり我固より勝手も知ぬ庭邊に行吟仮令逃んとするにもせよ人の家より圍ひわりて逃出る事なるべきや如何にも枕邊に何呉もなく響應の有るが故に何れが水にや辨まへぬ水を求ふ出たる已なりさのみ無慈悲な事を宣はずと我惱の本復を待給へと寤しやかに述べれば摩訶伽も其理に服して怒りを宥め然る翌日にも本復次第婦になる心ならば身を燒事の免すべし然る夫まで此衣を質に取置其儘臥戸に赴けて放ちしかば阿難の毒蛇の口を遁れし思ひにて急ぎ臥戸に立戻りて先一旦の悦ぶと雖も明日の如何にせん我過し年斯る事にて沙門とありて身を助うりしに今又煩惱の絆に纏れて何う成佛の道を得んと俯

きつゝ涙を流して世尊の御名を心に唱へ居ける時しも庭面の方よりして人の忍び入る物音するに予又もや我を責るうと身の毛戰慄て居たる間もなく戸を忍びやりに開て入り來りて椽傳ひに奥の一間へ往ければ這の盗人なるうよし竊盜ならば其者の出ゆく後に引續きて此家を逃出んものといきつく胸を押撫つゝ拔足差足渠が後を附行き見れば奥の一室に摩訶伽の寐たる内忍び入りければ偕に此母の密夫を持て通へせる者よと心に呆れつゝ寤に親といひ子といひ不義放埒の此家には片時居るさへ身の穢れなりア、無端者に水を請て身の大事とい成し事よと歎息して又も我一室へ戻り來りて途つ追つ思案の半に彼の者はや立返る音のすれば渠が後に附て出なば忍びの道もあらんと恐怖後に引續きて出ければ案の如く忍びの者にて裏手の方の圍ひを壊ちて其處より出るを見てければ寤に悪人の足跡を踏て斯る所より出るの本意ならねども是も時節なれば致し方なしと首尾能圍ひを抜出てまづ一安心をしてける時に以前忍びし者立返り來てコヤ阿難く汝ちに施す物こそわれと聞て阿難の打駭きて云や汝ち何者なれば我に布施するにやと云ふ我のこれ重勝王菩薩なりといふに予わら虚言哉其菩薩の殊に尊く聞へ給ひけるに奚ぞ摩訶伽と不義を犯して菩薩の禁戒



を破るべき我正に見届たり我の苟くも世尊の徒弟にて其禁戒を固く守るが故に針の筵に座するが如き苦を受ぬ真に此家の淫室なり見るも穢れと思ふもの、布施を何迎受べきと罵りければ其疑ひに至極せり是を見て疑念を晴せと投出し給ふに即ち是れ阿難の袈裟衣なれば殊に駭きつゝこれの是摩訶伽に奪られたる我衣ありといふに不然なり我を取て汝に與へ又摩訶伽の咒縛を解て逃さんため又斯の計ふたり詳細事の世尊又問へかし开も菩薩が禁戒を破りて女人を犯せしもの豈神變のなるべきやコレ我を見よかしと言様身を踊らすれば四丈九尺程地を去て空中に立給へば阿難の地に平伏て疑念の罪を詫つゝ衣を押戴きて急ぎ着閣岫山へ夜明方に不返り着て世尊へ具に聞へければ世尊又彼の重勝菩薩の事なすも疾く知し召て然べころ汝が面の麗しきよの罪を造る第一なりと先にも示さずや以後を必らず慎むべし扱我頼て王舍城の市々を托鉢せんと思へば汝が囊に市々の人氣を質して我が赴く事を先觸せよと命ぜらるれば阿難の悦びて頼て着閣岫を出けるが途中にて摩訶伽に見附られ既に捕へらる可きを足を空にして又も着閣岫へ立戻る後を摩訶伽の追來りしに門守に制せられて門前に不みて只泣居る様なれば今迎も出る事も適はず又是等の事を我隠し

たりとも余人より世尊へ聞へなば悪くりなん輩う此仕未を世尊に聞へ上んと直ちに世尊の御前へ出て云々と訴へければ世尊の其娘を此へ呼と優樓頻螺に命ぜられければ優樓頻螺の急ぎ山を下りて門前に泣居る摩訶伽を宥めて頼て世尊の御前へ連出ければ世尊優美かに問せ給ふやう汝の何の爲にさまで阿難を思ふや然ればなり阿難に妻なく自らに夫なければ何卒阿難を以て我夫よせんと思ふ其心盡しの如何計りぞ阿難の此山に入りしを見るものから尙ほ追上らんとせしを門番の衆に留られて本意なく外面に泣のみなり何卒世尊の御慈悲を以て妾を阿難に娶せ給へうしと言ければ如何も其事の聞へしなり然ながら阿難はや沙門にて髪をかき汝の髪に髪ありぬ若し汝もむしる髪を剃れば我汝が爲に媒妁して阿難を夫と致して遣るべきぞやと宣へば摩訶伽の嬉し氣に开い最易き事なり然れば此所にて我黒髪を剃給へうしと云ふに予世尊の宣のくイヤ汝の母ありぬ母に我詞を告て剃せよと宣へば殊に悦びて山を下りて我家に返りて摩訶伽に斯と告れば母の驚きく且呆れ我其方を産おとしてより此方の髪は長くなる事をのみ念じて撫手摩て育し者を殊に女の髪は愛度者なれ今夫を剃こぼちて沙門の妻と成よりも其方の容貌を愛て妻に求る長者居士の十の指に



折余る程なり思ひ變じて外の美男は連添かし我の曾て沙門を忌はしく思ふなり其方の左程  
 と思ふと雖ども阿難の其方を忌嫌ひて既に我臥戸に忍び入りて袈裟衣を取て圍ひを壞ちて  
 逃出し者ならずや何卒母の詞を是計りの用ひて給れと諫れども唯泣入て聞入もなく若し此  
 の事適はずば私の最早死ぬる覺悟と言ければ摩訶伽の泪を溢しコノ娘よく聞て給此母も  
 一方あらず心を盡せばころ咒ひを以て我家を出ざる様にしたる所渠不思議の者なればこそ  
 我家を逃出ぬ茲を以て母の心の内に怖恐るれば思ひ切と云も其方の爲を思ふてなり夫を奚  
 ぞや我に面當がましく死ぬる杯どの何事ぞと阿りの宥めつ異見すれども更に得心なければ  
 母も今の余儀なくして其翠の黒髪を泣々剃て與へけり「去程は摩訶蜜の翠の黒髪を剃捨て  
 世尊の御前へ立出て何卒先に契りし如く阿難に娶せ給へと述べたれば世尊微笑なし給ひてマ、  
 能ころ髪を剃せしや夫てころ沙門の妻ども云べし然ながら夫婦の中に他人に知せざる事  
 のわり是の文を以てする者なれば手を書されば適いぬが夫の如何にと仰せらるれば左れば  
 なり聊うの文も書侍るなりといふよろの先よし然れば又沙門の妻と成り經文なぞも讀ね  
 ばならず夫の如何にやや開の少しも辨へねど今より勉強勤めなば覺ふべく侍るやかしそ

夫にてもよし扱汝ぢの又阿難の何處を愛するや然ればなり自らの阿難の眼を愛し鼻を愛し  
 口を愛し耳を愛し聲を愛し手を愛し又足を愛し侍るなりといひければ世尊の何處も彼も  
 愛するや汝ぢ能聞かし其一番に愛する眼の中に愛に溢るゝ泪と云ふものあるを知つらん  
 又鼻の中より穢なき鼻汁あり口の中に穢なき唾あり耳の中に耳の垢あり手足及び身の  
 内に小便の穢なき物あり今阿難と夫婦と成り互ひに其清うらぬ屍を抱つゝ終に子も産れ  
 べく夫子あれは則ち死ぬとあり死ぬ事あれは又哀みあり彼程の穢れ思しき物を左程に深く  
 思ひ込て何の益りある事やうし能々思ひ廻らせよと説せらるれば名にしゅう三世俱通の世  
 尊の直々の御異見は依りて水の出花の無解も類に現れし摩訶蜜の忽ちに夢の覺たる如く自  
 ら正念に復しければ即座に阿羅漢の道を得たるも不思議なり世尊の摩訶蜜が正念に歸した  
 るを知し召ば如何に娘よ阿難の處に赴きて見へよと仰せらるれば摩訶蜜殊に取入たる色  
 を現し實に我心の愚痴にして阿難を深く慕ひし事の今更恥うしく身の毛も戰慄計りなりき  
 我今迷ひの心の開けし事の暗夜に燈火を得し如くなれば何卒此上には是までの戯れ事を語  
 り止て尙ほ菩提の道を説しめ給へと有ければろの善き志しなり然ながら汝ぢの阿難の婦



妻となるべき事の先世より五百世迄の契りありて其間相敬まひ相貪り仇となり味方どありて相見ゆるなり今も其契りの内なりしが僕倅にも得道して髪を互ひに剃る中も尚ほ兄の如く弟の如き縁の盡すと其因縁を説せらるれば阿難も堪へ兼て片陰より御前に立出て摩訶蜜の手を取つゝ其因縁の有者うなど涙を溢して歎じければ有合數多の羅漢達も斜ならず歡喜に絶たりとぞ稍ありて世尊の摩訶蜜に向ひ給ひて三寶を信する者の先孝を以て先とする習ひなり汝ぢ今より一人の母を勞り育むべしと命ぜらるれば摩訶蜜の有難泪に世尊を數多度拜して願て我家返ぬ然る阿難の今の心の月の雲晴て悦ぶ事大方ならず然る世尊の御先觸に王舎城の市へ赴うんと支度をなしたつゝ暇を告て王舎城の市へと出行ける「扱又提婆達多の先に身に備らざる二相を荒業にて補ひつゝ殊の外惱けるが今其痛も薄らぎければ尊の如くに身を拵へて天熱と名乗て彼の奪ひし世尊の鉢を持て長臣の俱伽梨一人を伴ひて國々を廻り味方を集めんとて出立しが此程に王舎城の市に名高き長者の善賢が家に宿りて之を向卒我味方に勤め込んど詞を巧に何呉となく不思議の奇特を見せければ長者の殊に尊く思ひて豫じめ提婆に感ひされて歸服する者から僕倅此程妻の懐妊なれば胎内の子を占ひ

させんと妻に語りければ妻の言ひけるやう私しに未だ咄しにやさねと眷屬より阿難と云ふ者が此市の何某が方に來りてよき教を説き問も亦く世尊も托鉢又人らせられしと聞き此處彼處の者が群集なして集ひ參る事を聞侍れば昨日密に彼處へ參詣して懐妊の子を問ければ正しく男子にて爾も最上の福者にて家富榮へ人中よ於て天の福を受後に我佛道に入り阿羅漢と成者のよしを論され給へば最早夫にて安心なり斯る事を又も兎や角と聞問ひ杯して不良噂も有時の寐覺も悪し是ほど憊なる世尊のお詞なれば有難く覺せどあれハイヤく其様なる事われは尙更の事なり此頃我家に宿り給ふ新佛の天熱道師の殊に尊く思ひるれば夫等の事を告て先見て賞へうしと流石夫の威を以て妻を連て道師に見へ云々と世尊の事を語りつゝ懐妊の其如くよやと問ければ天熱道師の算盤を以て其年割を占へば世尊の告に異ならねども爾なりと言は渠等の世尊を歸依なさんと心に工夫なして忽ち聲を上て打笑ひアノ瞿曇めが何を知らや成程懐妊の子の男なり然ども此子の人とされば汝ぢが家を破る悪人なり汝ぢよく物を考へて見よかし人として豈天の福を受べきや天の福われは天よ生るゝなり天の福なきが故に人に生るゝ者を夫を奚ぞやアノ瞿曇めが辨へ振にて人を感ひすを



愚俗の凡夫の千に一つも夫を信ずる事もあらんが心ある者豈渠等が云事を定めて瞿曇の斯くの如き鉄鉢の持まじきなど聞か妻の爾なりと云ふにぞ然バこそ日外渠の法の道にて問答して勝たるにより渠が命とする此の鉄鉢を取上たるあり以來の我法力を信じて必ず共彼の曠聖の諭言を川ゆる事勿れなすと偽り罵りければ善賢長者の駭き入て彌々敬ひ目尊びつゝ扱の妻の胎せし胎内の子の家の禍ひとならんには寧ろ生れぬ其先に失はんに如じと思にも妻に隠して右の由を道師に頼ければ夫の最易き事あり迎聊かの薬を與へけるに予長者の悦びて此の墮胎薬ならんと心得て密に妻に飲せけるに是の如く如何に妻の彼の薬を飲と均しく其苦みの夥敷く目口よりも血を吐て七轉八倒虚空を擲て竟に果敢なく成けるに予長者の歎き悲みつゝ天熱に斯と告て嘆ければ天熱の少しも驚く色もなく實に家の僥倖あり妻の死を左のみ悲むまじ其悪人を孕ほどなれば是以て汝等の仇敵なり然バころ見られよかし天の幸福を受たる者豈聊かの薬位にて死する事の有べきや茲を以て瞿曇が虚言の明りなり必ず信ずる事勿れ惡業滅して善に向へば憂を祝ひと大膽にも根強く論しければ長者の聊か氣を取直して妻の死骸を尸陀林に送らすれと實に思へば我手にて殺せし

者りら心の内に快々として憂ひ悶き兎に角天熱に嘆言のみ云つゝくれバ天熱も今の何どなく居づらくやなりけん其日長者に向ひて言けるやう此程より永く世話に相成て辱けなし我まづ他を廻り又來りて最上の法を傳ゆる故返すくも力を落すまじなぞと語り慰めつゝ頃て長者の家を立出て夫より其處ら邊りの目星き家に便り入て不思議の奇特を現して身の光り足の裏の輻輪の相なすを拜せしめて無二の新佛ある事を披露せしうは是を信ずる者夥敷なりて天熱が説所の邪法の俄に弘まるも亦不思議なり時に阿難の日々托鉢に出ければ此風聞を聞て其法座の所を見届しうへ急ぎ世尊の在す所へ往て告るやう寔に珍ら敷事を見て戻りぬ我今日例の如く托鉢に出けるに云々の家の門に説法新佛天熱道師と札を打て數多の人を集めつゝ法を説く者ありぬ私しの外面にのみみて其説法を立聞に道に正しく提婆の聲なりき又其説所を聞けるに身の光り足の裏の輻輪の謂れを説き又善賢長者の妻の胎胎を世尊の男子にて天の正福を受ける者と論しければ其妻の死して子も亦滅しぬ斯く世尊の虚言を吐て諸人を惑すなすと大音に罵る事を聞か我身中に釘を打るゝよりも辛く思ひぬ此儘に捨置せられなば竟に障障を蒙りて外道の爲に世尊の光りを失はん事も有べし御分別の如何侍る



やと逃ければ世尊の莞爾として憍の不便や善賢が妻の外道の爲に殺されしう然ながら我一  
 且論したる子の腹力豈朽べきや直ちよ尸陀林に赴きて子を助くべし此由を諸人に觸て隨  
 しめよと命ぜらる此時頻婆娑羅王も茲に御參詣の折柄なれば是を聞給ひて其奇特を見まほ  
 しどあれバ供人を残る方なく隨へ給ひて尸陀林へ赴きて見給へバ彼の妻の屍に火を懸て茶  
 毘する事已に半分過ぬれば諸人も最早間に合すと悲みけるに世尊の耆婆大臣を召れて急ぎ  
 火屋に入て善賢の子を取來れよ母の体にはや焚たれども子に未だ恙なしとわれバ耆婆の  
 急ぎ火屋に入りて見れば不思議や炎々と燃上る火屋の中何となく涼しきを感じてければ  
 耆婆の手疾く焼爛れたる肉をわげけバ蓮華の内に玉の如き子の端然として在せば夫を携へ  
 出て世尊に獻ずれば其座に連なる者共の一同に未曾有の奇特なりと歎じて皆々世尊を拜し  
 ける其時世尊の善賢を招きて其子とあれども之れを信ぜずして來ぬは是に依て頻婆  
 娑羅王又與へ給ひて福厚ければ火も燒事能はず毒も亦能く害する事なし此子の實に尊き者  
 なりと命ぜらるれば頻婆娑羅王の殊のふ歡び給ひて此子の名を如何号んと宣へバ此子火中  
 より得たる者なれば火光明童子と名乗べしとわれバ其の有難しと謝しつゝ直ちに王宮へ返

らせられて八人の乳母を附て寵しみて育て給ひぬ「扱又茲に長者の妻に兄ありて遣り久く他  
 國に商ひして此程戻りて人傳に長者の家の不吉を聞ク否殊の外腹立て直ちに善賢の家に出  
 きて善賢に見へ憍我妹の懐妊せしを世尊の最上の男子にて天の福を受る者とありしを汝  
 邪見放逸にして外道を信じて手うら我妹を殺せし事忍ぶに余其懐妊の子の火中より出て  
 今頻婆娑羅大王の養ひ君と成よし汝汝の子を取戻して世繼と爲ばよし左なくバ我世間へ  
 妻殺しの惡事を知さん速りに返答せよと詰られて善賢の一句も出ず居たりしガ詞を諫て身  
 の科を詫つゝ何れにも取戻すべしと怒りを宥めつゝ夫よりして王宮へ赴きて彼の童子を取  
 戻さん事を願ひければ是の世尊より附屬の子なれば仮令親たる者と雖ども其沙汰に及べ  
 ずと有ければ其處よりして直に世尊の御在所へ赴きて數々の身の科を詫童子の事を冀へ  
 夫の寔に難き事なれども今童子を返さずバ汝が刃に懸る禍ひを見るに忍びずとて阿難を  
 以て王舍城へ此由を傳ふべし俱に往て童子を受取べしとわれバ殊なふ悦びて直様阿難に隨  
 ぐひて王宮へ赴きければ世尊の御詞に依りて異議なくも渡し給へども此童子の此頃日に  
 染を重ねて今の實の子の如くよ愛れバ日々王宮へ抱き參りて見すべしとわれバ長者の有



難く御請をしてぞ我家に返りける「此長者の物語りの初めより茲まで凡る六七年先の事なれども讀易うらしめんが爲に茲に書續けたれば本文の讀續に拘らず六七年先の事と思ひ給ひて年月の違ひを論じ給ふな又善賢長者の童子を取戻してより間もなく病亡てけり然れば光明童子の幼なきより家督を繼けるに實に不思議なる身にて已に七八才の頃に及べば大人も及ばざる才智ありて先我母先去し處へ堂を營て又數多の僧を供養し万佛の事を懇切にするは是れ両親の菩提の爲と聞へたり此續きは尙ほ未だに説べし」扱又提婆の頃日瞿曇の此所彼所と托鉢するものから定めて耆闍崛山には羅漢も居るまじ此間に彼の山へ上りて善星を引出して謀計を示さんとて王舎城の市を立出耆闍崛へ赴く道にて俄に大雨に逢て暫時木陰に雨舎りしける中に雨も霏ければ其邊の機屋の内よりして出る者のわれのと見るに舍利弗と目蓮なれば駭て後を見てける内に其機屋よりも亦草葺の女二人出けるゆゑ再度驚き偕に彼奴らの女と云合せて不義の事を語ひつらん是の宜所を見附たり斯る不埒を見附る上は首元を捻附て取を搔せん夫又の先相手の女を取押へ置んとて俱伽梨をして急ぎ二人の女を捕へていふやう「己れらの沙門を誘うして不義を語ふ不届者哉二人の羅漢の師の三世俱

通なすと自ら誇りて五戒を示す其の中よても邪淫の尤も罪深しなすと論せども極めて隠し女のわれになり夫を見真似に羅漢の中にても一二を争ふ舍利弗目蓮の斯る不埒事を爲からん流石人家を離て人への知ぬ此機屋を大黒の出合茶屋とい能もころ見立たり汝ら二人來世の一つ蓮の上と契らんが其の一個地獄の釜底なり汝ぢが目蓮の大黒う其方が舍利弗の圍女うと悋氣に面を脹らせて罵れば二人の草葺の面色を變て詫るやう私くし其の此片在所より草を茹に來りし所最前の暴雨に此機屋に雨舎して須臾に至れども中々以て羅漢達と懇切にしたる覺なし私等も女の端くれなれ外に約せし男の有は何しに大黒とやら蝦夷とやらよのおまきぬと云と俱伽梨の更ら又聞入ずヤア百万たら分疏する共此黒ひ目が見たる上の兎も角も汝が家に往て詮議する事ありぬ極めて是まで二人の羅漢めが何の爲彼の爲と人を惑はして奪ひし寶を汝らに贈れば其着類頭の物迄も皆佛の物ならんあら忌々敷徒ら者めサア夫々の家に案内せよ一家一類を詰り吳んと罵りて免さされの二人の余儀なく家に伴なひて往にけり

釋迦八相倭文庫四十六編終



釋迦八相倭文庫四十七編

去程に世尊の王舎城の伽藍陀長者の招ぎに應じて彼處へ赴かせ給へば傍らに大ひなる房舎のありて天熱精舎と額を打たるに世尊を初め羅漢達も駭き給ひ直ちに伽藍陀に世尊の事の由を問給へば伽藍陀の本意なき様にて然らば此房舎建立の仔細の未だ我世尊を拜せざる中に天熱と云ふ大徳の法師ありて是を深くも尊びつゝ渠が望みに任せて賣を厭はず造り立侍りしよ其の天熱と云ふ者の全く提婆達多にて又其弘る所の邪法の法にて已に我知音の妻を毒害せし事より始めて邪まある事を悟りて恐れたり夫に引替て世尊の御法の最尊く覺へければ此伽藍の世尊へ献じ度存ずれども人として仮令邪まの者にもせよ其の約束を變ずる事は又人たる者の道たらず兎やせん角やせんと殊に憂苦存じ侍るなり若し宜御思案も是あらば私に於ては異議なく此の精舎を世尊へ奉つるなりと云ければ世尊聞給ひて其の心遣ひの安かるべし然る今より我が精舎と定るからん天熱の額を外して伽藍陀竹園と改められよと宣へば舍利弗の承まひりて其の精舎の額を更めけり夫よりの其處にて御説法を説せ給へば俄に其の法徳の遠近は弘りて參詣の者集ふる事日に蟻の群るに異ならずとかや然るに此の

所に優園王の御參詣と先觸して數多の同勢の入來る由を告る者ありければ取敢ず賓頭盧が立出て禮をなし直様大殿へ案内し奉れば問もなく世尊も見へ給ひて渥く勞ひ給へば優園王の廣したる手輿を昇上させて面前に据置て世尊に宣ふやう开も私良摩國の達婆太子の禍ひを求めて竟に國を失ひしに依りて譬は是其親族なれば再度其の國を興して政事を正しく行ふと雖も國民未だ懷ざるの全く先代の惡き余風の残れる處なり是を改むるには佛道を以てせざれば人心を和げがたし依りて過し頃俄に世尊を迎へ奉らんとて天上寺へ使を立たりしに折悪くも世尊の切利天に上り給ひて先世の母君の爲並びに天人を度し給ふにより一下九旬の間天上に御在と聞我望みを是非とも急速に達し度思ひて毘首羯摩に命じ急ぎ赤栴檀を以て世尊の尊躰を摸し作らしめ日々に尊び敬ひければ國民等の心も今の豫じめ善に靡き隨ひける事の有難さよ態々是迄其靈像を伴ひて參詣來りたり何卒譬が精神を愛懸納受在して御自ら説法を聞き給へどて世尊を拜し給へば世尊の其の精神の厚き事を賞給ひて順て其の木像を載せし御輿に向ひ給ひて宣ひけるやう善哉々赤栴檀の釋迦牟尼世尊造り聞召そも我の八十の化縁盡なば涅槃に入るなり御身の辱けなくも涅槃を知ねば末世未代の衆



生に結縁深き身の功しに先今其の利益を現して我に替りて説法あられよ末世末代の教主なりと禮拜なし給へば御輿の簾の自然さらりと巻上れば栴檀の香りの薫じわたりてあら尊や有難や木佛の尊像の一分一厘世尊に違ひぬ御容を現し給ひて世尊の御前に立出給へば羅漢達及び優闍王の家臣の面々其の外參詣の輩までも奇異の限りと禮拜するころ尊けれ稍ありて世尊の彼の木佛に宣ふやう我より徳の勝れたる尊躰なれば先我に先立給ひて説法の座に進み給へと勸め給へば黙頭て説法の座に上らせ給へば世尊の後に引續きて同座ましくて御法を説せ給ふ御容の何れが世尊なるか御法の聲音も一音よて唯御容の二つ在のみなれば優闍王の歡喜の涙は呉はてゝ頓て御輿も移し奉りて厚く世尊を拜して戻せ給ふ是即ち今日本に渡り給ふ嵯峨の尊躰の是なりき諸優闍王の途中迄還せ給ひしが如何なるとよてや又御供の者四五人を伴ひて立戻り誰をか討果すべき形勢にて優闍王の以前の柔和も引替て怒の色を現しつゝ馬乘にて入給ふに予此形状を見る者ハスハ何事の出来か門外の者の速駭くを賓頭盧夫と見るよりも人々を制して己れ一人門内まで馳ありて土間に平伏すれば彼の武士共ハ賓頭盧を取巻て既又討果さんとする所を優闍王の暫時待と人々を制して賓頭盧

に宣ふやう汝が儘は聞よ最前我の茲に来る時汝の我家臣の筋目ながら何逆我を出迎ひざる予臣として主を迎へざる無禮の者ハ國政の爲討果さんと道にて供の者の言上により止難く討果さす可きなりしに今又茲まで出迎ひて我を敬ふは何事ぞや此儀を返答せよと宣へばさんハ私しハ如何にも以前の私良摩國の達婆太子の臣下にてハ今君にも臣下の筋目に相當り侍る事を知ぬに非ずと雖も如何にせん沙門の身ハ貴賤を擇べぬことなり然らば何ゆへに今又出迎へたるや然らばなり最前の君善心にて御入有ども今ハ早惡念を募らせて入らせ給ふが故に我若し御迎に出ずば忽ちに我を害し給ふべし左すれば君是までに積せ給ふ善根功德も一時に消て未來ハ惡道に墮給ふなれば夫を救ひ進らせんが爲に出迎ひぬ我命ハ聊か惜からず只君の爲にぞとて平伏すれば優闍王の馬よりやをら下給ひて賓頭盧の手を取て袂の塵埃りを自ら拂ひ給ひつゝあら殊勝しき心根かな謂れを聞ハ實に尤もなり其誠心を知らずして已に我身に大罪を受るところ能ころ出向ひ呉たる予と宣へば賓頭盧ハ頭を擡てイヤ能も出迎ひし事にも非ず今我出迎ひたるよ依りて君七年が其の間王位を失ひ給ふべし是我が爲所にあらざれば必ず恨み給ふなど示しければ優闍王を初め劔を抜き武士共は皆打駭



きつゝ洞然として返りける○扱又爰に伽蘭陀精舎への須達長者の悴なる金童今の名を替て僧伽羅と名乗て伽蘭陀長者に面會して何卒世尊へ御對面を願ひ吳よと頼みければ伽蘭陀長者の快よく承諾て直ちに世尊の御前へ伴ひ出れば僧伽羅の世尊を敬ひつゝまづ以て御機嫌能く入らせられ恐悦此の上なし先づ年の初めて僕れの隣りなる大迦葉の家よて拜顔を得し節彼の波斯匿王より下されし檀奈羅樹の御目利を成下され辱けなく存じ奉つるなり實は世尊の御明察に聊か違はず彼の檀奈羅樹を我父須達が庭の面へ植させしに御詞に違はず千日にして花開きし所寔に珍敷花とて遠近の者忍び入て折取んとするを召仕の者之を防ぎければ頓て此花を取んとて人々黨を結び刃を以て家に忍び入る故是と戦ひて幸ひは花の折せざれども番人共の已に傷を蒙る事百八人餘り是れ世尊の示されしに違はず又百日を過て實を結びしどころ時しも國中の米穀乏き折なれば此實を一つ喰ふ時は七日の内物欲からぬと聞て多人數押寄て取喰いんとするに予是を防ぐに違なく竟に我家を攻潰して奪ひ往んと謀る由實に世尊の諭しを守らずして我父の斯る菓物を植て今の一命に拘りたる大難の出来し事ども以前論されし御詞も少しも違ひぬ今我父も心を改めて陰ながら世尊の尊き

事を思ふがゆへに私し事聊かの謀計を以て彼の檀奈羅の元へ建札を出しぬ其文より此の樹世尊の物なり若し盗み取者の未來無間に落ると認めてより我勝に来る者も此の札を見て忽ちに悪心を翻へして這の尊き佛の物を盗み取事の恐れありと空しく返るもあり又樹の下に跪づきて拜禮しつゝ往もあるを我父を初め親族眷屬の之れを見て彌々世尊の尊き事を感じて何卒我家に一度來臨まします事を父を初め一類の者殊更私しの願ひなりと平伏して希かへば世尊の微笑まじくして其儀の最心安しと雖も汝ちが家に精舎なかる可し精舎さへ建立せば我れ赴かんと宣へば僧伽羅の打悦びて了れころ何れにも調へ侍らん然らば何卒御弟子の中より精舎建立の爲に御一人遣はしめられよと願ひければ然らば舍利弗の其の奉行たるべしと命ぜられて直様僧伽羅に暇を給はれば僧伽羅の舍利弗を伴ひつゝ我家に立ち戻りければ須達長者の殊に悦びて舍利弗を厚く饗應つゝ精舎の地を擇びしに舍利弗の遠近を見廻りて祇陀太子の園を指して是ころ宜地なりとわれは須達の直様に祇陀太子の御前へ出て祇陀園を何卒我身に賜へかし我れ世尊の精舎を建立せんと願へば祇陀太子のすされける然らば其の地に金を引べし金を敷たる其の程の仮令幾万坪なり其汝ちに得させんと有ければ何



が扱其の儀ならば心安し先御聞  
 濟の段實に辱けなしと其の儘退  
 きて數多の人数を招き寄て祇陀  
 園の草木を拂ひせつゝ四方十里  
 の内へ貯へし藏の金を象に積て  
 運せて敷せければ祇陀太子の是  
 を聞給ひて急ぎ須達を召給へば  
 須達の駭き扱ひ變替にやと案事  
 つゝ出ければ太子の云ふやう如  
 何に須達汝が先頃我園を望みし  
 時我れ其地に金を敷べ與へんと  
 言ひしに全く戯れなるに莫太の  
 金を其地に敷たる旨を承まはり



て感じ入りたり左程も尊き佛の  
 爲よするとあらば價へもなく園  
 を遣いさん爲に呼出せしと宣へ  
 バユハ有難く存じ侍れども一旦  
 約し給ふ如く金を取給へかし我  
 一命の替りと思へば聊か惜くら  
 ずと執念く云ふに然らば其意に  
 任さん然ながら磨其の金を以て  
 精舎の樓門を建又其地の竹木の  
 我世尊へ奉るなり此の儀宜敷取  
 計へどあれは須達長者の低頭し  
 て夫こそ此上もなき悦びなり左  
 有る實に御威勢を以て精舎の建





立を忽ち又整ふべし是御世万代の御祈禱なりと敬ひて返きけり○惜愛に又舍衛國よ六人の外道ありて是を六師外道と云ふて何れも奇異の奇特を現す術を以て世に知られたる者なるが此程須達長者が祇陀園を世尊の精舎に金を敷て買求めたる事を聞て六人の者共の甚だ駭き左ある時の我々の破滅の基ひなり急ぎ是を妨げんとて六人の司なる勞度舎の波斯匿王へ赴きて種々に世尊を悪く罵りけれども聞入なれば然る上の道家と佛家の術を比べて勝たる者への祇陀園を賜り負たる者の必ず勝たる者の門弟に附とを定め給へと頻りに願へば波斯匿王の余儀もなく聞濟給ひ頓て此の旨を太子に告給へば太子のまた之れを須達に告給ひしに須達の大いに駭きて舍利弗に斯と告じに舍利弗の聊うも駭く氣色なく何時なりとも法術を比べんと言ければ先安堵なして其争ひの日を國王へ願ける「夫の扱置愛に又天熱と俱伽梨の彼の草薙女の宿をさして往けるに稍時を経て靈鷲山ある裏手の麓に最荒たる家のあるを是なるが妾等が宿なりと云へば返答もなくして天熱の先に立て内へ上りければ年の頃六十計りの女が圍爐よ松葉を燻らせて居たりしが二人の者の來りしを見て俄に駭きて膝の下なる鞋を捲り劍を取出して打掛らんず形勢あるに予天熱の急ぎ之れを押留めアイヤ老

女早過まじ我等の盜賊ならずチト仔細ありて汝ちが家の乙女を送り來りし者なり先續りて事の由を聞れよと云へば老女の色を直してコハ粗忽の段免し給へ然らば先火の側に寄て手足などを煖め給へと和々内に二人の草薙女の泪ながらに老女の側へ進みより此の二人さんの私しら二人が最前の雨に那方の洞にて雨合せしを見て此の山の御出家なる目蓮様とやら舍利弗様とやらと不義志たるどのお疑ひにて是まで來給ひぬ何卒詫事して返されよと歎きければ老女の是を聞て二人の女を確と睨みイヤ汝等の分疏の暗ひく何り仔細のなき者を此方がたが何をか不義せしと宣ふまじ左すればお二個様の此の山の御弟子達にて御座るか先粗末なれども日も呉たれば幸ひに茲に泊り給へ二人の女どもを頓て吟味致さんと云へば俱伽梨は進み出イヤ致す致さぬの論もなし我々が眼に睨と見たる上の詮議に及ばず不義者あり定めし汝ちの此山の弟子達の酒を洗濯を云立て山へ出入して密に女を賣なるべし我の此の山の者にていなければ聊か答る筋も無れども有様を明せば褒美をやるべしといふに予偕のの主達此の山の者て無き上の又何故に其の不義を糺し給ふや夫のくほうかひ倍氣にていかひお世話の事なりシテ不義の事を明さば何ゆへに褒美を下さるにやサア其不義を



明せバ瞿曇めが法の破滅と云ひ掛れば天熱の協よりイヤ其不義を明せバ温麵蕎麥切どころか莫大の褒美を遣るべき仔細ぞある其の仔細を云ふに先汝ちが身の上の何ゆへに女一人にて茲に住斯る乙女を抱へ置や夫さへ明さバ今茲にて褒美の汝ちが望に任すべし又今閃かせし劍といひ更らに嗜みなき者ども見へずサア何と明すか明さぬかと云ひれて如何にも此のお山の沙門にわらずといへバ聊か頼母敷事あれバ包す身の上を明さん先茲の端近なり奥にて新に對面せん女ども来れど二人の女を引連れて奥へ往たりしが稍ありて女を以ていど老女が今對面すれば奥へお入有と云にぞ俱伽梨の茅屋を奥どの何ぞ物々しやと天熱に引續きて俱伽梨も俱に入りて見れば瓊瑤の冠に綾羅の装束を着飾り邊りを照して立たりける天熱の之れを見て大いに駭きて能く見れば以前の老女に違ひぬバ二人も威儀を正すにぞ老女の詞を改めて如何に今宵の客人達我身の上を聞んどあらバ今包す語り聞さん开も我の圓滿具足夜刃の妻なる鬼子母の姉妹と云ふ者なり妹の鬼子母摩尼鉢にはや佛道に陥り具足夜刃の歿去て歡喜大王も破滅せり今我一人無狀も生殘る思ひしさに六師外道を手も隨へて何卒佛道を破滅せんと巧みつゝ密に此所に家を構へて此の靈鷲山の沙門を魔道に引入ん

とて歡喜猫王の分身なしたる猫又を女と化させて戀の罫に釣込んと思ひて或は法座説法の砌りに山内へ立入すれ共眞に堅固の嗜みありて色に陥らぬバ兎やせん角やせんど日に思ひ募る計りなり斯身を改めて見するは是猫王山歡喜の存念を繼んが爲なり一度我家に足を入るゝ者の嫌なりども味方又附ずにや置べきぞ否とわらバ一討にと太刀又手を懸て立たる形勢のさしみに猛く見へけるゆへ思はず俱伽梨の平伏けるに天熱のからくど打笑ひわら面白く招かずして僥倖を求ると此事は諸の其方の矢匿女郎にて在たるか然らバ我身の上も明すべしと冠りし頭巾をかなぐり捨てて天熱といはれば飯の偽名なり實我ころ提婆達多なり我も此の山に恨の重なる者から一味を調ふ爲に迎此處彼處を經廻り歩行中に好者に出合ぬ我命と頼みたる阿闍世めにはや變替して力を落せしに未だ天運の盡ぬにや今宵の仕合せ悦び入りぬ夫に附て宜物を予見せんず此鉄鉢を見られよ這の彼の瞿曇めが諸人を惑はして食を求めて命を繋ぐ寶の品なるが早我手に入たるのみならずまだく好事のあり此山に居る瞿曇めが悴善星の已に我味方の者なれば渠を茲へ呼入る品は是なりとて懷中より一封の書を取り出して是の軍婆羅と云ふ者善星より取置し摺紙なるを丹車と云ふ者より



手に入りぬ是を以て其方の參詣の者に姿を變じ瞿曇の留守に富貴那め説法するとわれ  
 巴山へ登りて彼の善星に此證を見せて茲へ連れ來られよと差出せば爰匿の微笑て扱ひ提婆  
 殿にて在すか左うどの知すに威を以て威せし事の恥しや宜事の一時に來るも時を得し證な  
 り我明日參詣の者に身を變じ夫を善星に見せて連來らん今宵の休を召れよと互ひに悦びつ  
 へ尙ほ惡計をぞ語りける○又舍利弗と六師外道の術を比ぶる日も已に定りければ波斯匿王  
 の城外の地に出給ひて御覽する事されば警護の武士の最嚴重に立並びて已に其時刻とな  
 りければ六人の外道共の花美は衣服を飾りて劍を帶しつゝ人の眼を驚かせしうば須達多舍  
 利弗に打向ひ今此時の争ひなれば殊に案事侍ると言ければ舍利弗の面の色さへ變ぜずして  
 飯令渠等が稻麻竹葦の如くに集るとも我足の毛一筋を動すにもたらずとて麻の衣の垢染て  
 實に見すばらしき儘にて最と悠然と進み出て先帝を拜し扱外道に向ひてマア汝等妖怪を業  
 とする身にて我と拏術するとの片腹いたしサア如何なる難問なりとも吐出せと罵りければ  
 六師の司なる勞度舍の眉を逆立遣ひ舌長し妖怪と云ふの汝等が頼むところの瞿曇の事よろ  
 の何を以て斯いふ予然ば妖怪なればこそ三歳が間母の腹中に宿りて右の脇を破きて生れ出

恩愛の父の家督を即す妻子を見棄て諸人を惑はすを知らずや茲の須達長者も亦愚鈍にして其  
 邪道に迷はされて莫太の金を敷て此祇陀園を渠等に布施するとの片腹痛し汝等今我と術を  
 競る共千に一つも勝事のあるまじ無益の骨を折よりも今速かに我等に降りて其一命を助  
 れよ左きくして拏術に負なば先須達が一類までを亡さん眼前に危ふきを悟りなば速う又祇  
 陀園を我等に附屬して永く身の全きを國王へ願へかし先我奇特を見せんとて針の如き髭を  
 一本抜て地の真中へ植ければ瞬く間に大木と成て天をも覆ふ計りなれば國王初め警護の者  
 の更なり數万の見物人の其中にも殊々須達を恐れけり舍利弗の之れを見るより右の指を差  
 延つゝ爪彈すれば忽ちに毘蘭風の吹起てさしもの大木を根より吹倒して勞度舍の頭の上へ  
 打倒るゝと見へし跡方もなく吹散けるに予此時見物の面々の皆々舍利弗の大徳を感じて  
 止ざれば勞度舍の斷をなして忽ちに其地を大池となしければ亦舍利弗に妨げられて少し  
 く術の怯し所へ第二番目の拔伽耶が進み出て地の真中に大山を現はしつゝ七寶の堂舎を目  
 前に建立して見せければ舍利弗の又天に向ふて金剛の二字を指みて書ば金剛力士の天降り  
 て其宮殿及び大山も踐碎きければ塵も残らず失てけるゆへ第三番目の迦里闍の之れを見る



より斷をちして走り出大地を踏鳴せバ震動雷電するや否や忽ち龍の現れて天へ上りつゝ、雨  
 霰を降しければ舍利弗ハ又衣の端を切て天へ向て飛せければ忽ち金翅鳥と成て再び天降り  
 夫の龍を引裂喰ふて跡に一塵の物もなく元の大地となりければ六人の者共斯ていはや腕  
 力よりも外なしと一度に舍利弗に打掛る其時に國王ハ樓まで鼓を鳴すが否や警護の檢非違  
 使數百人六人の外道を取押へて汝等國王を欺く兼て術に負たる者の勝たる者の門弟とあ  
 る事を汝等より願ひながら今斯る舉動ハ不届なり速に舍利弗の徒弟となればよし左なくバ  
 六人共討果すべし夫れ鬼人に横道なしと言ざるや返答せよと罵りければ六人の外道ハ竟に  
 舍利弗の徒弟となるよしを述ければ舍利弗ハ即座に法を授け得さしめけるに依り波斯匿王  
 ハ殊に佛法を尊び舍利弗を勞ひ給ひて頓て還御なりしうば須達長者ハ天地を拜して悦び舍  
 利弗を伴ひつゝ我宿へと返りける○然バ舍利弗の神變に依りて六師を降しければ彌々祇陀  
 園ハ世尊の物に定りて須達ハ國王の嚴命を以て數多の匠を招きて急ぎ精舎を造らしめけれ  
 バ樓門及び三百の禪坊六十三の靜所其の他庖厨浴室大小の園圃洗濯の所まで間も無く満足  
 しければ須達の悦び斜ならず急ぎ伽藍陀の方へ起きて佛を迎へければ世尊ハ大衆と共に來

らせ給ひて先づ須達の精神を感じ波斯匿王の三寶歸依を愛給ひて即ち祇園精舎と號られて  
 須達に示し給ふやう抑々此地に汝が精舎を建立する事ハ過去の世に六度なるが今を加へ  
 て七度なり是皆須達が我へ爲す所なり又未來彌勒菩薩の時にハ須達が懷法國慶塔摩常の大  
 臣にて又此地に七寶を敷て未來の佛に供養する事までを語り給へバ須達ハ感涙を流して悦  
 こびぬ又世尊ハ重ねて論し給ふやう切夫程の善根ありて代々に富る長者となれども過去の  
 世に一世貪欲の事ありぬ夫ハ何と云ふよ過去第四狗留孫佛の時にハ人の命四万歳ありしが  
 此時に長者あり名を毘沙長者と云ふ是即ち須達なり此毘沙ハ欲も飽ずして賣買の天秤の中  
 を虚にして其中へ水銀を入れて權に掛物を賣時ハ天秤の下をさげて水銀を品の方へ下させ  
 又物を買時ハ上の方へ寄せ道ならぬ欲を貪りて權の目を偷し科の是又未來迄も盡る事なく  
 して長者の身となれども諸人の之れを尊まらず常に家に不吉の出來て散財する事などハ彼の  
 檀奈羅の一本にて寶を費し又家人を害ひ既己が身も危ふき事有が如しと示されければ須  
 達ハ面の色を變て額に流る汗を押拭ひて寶に身の罪障を明りに論し給ふ事疎ハ聞侍ら  
 ず其罪障を償ふ事もあらバ聞しめ給へ此世ハ風の前の燈火の如し何卒未來ハ擁護ハ依りて



助たすけり度たぐ思おもひ侍まるなり既に先まづ年とし俸つかに示しめされし檀だん奈な羅らの事ことの身みの禍わざはひと聞きしうと我慢がまんを以もて庭にわに植うへしに大だい難なんの出来いでて我わが一いち命いのちに及およぶ所ところを俸つかが智ち罽じにて今日けふ迄までの命いのちを助たすかりたる事ことも偏ひとへに世尊よきの御おん蔭かげと辨わけられければ心こころを勵はげまして斯かくの如ごとき精しょう舍しゃも建立こんりうせり何卒なにぞぞ過去かこの罪障ざいしょうを免まるゝ手段てもあらば一命いちめいを抛なちても勤つとむべしと誠まこと心に述のべければ然しからば此上このうへの孤獨こぼく貧窮ひんきうの者ものを恤あはむに資たからを借かりて施ほすべし然しかる時ときの過去かこの罪障ざいしょうの消滅しょうめつして今世こんせの貧窮ひんきうに零落おちおちる事こともあらんが未み來らいの必かならず富榮とみさかゆる報むくひを受うける事ことの疑うたがひ有あるべうらずと論ろんし給たまへば夫それこそ其最易いそやすき事ことなり仮令たとへ我われ今いまより破衣やれぎぬ一重ひとへを着きる逆さかも杯さはり是これを勉つとめずはやいと即座そくざに暇いとまを賜たまはり家に歸かへりて他の召仕めしつかひの者ものに夫々それぞれに手當てあてを附つけて暇いとまを遣やり又資たからと名の附物つものの云いふも更さらなり若類わくろ木材もくざいも皆代みなしろとなして是これを孤みや寡あ及び貧窮ひんきうの者ものを初はめとして非人ひにん乞食こつじきに至いたるまで我身わがみの名なの知しぬやうにとて夜中よなかに衣類いるい食物じきを施ほす事ことの莫な大なれば陰德いんとくの陽報やうほうの譬たとへの如ごとく自然しぜん又其施そのほしの事ことの世よに隠かくれなく知しれければ夫れより人々ひとびとの須達しゆだつ長者ちやうじやを給孤獨きよこどく長者ちやうじやとぞ敬うやまつひ尊たつびけるとなん

釋迦八相倭文庫四十七編終

釋迦八相倭文庫四十八編

去程きよほどに提婆達多だいばだつたの炙しや上じやう鴈やうの家に留とどまりて靈鷲山れいじゆせんより善星比丘ぜんせいびくを呼向よびむかへて殊ことなふ悦よろこび種々しゆしゆに饗應きやうおうて語るやう世尊よき御身おんみを仇敵あだたきの如ごとくに憎給にくみふ事こと甚はなだ道みちに欠かたれども夫それも亦御身おんみの僥倖ざいしやうなり万まん一いち親おんみ深ふかければ早はや世棄人よすてひとと成なりて何なにや彼かや戒いめ事ことのみ守まもりて長ながき世よに短みぢき命いのちを生な涯げ樂らなく果はつるより外ほかなかるべし今いまより我父わがちちの如ごとくに恤あはむ御身おんみも亦別隔わかへたてなく子の如ごとくに思おもひ呉くれよ事成ことなりし後の世界せかい半分はんぶんの御身おんみに與あつて三千人さんぜんにんの美人びじんを侍かしつ榮えい耀ように樂たのまん事最ことごとく早はや遠とほきよも非あらずかし夫それに附つけても第一だいいちの妨まげの世尊よきなり御身おんみ世尊よきさへ亡なし給たまへば今日けふよりも心こころの儘ままなる予まど語かたる所ところへ一人ひとりの外道げだう忽然あたらと現あられ出て一座いざの者ものに述のべやう私わたくしし事ことの勞度らうど舍しゃの家臣かしんなるが過あやつる日波斯匿王ひべしのかむぎ祇陀園ぎだえんを世尊よきに附屬ふぞくして伽藍がらんを建立こんりうするとあれは夫それを種々しゆしゆに妨まげしに竟つひに佛ぶつ家けと外道げだうの術じゆつを競けべて勝かちたる者に賜たまふとあれは佛家ぶつがの方に名なを得えたる舍利弗せりふを敵手あいてに勞度らうど舍しゃはじめ六師ろくしの者ものの晴はれやかに術じゆつを競けべしとところ無念むねんや負まけたる已のに非あらず六人ろくにん共殘ともらず頭あたまを剃そこぼたれて戒かいを受うけ今いまの佛門ぶつもんに入はいりたりと告つぐるを聞きて炙しや上じやう鴈やうの晴はれと怒いかりの色いろを現あらわらふ云いひ甲斐がひなき奴等やつらかな此度このたびの拘術かくじゆつの重おもき意趣いしゆあるが故油斷ゆだんするなど云いひ聞きしに負まける時ときの運うん



と云ども佛門の奴と成と論に絶たる腰抜めと斷をなして怒りければ提婆の其怒りを宥めん爲イヤ上薦悔むも益なき胸を痛く我れもさる頃伽蘭陀長者を語らひて建立たる堂舎をバ早世尊の爲に奪られたるが時至る迄の眼を眠りて堪へ居るなり今にも夫等は等の爲に那舍利弗目蓮めを逐逐る手段と云ふの此程も語りし如くに草薙女と岩屋の中にて不義せしと世尊へ告なば心す破門せずの置れまじ何卒善星殿俱伽梨を連れて今世尊の須達が建し祇園精舎に在なれば彼處へ赴て手術を施されよ然ながら力立の堅く慎み唯辨舌を以て衆人に舍利弗目蓮の不義せしより自然に世尊の法の挫る事を專一に示されよ又頃日茲へ出入する闍那と云ふ元世尊の舎人にて名を車匿と云し者あるが暇となりて茲へ來り伯樂の業をすれども貧苦に逼りて女房の馬逐するに聞茲の炙匿殿が辨舌にて漸の事にて味方に附れば是も頃て一廉の働きを見する約束あり其の娛みよりも其方が智略を疾く見たしと賞つ賛しつ頼ければ固より邪の善星なれその易き事なりいざさらば我手並を見すべしと語れば俱伽梨の最面白し私しが謀計も亦善星様の御覽われ杯と悪も疑ふ二人の前へ炙匿の一つの包を持出ほんに勇しきも二個に好き餓別を致すべしコハ我秘法にて製法する蠟燭なり是に灯を燈し

て凡そ一寸程燈れば雷火發して邊りの未塵も焼亡ぶるなり若し事の適いぬ其時には此蠟燭を敵の方へ投附れば鉄炮の如くなりぬ是迄にも試して利を得たる秘法の品ゆへ大事に持れよと渡しければコハ珍敷飛道具哉是があれバ千人力にも勝りける然らば二人の眷屬も我と俱に往て舍利弗目蓮と詰問きを致すべしと云ふ間に容を變化して猫とは見へぬ女を引連れて祇園精舎へ赴きけり「扱又祇園精舎にての世尊の無上菩提の説法を説しめらるゝより有心の輩老若男女日の參詣彌増ぬ或時にお弟子を引連れ給ひて彼處を托鉢遊さるゝに予人々山をなして其の混雜言ん方なし時又善星比丘と俱伽梨の臣の二人の女を引連れて順て祇園精舎近く至りしに山の如く人々の集り居るを見て遣の何事やと商人に聞ければ其方の未だ知ずや三界の教主釋迦牟尼世尊自ら托鉢あそびさるゝに依り人々之れを拜せん爲なり實に宜折に茲を通らるゝ予急ぎ佛に近附て二世安樂のお十念を授かられよ國又聖人在時に商人まで心直はなるに引替て此一群の者共互ひに唾を吐て片邊にのみつゝ世尊の光景を咏て居たりける扱世尊の程もなく祇園精舎に立戻りて直様に御還りを待受たる參詣の人々の爲に御説法遊ばされけるに何の間にやら彼の四人の惡者共の法座の中に紛れ込て順て御説法半



ある所へ善星比丘の冠り物の儘にてつかくど世尊のお前へ近寄るところを目蓮の疾くも之れを見附てまづまれくと云つゝも群集の中を押分立出て取支んと爲ければ矢に無き拳を以て打叩けバ目蓮の駭きて何者なるや斯る尊き法座を乱暴する無法者と又取支んとする時に冠り物を脱棄て己れ我を見忘れたらバ名乗て聞さんハア遣ハ善星様なるか何の間は何様して茲へ來られしチ、足が有バ歩行て來たり子が父の前へ出るに己等達の入らざるも世話なり説法最中の座あれバ我も己れに横而頰夫れ難有く受賜のれと又振上る後より手を押ゆれば見返りてヤア己れの舍利弗なるかなぜに留めるや今に見よかし己等二人の衣を剝取て追拂のせる事のありぬサア其處放さぬと踏殺すと論に絶たる舉動なれども兼て知たる惡比丘なれば氣任せに打棄つゝ其邊りを護りければ善星の直ちに世尊の前よりイみて世尊の虚を吐給ふか又實を説給ふか夫を聞くと難じければ世尊の瞋らせ給ふ氣色も無く我説法の毛筋程の偽りなし若し偽りあらバ天地の神の眼前に阿鼻地獄へ墮し給ふと宣へバ善星の天地の神や阿鼻地獄の何處に有か覺束なし若し偽りなくバ問ふ事のありぬ最前説し法門に五戒の中にても生たるを殺すを以て一とするよしなるか夫が實ならバ五戒十戒を持ち給ふ御

身の何ぜに酷き殺生を致すにヤアく茲に群る愚人共よ世尊の法に偽り有との論の扱措實地を見て悟れかし最前世尊が托鉢して戻り給ふ足の跡に許多の虫蟲共が踏殺されてあるにこそ斯いふ善星が詞に偽りなくバ今よりして我を信仰せよ疾く見て參るべしと大音に罵りければ群集の人々の有間敷事とん思へど皆々其處へ行程に參詣の者に引續きて御弟子も馳行て見てけるに實に御足跡に種々なる虫どもの死て有ければ皆々大に駭く其中にも善惡半復の輩は靦面に世尊の法の偽りなる證を見てければ即座に心の替りて扱ハ提婆が新佛あるうと世尊を嘲る者もわり又疑かたまりし信者の世尊の何しに虫蟲を踏給ふや道の固より人の歩行ためなり踏るゝ虫の命を知らぬゆへよこそ命が惜くバ道の片邊なりとも走り往ぐよし是りや世尊の罪にのならぬと手前勝手の理屈を附て人々私語者もわりぬ然バ御弟子達の立返りて此儀を實と言バ世尊の名折となり又虚なりと云バ善星様の争て夫なりに致すべきぞ那の氣質なれば必ず虚なれば俱に來ひとて我々の首筋取て連來りて是が虚うとて鼻面をこすられるの今見るやうなりア、何と言んと只忙然たる其所へ舍利弗の馳來りてコハ各々方向を問取召る予見分ふ來りかがら何ゆへ有無を告ざるや然バ斯の如くに虫どもの



踏れて死てわれ何と言ん當惑せりといふに予舍利弗の死たる虫を死たると云に何の當惑があるべきや扱の死たるを以て生たると言んウイヤ夫の以ての外なり譬へ世尊の御爲悪くも實を云グ佛門あり疾く是を見に來し輩の今祇園精舎に來りて喧しければ世尊の諸人の惑ひを開かせん爲に其死たる虫どもを持參せよとの仰せなりいざ其虫どもを取て返られよと示されて弟子達の赤面ながら其虫どもを紙に押包て急ぎ御寺へ返りければ世尊の其包たる虫を請取給ひてコヤ善星體に聞我足裏に千輻輪の相われバ道を往にも空を往と同じく地を離るゝ事四寸なり其路に當る地には必らず路の印文自然と附現れて其中に居る虫の我ろ千輻輪の光りを受けて七日の間安穩にして永く害せらるゝ事なき者を奚ぞや私の踏殺す謂れやある踏ざる足跡に虫の死たるの正しく汝が惡心にて虫を殺して後より入し又疑ひなし斯る惡事を施す者なれば豫て靈鷲山に留置しに何う山を脱出て茲へ來り斯の如き所業をするの最憎に尙ほ余りわれども汝が惡心より殺したる虫の僥倖にも願はずして千輻輪の光りを受けバ再度生て此後永く鳥獸にも食れずして飛遊ぶを見よかしとて其包を開き給へバ今迄死せしと思ひし虫どもも鬚を動し羽繕ひしつゝ、残らず庭面に飛立つゝ實に嬉

し氣に飛廻りく頼て天の御空へと飛上りければ善星の一言も無く只呆れ果て見取けるゆへ御弟子達の嘖と歎息を繼て皆々悦びぬ偕又舍利弗の參詣の者に向ひて人々之を見て尙ほ信心を起すべしと呼べる時しも彼の俱伽梨の滿座の中を押分出世尊の前へ手を拱て眞に駭き入たる佛の功德の感ずるに余りありぬ道の些少なから法燈の替りに獻じ奉つる蠟燭なれば何卒是を照し給へ我功德にもなるなんと差出せば目蓮の聊り不審に思へバ此れ御身の開も何處の者にや最前より人陰にのみ居て世尊を拜する様もあくして今是を獻ずるより何り謂れの有にやと云を聞て善星のチ、其の謂れ有どもく虫を殺せし我徒らなり其徒らも茲に在る舍利弗目蓮と比れば同日の論ならずと云を聞て舍利弗の胸に堪へ兼て御身の是まで種々の惡事をすれども世尊の血脉なるがゆへ穩便に已濟して置バ附上りて云ふ事にもよれ我等と目蓮を徒ら者との何事予今世尊の御前に於て其明りを立すに置べき予と詰掛れば目蓮も面に筋を出してサア我々の身に傷の付明りを立よサア證據有バ出して見せよといふに予チ、催迄促もあし疾くより茲に其證據の持參せり夫れ俱伽梨二人の女を引合せて面恥を掻せよと云ふ下より俱伽梨の彼の二人の女を呼出してサア此二人の女ころ己等が不義



の相手なり論より證據を出されて、余もや今の分疏の有まじきと冷笑へ、舍利弗目蓮の件の女を見て吃驚ヤア其方の過つる頃岩屋の内にて雨合せし時熟睡居りしゆへ眼を覺させや  
りし女ならずや开も此處への何の仔細ありて来るにやと聞ければ一人の女の舍利弗の衣の袖を面より押當て實に人多き其中にて面見らるゝも恥しきことさから空定めなき村雨の媒妁にて雨舎に他生の縁の袖枕轉び寐せし其袖の乾く間もなく戀焦て夜の夢盡の又現に月日を送りしが何處に居給ふ御身やら便るよすがも無りしに茲て逢たの盡ぬ縁なり何卒妻に持給へど泪を溢して口説ける又一人の女の目蓮の膝に身を投伏て仇と契りと恨しに焦るゝ念の届てや茲もて面會することの嬉しきよ最早今より離れぬせぬ濡ぬ先ころ露の身の今の他眼も憚らず不便の者よと一言なりとも言て給へ其見ぬ面の心根が聞へさせぬと嘆ち泣にぞ泣にける此時俱伽梨の大音に世尊に向ひて如何に世尊今御覽づる如くなり箇様な者を長老の一老のと召仕るゝこそ不辨けれイザ即座に衣を剝取て傘一本齎せて追拂われよと言ければ世尊の其返答だま爲し給はずしてニヤ舍利弗目蓮聊る恐るゝ事勿れ左にわれ諸人の目前に於て身に科なき所を見するよ好き手本ありぬ昔五百の仙人の中より定光と云ふ者ありし

が雨を避んが爲に婦人の家に舍しりバ余の仙人共定光の女を犯せしと譏りければ定光の十八變を悉して虚空に上りつゝ淫慾する者の斯る神變の成べきや迎身に科なき事を現せば汝等二人も其如くに神變を施して俱伽梨の疑ひを晴させよかし左なき時に俱伽梨の聖賢を誹謗せし科も依りて即座に阿鼻地獄に墮る時汝等も亦天神の咎を受くべしサア精淨の身ならば神通を以て其疑ひを晴せよと宣ふ下より二人の吠と答へつゝ庭前に走り出て身を踊らすれば身より光りを放つて虚空へ上りければ二人の女の忽ち二尾の猫の本性を現して雲を霞と飛去ける是を見るよりも善星と俱伽梨の恐れを抱き遽て逃出さんと立出しが何故にや俱伽梨の不思議とわら痛やゝ堪難やと云間に惣身に粟粒の如き物をふき出せしが瞬く間に脹上り漸々又脹ふくれて其處よりして血の流れ出るに善星も之れはわくみけるが今更打棄て往も本意おらずと躊躇所へ舍利弗の悠然と出來りて如何に善星様限り有命にて何迄惡意を施し召る速かに發起して眞の沙門となり給へ其俱伽梨こそ其眼面の佛罰なり御異見よりも好き手本ころ我と目蓮の日外雨舎して二人の草薙女の寐忘れしを起せしは是善心なり夫を惡心にて報するを我々の棄置とも佛法加護の諸神達の争見通しより成



らぬ予や有難くも世尊の慈悲を本となされば我に冤罪の科をきせる其俱伽梨さへ地獄へ墮  
 さじと御心配遊ばせば我等に神變を施させて其疑ひを晴させ給ふの何様かな心を善に歸せ  
 しめて未來の安穩に爲しむるを彼の未だ悟らずして尙ほ惡意を慕らするが故斯る身どのな  
 りたりと割つ口説つ諫ければ善星の俱伽梨の面へ唾を吐懸てヤア聞度もあし其よまひ言是  
 まて聞ぬ善星が今何を以て改心せん开も病と云ふ者に善惡の別ちあらんや但し此俱伽梨の  
 身が惡心にて斯る病を受る者ならん是より先に痛と云ふ病の名の誰を手本に附たる予や虚  
 を吐を方便と号けて數多の人を惑へすとも我何ぞ能聞ん其方が云ふ如く實に限りある身な  
 るが故勝手氣儘に世を送るあり地獄へ往も極樂へ往も汝等が手足を借のせぬ我足にて我歩  
 行なりサア俱伽梨氣を睨と我慢して歩行れよ須臾茲に居るのも耳の穢れなりとて俱伽梨を  
 引立て急ぎ行ハ舍利弗の再度詞なく立戻る其後より目蓮も亦馳來りて善星も種々と異見す  
 る其顔を三ツ四ツ力に任せて打擲つ後をも見ずして急ぎけるが俱伽梨の惱に足元の悪く  
 てドウト轉べバ善星も俱も其上へと轉掛れば豫て二人が懷中に秘置し蠟燭の雷火を發して  
 響き渡れハ立どころに火焰の吹出て二人の者の是に膚身を燒焦されてあら堪難や苦しやと

云ふ聲を限り不思議や其處の大地の割て其まゝ地中へぞ墮なりける○茲の名高き驛路なり  
 馬に乗んせ荷物を附んと花に群る蜂ならて口に甘味の持ながら尻に針ある雲介の中にも男  
 勝りの女馬士保鉄腹の天蓋と綽名を取て棒鼻に馬を繋ぎながら參詣の者と見るよりも「モ  
 シ旦那靈鷲山まで返り馬安く乗て下さらぬか」さうさ物の相談なり馬より其方の腹の上何  
 と乗ての吳まひか「御戯言を仰しやらすと一杯上つたと思召てはづんで下さんせ此の天蓋  
 のお頼で御座へます「イヤおつうな女の名だ天蓋とい遣りや己等がお山へ上る者ゆへ佛道  
 てやらかする「イエ」左う云ふ譯ての御座へません私しハ能お客も吸附て乗ますゆへ雲  
 介仲間にて天蓋と綽名を呼ます「如何様雲介にも學者がある故駒をお寺にての天蓋と云ゆ  
 へ吸附馬士を天蓋とい聞へた」サア其間へた所て乗て下さへ「其名を聞てのいよ」お  
 主に乗度定めて駒と云れるよの旨ひ所が有う「夫りや旨ひ所も座ひますから馬に乗て下  
 さへサアも荷物を附まじやう「イヤ待て下さへお主が云ふ通りに御山へ上る者が馬を苦め  
 ての信心に成ぬゆへ此次に乗まじやう」どんな間違ひを仰しやるぞ能く考へて御覽じろ今  
 旦那が乗て下さればまづ私しが命を繋ぐも飯が食られ馬も好物の豆に有附ます乗て下さ